

# 第11回京都大学全学教育シンポジウム

## 京都大学における教育の将来像を問う

—第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する—

### 報告書

2007

## 目次

1. 開催の趣旨 .....	1
2. 日程 .....	2
3. オリエンテーション .....	4
4. 総長基調講演「京都大学の今を知る」 .....	9
5. 問題提起 .....	42
6. 分科会報告 .....	58
(1) 各分科会報告 .....	58
(2) 全体討議・まとめ .....	91
7. アンケート結果について .....	116
8. 参加者名簿（分科会別） .....	129
(参考) 部局・役職別参加者数 .....	131

※ 部局名・職名は平成 19 年 9 月 1 日現在



## 1. 開催の趣旨

国立大学法人化後、第Ⅰ期中期目標・計画の年度評価が4回目を迎える今年度は、計画終了時の評価のための作業の開始、さらには7年に一度の「認証評価」も受けなければならない。5年目の来年度には、国立大学法人評価委員会による訪問調査を含めた「暫定評価」が行われる。これらの評価は各学部・研究科をはじめとする大学の教育活動に関するものが大きな部分を占めている。教育をおろそかにしてきたとは言わないまでも、まず研究と考える教職員の多い本学にとり、避けて通れない教育評価は厳しいものになるだろう。

本年6月の教育再生会議第二次報告において、教育の質の保証、大学の国際化の促進、大学の機能別分化、教養教育の充実、学士課程の見直し、大学院教育の改革などの提言がなされているが、2005年中央教育審議会が答申した「我が国の高等教育の将来像」と共通する内容が多い。そこには、GPA制度の導入など単位・進級・卒業認定の厳格化、学部3年修了時での大学院進学、入学時期の弾力化や英語による授業などの国際化のための環境整備、学部段階における文系・理系の区分にとらわれない教養教育の充実など、具体的な事例が列記されている。また、これまでは各大学の教員数に応じて比例配分されてきた運営費交付金の領域にも競争的環境を導入し、競争的資金を大幅に拡充するとしている。運営費交付金は、再来年度2009年度の次期中期目標・計画に向け各大学の努力と成果を踏まえたものになり、教育・研究面や大学改革等への取組に対し、国立大学法人評価の結果に基づく大幅な傾斜配分となる可能性もある。

教育面において、教育再生会議が掲げる「国際化や教育実績」などの大学の努力に対し交付金が手厚く措置されるのであれば、研究面の競争的資金の獲得では圧倒的に優位な立場にある旧帝大が有利になるとは限らない。特に本学は現在の教育評価システムとは相容れない教育理念をもっていると見られがちであり、教育再生会議の提言に対し何らかの対策を講じなければ、教育に対する運営費交付金の大幅な削減という事態も招きかねない。

「自由の学風」のもと自学自習を基本としてきた本学の教育には、その一側面として、こういった状況にあってもなお、「自由」を隠れ蓑にした放任主義、教育をしないことが教育であるといった考え方、またこれらを容認し正当化するものが残存していることは否定できない。こういった土壌、風土は、優秀な学生のみを対象とした「エリート型」教育が通用した時代であれば問題とされなかったかもしれない。しかしながら、昨今の学生の意識や関心あるいは学力や勉強意欲の多様化・分散化という現実に直面し、京都大学といえども、大学教育への社会的期待がかつての「エリート型」から青年層の多数者を対象とする「マス型」、さらには年齢や職種を越えた万人が学ぶことのできる「ユニヴァーサル型」教育へと移行しつつある現状を前に、なんらかの明確な対応策を示さねばならない。

上記の本学を取り巻く環境は、「自由の学風」に基づく教育の根幹をも揺るがすものとなっており、その対応如何では、良きにつけ悪きにつけ京都大学らしい教育が失われることになりかねない。その一方では、本学に対し「ノーベル賞学者を生む」教育が社会からなお期待されていることも事実であり、今後の京都大学の教育が本来の意味での「自由の学風」の理念を継承・発展させうるかどうか、今まさに重大な岐路にさしかかっているとと言える。

今回の全学教育シンポジウムでは、評価、運営費交付金、学部教育・大学院教育、国際化、ユニヴァーサル化をキーワードに本学の教育の現状を認識し、第Ⅱ期中期目標・計画策定に向け、本学が今後進むべき教育のあり方を探ることにしたい。

### 【テーマ】

全体会議：京都大学における教育の将来像を問う

－第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する－

分科会：1. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題

－文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る－

2. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題

－理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る－

3. 学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る

4. 京都大学における英語教育の現状と課題

－グローバル化社会における英語教育のあり方を探る－

5. 学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題

－世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る－

## 2. 日程

### 9月6日(木)

- ・開会 オリエンテーション
- ・総長基調講演
- ・問題提起
- ・分科会討論Ⅰ
- ・分科会討論Ⅱ
- ・フリー討論

### 9月7日(金)

- ・分科会報告
- ・全体討論・まとめ
- ・閉会

(参考) 全学教育シンポジウム開催一覧

	日程	場所	テ ー マ		参加者			
			主	副 (分科会テーマ)	計	教員	事務職員	
第1回	H 8. 8.28 ～8.29	比叡山国際観光ホテル	全学共通科目をめぐって	・一般教育科目の内容、学生集団の変化 ・学生の実績の変化、教育上の難しい点 ・全学共通科目の具体的な問題点	・語学教育 ・教養教育とは何か	201名	185名	16名
第2回	H 9. 8.19 ～8.20	比叡山国際観光ホテル	教養教育について	・A群科目について ・C群科目について	・B・D群科目について ・人間形成と少人数セミナーについて	201名	186名	15名
第3回	H10. 8.20 ～8.21	ラフォーレ琵琶湖	学部教育から見た教養教育について	・少人数セミナーについて ・外国語教育に何を求めるのか ・新しい教養教育創出にむけて	・理科系の教養教育と基礎科目で何をどのように教育するのか ・新しい教養教育創出にむけて	197名	182名	15名
第4回	H12. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価	特にテーマは設定せず、「京都大学における教育評価」をテーマに討論	テーマ:教育実態とその改善	125名	102名	23名
第5回	H13. 8.31 ～9. 1	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価(授業評価・成績評価等)の在り方	・文系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価 ・ファカルティ・ディベロップメントの在り方	・理系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価 ・ファカルティ・ディベロップメントの在り方	178名	149名	29名
第6回	H14. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	新しい教養教育の在り方ー基本理念・実施機構・教育評価ー	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価「京都大学卒業」とはなにかー	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価「京都大学卒業」とはなにかー	240名	207名	33名
第7回	H15. 9. 5 ～ 9. 6	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“ミニマムリクワイアメント”をどう考えるか			240名	205名	35名
第8回	H16. 9. 9 ～9.10	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“質の保証”とはー教育の改善と評価の視点ー	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とそのためのシステムー全学出動体制は可能かー ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とそのためのシステムー全学出動体制は可能かー ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成	242名	210名	32名
第9回	H17. 9. 1 ～9. 2	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価	・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりにどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか	・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりにどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか	229名	199名	30名
第10回	H18. 9.14 ～9.15	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場, ウェスティンホテル淡路	責任ある教育体制とは何かー京都大学における教育の将来像を問うー	・研究所・センターの教育参加に向けてー教育は権利か義務か?ー ・理系教育における6年一貫教育の実現は?ー理系における基礎教育科目と専門科目の融合ー ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?	・研究所・センターの教育参加に向けてー教育は権利か義務か?ー ・理系教育における6年一貫教育の実現は?ー理系における基礎教育科目と専門科目の融合ー ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?	240名	193名	47名

### 3. オリエンテーション

北村(高等教育研究開発推進機構長) 第11回になります全学教育シンポジウムをこれから開催させていただきます。

この全学教育シンポジウムは、もともと全学共通教育に関する討論をする場だったのですが、ここ数年は、全学共通教育に限らずに広く京都大学の教育について議論する場になっております。二、三年遡って見ますと、大体6割の方が初めて参加される方で、2回目の参加者の方を入れると大体75%、4分の3になります。簡単にこのシンポジウムの性格を言いますと、皆さんでアイデアを出して議論をしていただくことが主眼で、ものを決める場ではないということです。いろんな討論を通じまして情報を集めていただく。いま京都大学を取り巻く状況も大きく変わりつつありますので、それを知っていただいた上で、これから京都大学の将来の教育をどうしていこうかと考えていただく場です。ここで出てきたアイデアあるいは皆さんが得られたコンセンサスを次の機会の正式機関の議論などに生かしていこう、あるいは、将来の教育制度に生かしていこうということが主な趣旨です。

最初に、オリエンテーションをいたします。丸山理事に、本年度のシンポジウムのテーマ等について、大きく方向づけをしていただきたいと思います。

では、丸山理事、よろしくお願いいたします。

#### オリエンテーション

理事 丸山 正樹

皆さん、暑い中ご苦勞さまでございます。最初に、北村先生が今おっしゃったことを、あらためて繰り返しますが、この二、三年、誤解がありますので、それは解きたいと思えます。これは「全学教育シンポジウム」でございまして、「全学共通教育シンポジウム」ではないということです。出発点は全学共通教育のシンポジウムだったのですが、徐々に変わってきてまして、この二、三年は、尾池総長もはっきりと意識的に、全学の学部教育、大学院教育を含めた意味での教育シンポジウムであるとおっしゃっています。それをまず踏まえてご議論をお願いしたいと思います。



それから、私と北村先生その他何人かの方にご協力いただいて、今回のシンポジウムをどのように持っていこうかということ、総長とも相談しながら考えてきたわけですが、お手元の開催要領の中に「趣旨」が書いてあります。こういうものをつくらせていただいて、それに添って分科会でどういこうことをやるべきかというようなことを考えてきたわけですが。

すでにこういうことについては、いろんなご批判もあります。後で申し上げますが、あるグループにつ

いて、「何でこんなグループをつくるんだ」というようなご批判も、私のところに聞こえてきています。今から、先ほど申し上げた趣旨あるいは分科会での討論の目標等についてのお話をいたしますが、これは決して強制するものでもございませんし、私たちが考えたときに、こういう方向を考えていただけたらありがたいなというぐらいの趣旨でございます。

その意味でのオリエンテーションでございますので、決してそれに縛られるものでもないし、分科会の中で議論が出てきたときに、「あれっ、これはちょっと方向性が違うんじゃないか」とお考えになってもそれは全くかまいません。ある意味で広い視野で実りのある議論をしていただければ、それは非常にありがたいというのが基本的な趣旨でございます。

先ほど申し上げた「趣旨」の最後のところに、「今回の教育シンポジウムでは、評価、運営費交付金、学部教育・大学院教育、国際化、ユニヴァーサル化をキーワードに本学の教育の現状を認識し、第Ⅱ期中期目標・計画策定に向け、本学が今後進むべき教育のあり方を探ることにしたい」と、非常に広い内容です。ただし、後ほど北村先生からお話があると思いますが、そろそろ第Ⅰ期中期目標・中期計画期間のまとめに入らなきゃいけないという状況にあります。それをスケジュール的に考えていきますと、我々はそろそろ次の夢をふくらませなければいけないということになるかと思っておりますので、その点だけかなり大きなポイントであるをご理解いただきたいと思っております。

分科会を5つ、実際上は6つですね。2番目のテーマについては2つに分かれている。これは人数の関係で2つに分けてありますが、それぞれについて、私たちが考えたことを申し上げます。

最初の1と2、これは議論のきっかけにさせていただきたいという程度のことでございますが、京都大学の教育の理念として、開学以来ずっと言われてきたことに「自学自習」という言葉がございます。正直なことを申し上げまして、京都大学が自由の学風、自学自習と言ったときに、ここにいらっしゃる方がそうだとはいませんが、京都大学の教員の中には、その自由を隠れ蓑にして、要するに学生が勝手にやったらいいんだということで、必ずしも教育にご熱心でない方がいらっしゃることも否定はできないだろうと、残念ながら考えざるを得ないわけでございます。ここの趣旨は、そういうことよりは、実は自学自習という京都大学の基本理念を貫き通し得るかということ、特に先ほど申し上げました第Ⅱ期中期目標・中期計画期間、そのあたりで本当にそういうことを貫き通して実現できるかということが、かなりのポイントであります。

これは後ほど北村先生から詳しいお話があると思いますが、まず1つ言えることは「外圧」がございます。いろんな意味で「高等教育はこうあるべし」といったようなもので、「それに従いなさい」、あるいは「従えば何かインセンティブをあげますよ」といったような外圧がずいぶんかかってくることは、皆さんもひしひしと感じておられると思っております。これが相当程度自学自習というものには合わない。それは後で



北村先生がお話しになるとと思いますので、それにくみとっていただきたいと思います。

もう一方の問題があります。その自学自習ということを私のイメージで見ますと、それをはさんで「外圧」があり、もう一方に「内圧」と私が言ったら、先ほどある方が「内部崩壊だ」とおっしゃいましたが、正直言って内部崩壊的な現実がある。

2年前、この会で私は2006年問題をテーマにして、基調講演をさせていただきましたけれども、その中の結論として、これは私だけではなくて、当時機構長あるいは副機構長をやっておられたかもしれませんが、西田吾郎さんと相談しながら導き出した結論と言え結論なのですが、京都大学の学生にとっての2006年問題は、むしろ10年以上前から起こっていることである。学生たちの自分自身の頭で考えるという意味での思考力の低下、それからもう1つ大きな問題として、我々が教育しながら思っていることは、大学において勉強する仕方がわかっていない。高等学校までに、与えられたものを取りあえず消化していくというようなことを繰り返した学生さんたちには、大学で先ほど申し上げた自学自習といった本当の意味での勉強をするということがわかっていない。そういうことが現実に京都大学の学生の大多数で起こっている。

そのような内部崩壊的な状況の中で、じゃあ我々の理念としている自学自習を実現するには、何か方法はあるのか。これは教育課程、例えば少人数教育をするといったやり方とか、あるいは導入教育をどうするかとか、いろいろなことが考えられますが、そのこと自体がいいか悪いかもありますし、そのこと自体に効果があるかどうか問題があります。そのような意味で、皆さんの中から「こういうことはどうだろうか」といったような建設的なお知恵を頂ければ、これは非常にありがたいことだと思っています。

そういうことができないならば、私の考えですが、今の京都大学の学生の気質、学力からいって、自学自習ということを少なくとも学部段階で実現することはまず無理であろうし、それを何とかする方法がないならば、我々の理念もあるいは教育課程、教育の仕方も変えていって、京都大学をいわゆる学校化という方向に持っていかざるを得ないのかなというような危機感を持っています。そのあたりのことを巡って、皆さんにご議論いただいておりますので、お知恵を出していただければ非常にありがたい。

これは、最初に申し上げましたように、「これをしなさい」というつもりはございませんので、その点はもう一ぺん繰り返します。

それから、「学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る」ということですが、昨年は似たたぐいのテーマで、学部・研究科の教員と研究所に所属する教員半々ぐらいで議論をいたしまして、私はほとんどそこにいましたけれども、歴史的な経緯もあるのですが、初めからちょっと対決姿勢的な感じになって、実りあるものになったかなあ、どうかなというような感じでした。そのようなことも考えまして、今年は基本的には研究所・センターの教員だけに集まっていただいて、とりあ

えず研究所・センター側からこういうことについてどこまで協力できるか、あるいは協力できないか、協力するにはどうしたらいいか、例えばどのような手だてを学部・研究科がやるべきかといったようなご意見、要求でもけっこうです。そういう何らかの意味で具体的なものを出していただければ、私としては非常に成功であったろうと思いたいと思います。

4番目は「京都大学における英語教育の現状と課題」でございます。京都大学の英語教育につきまして、今朝、バスの中である方と「この教育シンポジウムであがった成果は何だろうか」ということでお話したのですが、その中の、唯一とは申しませんが、非常に大きなポイントはこの英語教育ではなかったかなと私は思っています。それは、ここに確か水光先生やベッカー先生がいらっしゃいますが、この教育シンポジウムを始めたところ、「京都大学の外国語教育はどうなっているんだ」と、学部側から何とかしろという強い要求が出まして、それに対して英語のグループ、英語に限らず外国語教育担当のグループから非常に強い抵抗も出ましたし、あるいは非常にしっかりとした準備をしていただいて、具体的な提案も出て、「これでどうだ」というようなお話が出ました。それは基本的には、それまで語学教育というのは、もともと教養教育の一環であるという視点から、語学のスキルという面をむしろ抑えている方向が非常に強かった。それをスキルという意味での語学を表に出して、本当に使える語学を教育するという面を、それで全部にするわけじゃありませんが、そちらにある程度シフトしていくというようなご提案だったかと思えます。

それがほぼ10年たって、私の見るところ相当実現してきたと思っています。例えば英語教育の内容が非常に変わってまいりまして、実は京都大学の英語教育の改革ということで、全国的に非常に高い評価を受けています。ところが、残念ながら京都大学の中で知られていない。ということはどういうことかということ、ここまで来たんだから、学部の先生方はそのことを前提にして、3年生、4年生以降の教育をしていただきたい。その中で「さらにまだ問題がある。ここをこうしてくれないか、そういうことをするのだったらこうしてくれないか」というようなことが当然あるわけですから、その間のインタラクションを十分取っていただきたいというのが、私の考えたこのテーマの趣旨でございます。

最後に、「学部教育の国際教育プログラムの現状と課題」ですが、これは国際交流ということで国際交流センターを中心として、ずいぶんやっておられます。いま日本の高等教育の中では、「少子化」というあたりも大きなドライビングフォースになっていると思いますが、例えば留学生の取り扱いというようなことについて、非常に大きなポイントになっています。それについて国際交流のグループから、例えば京都大学が多くの優秀な留学生を受け入れるにはどうしたらよいか、あるいは逆に我々が多くの京都大学の学生を外国に送り出すにはどうしたらよいかといったようなことで、非常に詰めた議論をしていただいています。そういうことについて、そのグループからのプレゼンテーション、あるいはパネルディスカッション

等を考えておられるそうですが、そういうことを踏まえて皆さんのお知恵を拝借したいと考えています。  
大体以上でございます。よろしく願いいたします。

#### 4. 総長基調講演「京都大学の今を知る」

総長 尾池 和夫

皆さんこんにちは。223名の教職員の皆さんと13名のスタッフの方にご参加いただいているということで、暑いときに本当にご苦労さまでございます。

北村先生が司会をしながら、さりげなく言われた言葉の中にいろんな意味がありました。まずは「京都大学を取り巻く状況はどんどん変わってきている」、裏返せば「京都大学の中はいつこうに変わらん」ということを言っておられるわけですが、(笑)それをどういうふうに変えていったらいいかというのが、このシンポジウムの目的であるということをおっしゃるわけだと思います。



これから分科会でいろんな議論をしていただくのに、私の考えていることは、あまりここで理路整然と述べるわけではないんですけども、絵にできてきているんです。実を言いますと毎年これをやっているのですが、このシンポジウムに向かって、私がちらちらと集めている写真やデータをスライドにどんどん入れていって、それを全部ここでお見せする。それから後いろんなスピーチのときにそこから選んでは使うし、ここで見られた皆さんも「あのスライドをくれ」とか言われるわけです。毎年そういうことをやっているとは大体定着してきました、ここで絵を見せながらしゃべるんですが、それが分厚い報告書になるんです。報告書になったときには、テープから起こしてくださるので、どんな絵を見せたか全然そこには出てこない。だから「この人は本当に悪い人でね」なんてことを言っても、それが誰かわからん、そういう報告書ができて非常におもしろいんです。(笑)テープから起こしたものをいちいち直しませんので。そういうつもりで過去の報告書を見ていただきますと、いろいろ想像をたくましくして見られるという仕掛けもございます。

今日はこういうタイトルで、「第Ⅱ期中期目標の策定に向けて」ということがキーワードとして入っているというところに、今年の非常に大きな意味がございます。今年までにやったことが第Ⅱ期の予算に反映するという仕組みが導入されておりますから、そのつもりで、今年いろんなことを仕上げないといけないという意識が私たちにあるわけでありまして。そのところを考えながら、今年までにいろんなことをやっておいて、それで第Ⅱ期に向けて、丸山先生もいろんな工夫をしながら、第Ⅱ期の目標をどういうふうにか、書くか、「苦労しなきゃいけないな」というのが正直なところのはずを、上手に言われましたね。「第Ⅱ期に向かって夢をふくらませる」。そんなうまい話かなと思うんですけども。(笑)いろいろ工夫をしながらお金を取るということにもなるかと思うんですが、そういうつもりでこの話を45分ほどさせていただ

きます。

そういうわけで、私が1年間ふだん見てきた京都大学の現状をこの機会に皆さんに見ていただきたいというのがこのスライドで、百何十枚ありますから、どんどんお見せしますけれども、終わりまでいかないかもしれません。とにかく学生たちは元気にいろんなことをやっていますという場面がいろいろ出てくると思います。私、口が悪いものですから、いろんなことを申し上げますけれども、あまり気にせんといってください。

これは七大戦の壮行会の場面ですが、今年は京都大学がこの体育大会で主管校を務めているんです。その主管校を務めているということもあまり先生方はご存じないし、この壮行会を華々しくやっているつもりでも、ここへ出てくる先生は2人か3人しかいない。京都大学の教員は学生を何とってるかといつも思うんですが、そういうところにぜひ参加して、せいぜい学生が何をやっているかをいろんな場面で、講義やゼミだけじゃなくて、ご覧いただきたいなと思うわけです。職員の皆さんにもお願いして、ここで一生懸命送り出して、「今年こそ1位になって優勝してください」って私は言ったんですが、現在何位にいるのか、成績がどれだけ取れているのか、私のところに報告が長い間、この日以来学生部から来ていない。そんなのでいいんでしょうかと、こういうことを時々言うわけですが。

東山先生に伺うと、現在1位だそうです。

国立大学法人というのはどういうものであったかということ、そろそろまた蒸し返して一度考えていただいて、そして第Ⅱ期に向かって何を考えればいいのかということを見ていただきたい。法人法の精神というものが忘れ去られがちでありまして、政府も忘れる、私たちも忘れる、市民も忘れるということになってはいけないのでありますが、そこにある、魅力ある教育をしっかりとやるためのものであったはずである。

1法人1大学というのは国立大学の特徴で、私立大学の学校法人は、理事長が1人いるといろんな大学が設置できて、学長が何人もいて、総長が1人いるとか、そういう仕組みがありますが、国立大学は1法人1大学の設置、しかもCEOと教学の長は同じ人でなければいけないという制度になっておりますから、そんな人物がいるわけがないと私は思うんですけれども、強制的に務めさせられるわけです。そういう制度が本当にいいのか、それも私たちは考えなきゃいけないだろうと思います。

このタヌキの絵ですが、タヌキが何でよく置いてあるかということ、「他を抜く」という語呂合わせであります。国立大学法人になるときに、私はよっぽど京大の門の前にタヌキを寄付しようかなと思ったんですけれども、遠慮しました。

まあ、こういう世の中で日本人はずっと育ってきていて、どこへいっても信楽タヌキはあるわけですから、そんなに気にしなくても、「競争的環境の中で個性輝くって、そんな矛盾した」っていちいち言わなく

でもいいかなと。この前も遠山さんに会いましたが、「競争させてつぶれるのを待つんでしょ」と言いましたら、「そうですよ」と、そういう会話が数年前に私との間でありましたけれども、いろんなことが仕掛けられて、「トップ30」という言葉がいまだに企業の人たちの中には生き残っている。そういうことを知った上で、私たちはいろんなことを考えていかなきゃいけないと思うわけでありまして。

その中で「世界の大学になりたい」と、こういう学長さんもたくさんいらっしゃるわけですが、たくさんじゃない、今は国立大学は2人ですね。2人の学長さんがそういうことを言われるんですけども、私はそうは言わない。ピークがたくさんあって、すそ野が広い、積分するとすごい体積を持っている、そういう大学でなければいけない。この絵を見せたら、「富士山は日本一と普通言われているから、世界一じゃないじゃないか」と、この前東京大学の先生に言われましたけど、そうじゃないんです。日本列島は、私の専門から言うと、海の水をのけてしまえば世界で一番立派な山脈でありまして、ヒマラヤより高いわけでありまして。ですから富士山は世界一なんです。水をのければね。

そういう意味で某大学は世界一と言うけど、富士山だと、富士山になるのはできるんですけども、そのうちにマグマがたまってきたり爆発して、右側の絵にあるように、上が飛んでしまったり関東ローム層の土になるわけでありまして、世界一になっても爆発するからあまり意味はない。中部山岳地帯はジワジワと地震を起こしながらいつも高くなっていて、浸食されてもその分上がるので、高さをずっと保っているわけでありまして、京都大学はこの上の絵のような大学であってほしいと私は思っているわけでありまして。

どんな大学か。自由の学風というのは、河合隼雄先生の追悼の会で私申し上げましたけれども、河合先生も言ってました。「自由の学風って、わしの学生るときはそんな言葉誰も言うてなかった」「私の学生るときもなかったね」という話をしましたが、いつのまにかそういう言葉が外からつけられております。ありがたいキャッチコピーではありますが、それはそれで、自学自習の伝統をいかに立派に守っていけるか。これは丸山先生の言われたとおりであります。

いろんなことを書いてあります。後ほどいろいろ出てくると思いますが、要するに京都大学、変えてはいけない所もあるし、変わらなきゃいけない所もある。

そして世界の先端を行くたくさん研究が行われている。ここが大事なんですね。大学そのものが世界のトップになるなんて、そんなことは全然意味がないことではありますが、その大学の中に世界のトップをいっている研究があり、いろんな先生がいる。このことをしっかりわきまえておかなければいけない。これを守っていかなきゃいけないと私は思うわけでありまして。だから、「世界の大学になりたい」と言う先生がいると、「いや、私のところは世界一がいっぱいあります」といつも言うんですが、そのほうが私はいいと思っています。

例えばどんなものがあるかという例を、時々変えるんですが、「京」という字を入れて京都大学のウェブサイトを検索しますと、世界中の石碑にある「京」という文字がずらっと出てくる、そんなデータベースが京都大学にあるんです。こんなん何の役に立つかわからんですけども、(笑)とにかく、表札をつくったりするときにはけっこう使えるし、おもしろいし、遊べるわけですが、こんなデータベースがずっと出てくる。これが京都大学の特徴でありまして、広中先生と、「八重桜って花びらがいっぱいあるけど、ガクは5枚しかないねえ」「これは式どないなんねん」「パラメーターを0.3にしたら5つが出てくるよ」と、そんなことを議論しながら酒を飲むわけでありまして、一番役に立った数学に対して伊藤清先生に第1回のガウス賞が与えられましたが、名誉教授の先生方にもいろんな人がいて、いろんなことをやっている。

私が入学式で申し上げたことが時々出てきますが、世界地図をダウンロードすると、南極がないんです。だけど、やっぱり京都大学の学生さんたちは南極大陸がしっかりある地図を使う6大陸派になってほしいというようなことを申し上げます。京都大学は昔「探検大学」と言われたこともあります。昭和基地越冬隊長から始まって、たくさんの隊員を送り出しておりますし、私の研究室からは初めて越冬した女性隊員が出ました。そういうわけで、南極を大事にする6大陸派の学生に育ててほしい。

左下の地図は、国際交流担当の西村理事が「そんなことを言ったって6大陸を書いた世界地図がなかなかない」と言うもんだから、わざわざ、私のデータベースから地図を書いて送ってあげたのがこの地図であります。最近、南極も入れてくれるようになりました。

9400万年前の地球の地図を見ていただきますと、大体南半球と北半球に大陸が均等に分布しておりまして、釣り合いが取れているんです。このとき、地球はちょっと傾いて太陽のまわりを回っていますから、これだと気温の変化とか変なことが起こらないのですが、現在の地球は南極大陸からプレートがどんどん離れていく運動をしていますから、北半球の中緯度に大陸が集中してしまっているんです。そのために氷河期と間氷期が発生するようになりました。これはほんの100万年とかの最近の話で、46億年の歴史から言うとなんて最近なんですね。そのためにいろんな現象が起こっている。社会現象まで南北問題というふうになるわけですが、こういう地球というものを南極大陸も含めてしっかり理解してものごとを考えていきましょう。

例えば100年で20cm海面が上がったという議論をよくしておられますけれども、そうじゃないんです。1万6千年か2万年ぐらいの間に120m実は上がっているんです。海面はこの氷河期と間氷期の間で百何十mと変動する。それが地球の姿であって、その中で、今100年で20cmの議論をしているのであれば、こういう基本的な認識のもとにいろんなことを考えていく。これが大学でなければいけないでしょうという1つの例であります。

そして根本的な問題として、日本列島は動き回る場所である。活断層運動があつて淡路島が成長します。

六甲山が高くなります。地震が起こらないと淡路島はどんどん浸食されて低い島になってしまうわけです。京都も活断層が6本もあるから立派な盆地になっているのであって、地震のおかげで京都があるわけです。その動き回る大地の中で大学教育を考えていくわけで、それを「変動帯の文化」と呼びたいというわけでありませう。

よく、大学のモデルとして、イギリスの大学だとかMITだとかハーバードだとか、オーストラリアが出てきたり、カナダが出てきたり、いろんな大学が引き合いに出されます。ヨーロッパもいっぱい出てきますけれども、この大地震の分布を見ていただきますと、そのモデルになっている、いま議論の対象になっている大学は、みんな大地震のないところでありまして、中国やこれから伸びようという日本や韓国は、みな、この地震の起こる、動き回る大地のところの文化を支えていかなければいけない。そういう大学であるという基本的な概念を持った上で将来を考えていきたい。

ストックホルムでノーベル賞が生まれたのは、岩ばかりだからダイナマイトが必要であった。日本は鉄があつたら都市ができたわけですから、そういう文化のもともとの違いがあるわけです。「ザ・ロックス」というシドニーにあるところは、岩ばかりである。そういうところで育つた文化と動き回る日本の大地で出てきた文化とは、やはり根本的に違ふ。それを、ただ、どんどん輸入してくればいいのかというところではないでしょうということです。

日本は動き回るところで、100年前にずれた活断層の跡を今でもちゃんと守って、境がずれたまま畑を耕しているという民族なんです。中央構造線は四国を横切っておりますし、京都大学の左上の北部のキャンパスを掘ってみると噴砂現象の跡が出てくる。縄文時代にどうもここで砂が噴き出したらしい、そういうところにありますし、雲仙普賢岳は火砕流を起こす。この前行ってみました。平成新山というのを見ましたが、その平成新山を見ながらチンパンジーが74人熊本県側で暮らしておりまして、そこも京都大学の研究の1つの拠点になるわけでありませう。

花折断層ですが、東山の麓を掘ってみると縄文時代の地層がみごとにずれておりまして、その跡で地震を起こしてこの活断層はずれた。それだけ吉田山が、また地震のたびに2mぐらい上がっていく。こういう構造がわかるわけでありませう。そういうところで非常に分厚い堆積層が発達するわけだ。岩盤ばかりのストックホルムとは全然違ふわけで、ここにたっぷり非常に豊かな地下水ができます。琵琶湖よりもたくさん水を持っているわけだ。

そこで半導体産業が生まれますし、いろんな京都の時代時代の産業が出てくるわけでありまして、京大のビールもそこから出てくるわけでありませうが、1195年には茶の湯が始まった。この茶の湯の文化を大学の近くで味わうことができる。さっきの壮行会するときも学生さんに請われて舞妓さんが来てお酌をしてもらったんですけれども、そんな大学も珍しいやろうと思うんですが、この茶の湯の文化もしっかりと



おつきあいをしていきたいと思います。いろんな面で地下水が出てきます。この写真にあるのは、和紙をすいてみた。この和紙も豊かな水がないとできないわけで、そういうものもそこから生まれてくるわけです。

私の書いた「俳景」とか「続俳景」とか、この本も、読んでいただきますとそういうのが出てくるんですが、せっかく聞いていただいたので、この期間中にお申し込みいただきましたら、まだ何十冊か残っていますから、言っていただいたら差し上げますので、どうぞ申し込んでください。

そういうのにちょっとでも学生を触れさせるためにというので、教職員証あるいは学生証を見せると、国立博物館に常設展ですけどただで入れるようにいたしました。そして裏千家の資料館にもただで入れる。そこに行きますと、一流のかなりの腕前の方がお点前をしてくれて、おいしい和菓子とお薄を頂ける。普通だったら 500円払わんといかんのですけども、職員証・学生証で毎日通っておやつを頂いても大丈夫という仕組みでございますから、ぜひご利用いただきたいと思います。

外国の学生さんたちにこのことを教えてあげてほしいのですが、京都大学の広報のためのウェブサイトは貧弱でありまして、英語でこのことがどこにも書いていないでしょ、たぶん。この「学生証を持っていったらただでお菓子が食べられてお茶が頂けるよ」という制度を日本語でしか書いていない。1,200人の外国人の学生や 2,000人の研究者がいて、せっかくこんな制度を一生懸命考えてつくっても、どこにもその情報がない、そういう大学ですが、いや、「そういう大学ですが」というのが困るんですけど。

人工衛星から3つのキャンパスを見ると、こういうふうになっておりまして、盆地と山の境に活断層があって、ずれるわけです。そのずれたところが四角く盆地になっているわけでありまして。南のほうは奈良の盆地、左下が大阪の平野であります。今もすぐその西側でずれたところで会をやっているわけですが、日本の、特にこの西南日本の内帯と言われる地域は活断層帯でありまして、動き回る。桂のキャンパスは西山断層、吉田キャンパスは花折断層、宇治のキャンパスは黄檗断層という固有の断層をちゃんと近くに持っておられますから、それぞれ地震対策はなさっていただきますようにというわけでありまして。

その大学の大きな目標、「教育・研究・社会貢献」、私が総長に就任したときは、実はそれまで「研究と教育」とずっと言ってこられたのを、法人化するから「教育と研究」と言い換えますと言ったんです。2年目から気がついて、これはまずいと思って、「医療」というのを付け加えて、「実はこれは社会貢献の意味です」と言うようにしました。その話をずっとし続けておりますと、教育基本法までそういうふうを書くように変わりましたので、よかったなと思っているんですが、世界の趨勢であります。

それでお願いしたいのは、これは 100年間に起こったマグニチュード4以上の浅い地震の分布図であります。日本はこういう国でありますから、地震はどこにいても起こるのでありまして、2006年問題じゃなくて2038年問題、確実に巨大地震の南海地震はその頃起こるであろうという予測であります。それに向か

って今後30年以内に震度6弱以上で揺れる確率の分布をここに出しておきますが、京都は3～6%の範囲だろう。3%ぐらいだろうとしますね。そうすると、30年で3%だったら、ひたくりとかスリとか自殺とか、そういうものよりはちょっと高い。このぐらいの確率でありますから、この発生に対してはいろんな対策を具体的に、少なくとも火災保険とか傷害保険とか入っている先生には、それよりは高い確率やということを知っていただいて、地震対策、震災対策をするというふうに目を向けていただきたいと思います。

10月1日から緊急地震速報が一般の方にも配信されます。それを受ければ、少なくとも自分の足元の活断層が動いたときはあきらめなきゃしょうがないですが、大体はちょっと離れたところで地震は起こりますから、そのときにいろんな処置ができる。例えば、真ん中の上にあるように、手術をしかけているところはちょっと待つ。揺れが終わるまで仕事は待ちましようというようにすることができます。こういう信号がやってくるので、これをきちんと利用して、大学の中で原子炉を止めるとか、あるいは病院の制御をするとか、いろんなことができます。講義中、「いま速報があったので、ちょっと机の下にもぐりましよう」みたいな話もできるように、これから教育の現場でも考えてほしいと思います。

これが変動帯の文化であります。さて、京都大学の組織を見ていただきますと、何で総長と言うか。これは京都大学が規定しているものでありまして、学校教育法にある「学長」というのを「学長として総長をおく」と京都大学は決めておりますから、そういうふうに私は呼ばれているわけであります。これをいくら言ってもわからんのが文科省と国大協と某新聞社であります。朝日新聞だけは私の話を聞いてくれて、重役会の議題にしてくれまして、最近朝日新聞の記事には「京都大学総長」と書いてくれるようになりました。文科省の書類は「学長」で来るわけですが、そういうふういろんなことが決まっているということを知ってほしいと思います。

そして法人化した中でいろんな組織が京都大学の中で動いております。ふだん一般に見えるのは、氷山の上に出ている教育、研究、医療、病院、部局とか博物館、図書館で、それを支えるいろんなものがあるんだというので、私の考え方ではこういう絵になるということですが、これが日本や京都や世界という社会の中に浮かんでいる。その比重の比が大事でありまして、日本が薄くなってくると沈むわけです。そういうコントロールが外からもある中で、非常に不安定と言えれば不安定だし、安定と言えれば安定ですけども、そういう中でいろんな仕事をしていただいていると思います。

規模を見ていただきますと、教員 2,886、常勤の職員 2,361、5,247人の教職員、5月現在であります。学生は 22,758、学部が 13,381で国立大学で現在2位であります。10月1日から3位に転落をいたします。1位は大阪大学になるわけです。そういう変化もありますけれども、これは5月現在。

京都大学の歴史はいろんなところでご覧になりますけれども、「百年史」といってこんな分厚い本がいつ

ばい並べて置いてありますが、あれを読むのは総長だけだそうで、何かのときにいろいろ引用するのは私だけのようです。エポックは、設立のとき、それから分科大学が学部と改称されたとき、それから京都帝国大学が京都大学と名前が変えられたとき、そして後ろにちょっと書いてある大学院重点化をしたとき、それから2004年、国立大学法人、法人化であろうと思います。

学生数の変化を見ていただきますと、1920年頃、学部が導入されました。それから1945年・6年・7年と、その頃から新制大学に切り替わりまして、そして大学院の重点化が行われて、法人化が行われた。法人化に伴って学生の数が劇的に変わるということはないわけでありませう。

第19代の総長が岡本先生ですね。そこから20・21・22・23・24というのが私のところで、みんな私より元気な人たちであります、(笑) これだけ6人そろって並んだ写真はほかにはないとたぶん思います。これはなかなか貴重な写真です。

どれだけの卒業生に学位授与をしているか。学士の学位、修士の学位、専門職学位、博士、いろんな学位を出しておりますが、今年の3月での学位授与、博士は奇数月やっておりますから、累計を見ていただいたらいいんですけども。こういう式典、これも皆さん方はなかなか学位授与式に出ていただくチャンスがないので、雰囲気を見ていただいて。

これは推移であります、今年の卒業式の卒業生の数で、去年実はこの同じような1年前のデータを見せて、ここで申し上げた私の発言がかなり物議をかもしましたのでありますが、「工学部がやたらと多い」と言ったんです。ここで見ていただきますように、2,708人の卒業生の中で工学部の卒業生が900人、3分の1であります。これを実態として見ていただいたわけですけども、工学部の受験生が減ってきて、全国の大学の工学部の先生たちがずいぶん悩んでおられて、受験生が減って困っているという話をよくされますので、「じゃあ、定員を減らせばいいじゃないですか」と、僕が言ったことがあるんです。それが「工学部をないがしろにする発言をした」って、回って聞こえてきたんですけど、実はそういうことではない。

修士の学位の取得者数を、今年は少し詳しい話をさせていただきますが、こういうふうに見ていただきます。人数を見てもなかなかわかりませんが、よくひきあいに出されるアメリカの大学、イギリスの大学と日本と比べていただければいいと思います。博士の学位の授与者というのがあるんです。これを割合最近のデータで、同じような年のパーセントに直して比べてみれば、日本の特殊性がおわかりいただけると思います。修士の学位の取得者の分野別で100%に対して工学部が42%というのが日本、アメリカが10%、イギリスが7.7%で、例えば法律・経済等というところを見ていただくと、米英に比べて非常に少ないことがわかります。教育学の先生がどれだけいらっしゃるかわかりませんが、アメリカやイギリスに比べてずいぶん日本の教育学の修士は少ないということが、この数字にするとよくわかっていただけると思います。「何で教育学の修士が日本は少ないのか。それは教育がいらんからか」と、素直にそういう疑問なん

ですね。

「工学修士って何でこんなにたくさん日本はいるのか。その疑問に答えてほしい」というのが、去年私が申し上げた趣旨だったのですが、それに答えていただいて、日本にはこういう歴史的背景があって工学修士がこれだけ多いんだ、必要なんだということがわかれば、それに対していい人材を確保していくような手段や対策を講じなきゃいけませんし、多すぎるんだったら調整して何かやらなきゃいけません。本当にこれでいいんでしょうか、一方でアメリカやイギリスの大学を見習えと世間から言われているのに、こんな全然違うものを見習っていいのかという問題なんです。

私が問題提起したのはそういうことでありまして、博士学位の分野別の取得、工学は24%であります、工学博士は少ない少ないと言われながらも博士の学位をこれだけ出しているんです。医学・薬学で42%、今度は博士が多いですね。教育学は1.2%しか博士を出していない。アメリカは15.8%、イギリスは4.4%。そういう先進諸国の中でこの比較をして、何でこういうことが必要なのか、本当にこれでいいのか、その議論をしながら、将来の教育のあり方というものを考えていかなきゃいけないだろうと思います。今のような上級学位の全部を足し合わせて、専門職とかそういうのも入れてやると、工学38.6%、教育6.2%、法律・経済12.9%というので、米英と比べて日本はずいぶん特殊な構造をしているということをおぼつかつた上で、大学院の議論をしましょうよということになります。

入学者の数、あまり詳しいことは言いませんが、3,030人のうちの、右端を見ていただいて工学部は1,000人、入学者も学部入学者も3分の1とっているわけでありまして。修士・博士になりますと、エネルギーとか情報学とかいろいろ分かれてきますが、今のような分布になるわけです。専門職、学位課程、それから博士後期ということがあります。

ちょっとだけメモをつくってみますと、西洋の大学は何百年という歴史を持っていて、哲学とか法学、神学、そういうものから始まって、自然科学がそこから分かれてきて、工学は大学の外でやるようになってきたという歴史がありますし、日本は明治のときに工学部を積極的に設置するという導入の仕方をしまして、神学はやらない、哲学は文学部の中でやる。スタートのポイントでだいぶ違うわけでありまして。そういう歴史を持っているという背景のもとに定員の問題をこれから考えていかないと、第Ⅱ期にどういふふうにこれをつないでいくかというのは、非常に大きな具体的な目標になりますので、ぜひお考えいただければと思います。

それから大学にとって一番大事な、少なくとも京都大学にとって大事なものは入学試験と評価だと思っています。入学試験は後期日程試験の方式を大幅に変更したのをこの前の3月にやりました。18年度の入試のときには、後期日程試験の出願者がいたわけですが、要点と書いてあるところを見ていただきますと、18年度は後期の出願者の79.1%が前期の出願者と同じ人だったというわけです。そして合格者の72.1%が前

期の出願者であったというわけで、前期1本でやったってそんなにたいした違いはないんじゃないかというのが、この数字を見てわかります。19年度はそこにあるように一部実施したところでそういうふうになりました。

18年度と19年度と一番下の差を見ていただきますと、京都大学の前期を落ちた方がどこへ行ったのかなという目で見られるわけでありますが、京都大学では281人が後期で入っておられたのが12人になりました。大阪大学は41人増えました。神戸大学は58人増えて、九州大学は51人、北海道大学は23人増えたというようなことで、入っていかれまして、東京大学は4人が12名になったわけです。そういうふうに後期日程で同じように国立大学に入っていただくことがだいぶできるようになったと思います。受験の多様化を図れと言われているわけですから、これは多様な受験の機会を与えることにうまく成功したと私は思っているわけでありますが、来年度どうなるか。

21年度の入学者選抜方法の変更は、これだけ今のところ出されておりますけれども、どういうふうに今の傾向が変わっていくかというのを暫くフォローしていかないといけません。教育の問題を議論していただくときに、入学試験のあり方は、具体的に特に大きな改革をこれからしようという考えは私は持っていないんですが、例えば入試センターに対しては、「過去問を許すようにしてほしい。どんどん積極的に過去問のいい問題を繰り返し繰り返し出すようにしてほしい」という申し入れをしました。国大協の入試委員長としてやったんですけれども、その検討はすでにしてくださっていますし、個別の入試においても第2次試験においても、過去問をおおいに出すほうがいいと思います。練りに練られた問題のほうが間違いがなかったり、採点もしやすいし、いろいろ安定していいんじゃないかと思うんです。

ただ、どうしても国営化するというような話が時々出ます。それに対しては猛反対をする立場を私はとっております。隣の韓国を見ますと本当に悲劇だと思います。国営化した入試で高校生は非常にかわいそうなくらい。中国の場合はちょっと違いますけれども、それでも大変であります。去年はその話もちよっとしましたが、「受験移民」なんて言葉が四文字熟語の中に出てくるようになりましたね。有利なところを追いかけて移動していくような家族がいるというわけであります。

評価が今日のテーマの1つであります。真ん中を見ていただきますと、法律で定められている評価、機関別認証評価、今年受けるわけでありまして、専門別認証評価、法科大学院評価、そういう国立大学法人評価の年度評価、それから中期目標期間終了時評価、6年の成果で目標との実現度を見られるという趣旨ですけれども、本当はそれでは間に合わないのです、20年度に行われる評価が実質的な意味を持っている。だから今年度までにやったことが来年度評価されて、それが第Ⅱ期中期目標に反映されるという仕組みがここに出てくるわけでありまして。多少の修正は最終的にやってくれるわけですが、とにかく第Ⅱ期のしょっぱなの概算要求の査定は、この来年度行われる評価に基づいて行われるんだということをよく

知っておいて、覚えておいていただきたいわけであります。

そのほかにいろんな外圧としての評価が行われます。教育再生会議ではいろんな議論をしていますし、経済財政諮問会議でもいろんなことを、教育に対して、最近大学に対して特に口を出してくるのが非常に多くなりました。総合科学技術会議でも議論が行われる。独立行政法人評価というので網をかぶせて、全体に対していろんなことを言われますし、「イノベーション25」というのも、ご覧いただきますといろんなことが言われているわけであります。そういうものに対してもっと大学側からきちんと発言をしていって、知的リーダーシップをとっていきような大学に本当はならないといけないだろうというのが、今の悩みであります。

寺島さんの話を最近トップセミナーで聞いたのですが、非常にいい話をしてくれました。国立大学法人評価委員会の委員をしているわけで、「今の評価の仕方だと、ものすごく社会から高く評価されている大学病院の仕組みだとかが、全然その評価の対象に組み入れられていない。これはもってのほかである」というようなことを彼は言っていますから、そういう人がこの委員会の中にいるということを覚えておいて、そういう人にいろんな情報をこちらから渡すこともずいぶん大事なことであろうと思います。

一番下にありますように、2000年を100とした企業物価指数で、2005年の12月水準は素材原料158.9、中間材105.7、最終材91.7、これでどういう会社の社長さんかというのを見極めておいて、いま稼いでいる社長なのかものすごく苦しんでいる社長なのかということを知った上で、その社長の言うことを聞きなさい。それぞれ言うことが全然違いますから。立ち位置によって何を言ってるかを、顔つきを見て企業の社長の発言は聞かなあかんというのが寺島さんの主張であります。

私たちは、12名の外部からの経営協議会のメンバーを持っているわけでありますが、その経営協議会の委員をお願いするときも、こういうことを一生懸命見ながら、いろんな文化の範囲の中から委員をお願いしたといういきさつがあります。なかなかいい人選をしてきたと自分でも思っております。

教育について、いろんなことを考えなきゃいけません、この一番下にあります国公私立大学、これも非常に日本の特殊な社会状況でありまして、若者の失業対策にと言ったら言い過ぎかもしれないけれども、とにかく私立大学をどんどん増やす政策をとることによって吸収してきた。アメリカだったら州立大学がそれをやってきたという歴史もありますが、とにかく、大学院は国立が受け持っておりますけれども、私立大学が516ある国である。この中でどういうふうなことを考えていけばいいか。

それから真ん中あたりに書いてありますように、先ほど丸山先生が英語教育のことを言われましたが、私は入学式で「英語をやれ」とは言いませんでした。「国際語をやりなさい。今は英語がその役目をしていきます。まだ二、三十年はそれでいくでしょう。そして自分の国の言葉を一生懸命勉強しなきゃいけない。そしてもう1つ、できれば外国語をマスターして卒業するように」というメッセージを贈りました。英語を

話す人たちの中でネイティブは5分の1ぐらいだと、統計を見れば思いますので、国際語であるという認識で英語を話すということを勧めたわけでありませう。

科学技術基本計画、6つの目標がありますが、やはりかなりのお金をここへ投入するわけですから、これはしっかり認識した上で大学教育も考えていったほうがいいだろう。ここで一番気になるのは、日本の国民の知的レベルが非常に低いというデータがいっぱい出ています。いろんな調査をやって、一般市民の科学技術に対する関心が非常に低いというのが、よその国に比べていつも言われるわけですが、実感としてもあるわけだ。そういうことをよく認識した上で大学は働いていかなきゃいけないと思いますし、知識が低いのに、懸念指数と期待指数と書いてありますが、科学技術に期待する割合がやたらと低いんです。だから要するにわけわからんと怖いかということとか、わけわからんのに「そんなことやっちゃいかん」と言うとか、そういう民族であるということも知っておいて、大学の活動をしななきゃいけないと思っております。

あとはいろんな場面をお見せいたします。

学生を支援するためのいろんな仕組みを、どんどんまだまだ導入していかなきゃいけないと思います。宇治にも千人近い大学院生がおりまして、一番活発に集団を組んで集まってきてワーワーやるのが宇治の今の特徴であります。

桂のキャンパスにもたくさん院生はいるんですけども、あまり集まらない。群れるというのがないよう思うんですけども、桂でも吉田でも、学生たちが集まってお祭り騒ぎをするのも大事だと思います。

サークルも元気にいろいろやっております。馬は、17頭いると思います。18頭だったかな。

11月祭もみんな一生懸命やっておりますから、どうぞ皆さん方も11月祭のときにはあちこちのぞいてみてください。私もしゃべってみたり、のぞきに行ったりいたします。それから「大学コンソーシアム京都」の活動は非常に活発でありまして、いよいよ会費をフルにこちらも払って参加することにいたします。要するに京都盆地の中に大学がほとんどあって、学生たちが自転車でもって大学間を行き来することができる、これは唯一の都市なんです。東京では絶対できないわけですが、京都では学生がそういう活動ができます。盆地ですから。その特徴を生かした祭典の「京炎そでふれ！」のリーダーをやる実行委員長を今年は京都大学の学生が務めておりますから、そういう意味でもぜひ応援をしてやってください。秋には岡崎公園その他でこの踊りが大々的に行われます。

過去の話ですが、ベルリンオリンピックのときに田島直人さんが持ち帰ったオークがこんなに育っているんです。そういう歴史も時には。北部構内にありますから、ご覧いただければと思います。

研究に関してもいろんな申し上げることがありますが、とにかく非常にあちこちに研究拠点を展開しているのが京都大学の特徴でありまして、北海道の研究林にこの前行ってきました。私はメールマガジンに一

生懸命こういう旅行記を書いておりますので、ぜひ先生方にも読んでいただきたいと思いますから、メールマガジンに登録してください。

研究所ですが、戦前の化学研究所、人文科学研究所というのは、名前も変えずに今でもずっとやっておりますが、太平洋戦争のときに、必要に迫られてできた研究所が4つほど、名前を変えたり、改組したり、いろんなことをやっているわけです。そしてまた戦後の学術会議の勧告に基づいて設置された研究所はずっと活動を続けておられる。そして最近センターを設置するし、一番最近は自前で「こころの未来研究センター」なんていうのを京都大学独自でつくるということになってきました。

産学連携もいろいろ言われますけれども、京都大学は大学設置前から三高の先生が島津と一生懸命レントゲンをつくった。そういう背景を持ってやっておりますから、非常に歴史の豊かな産学連携をやっている。一番大きな型の産学連携も京都大学が行うというような特徴がある。松重先生のご努力をいただいているわけでありまして。

それからいろんな経営の問題、あまり詳しいことは今日は言いませんが、附属病院のこと、いろいろあります。企画と運営、これも大事なキーワードであります。

新しい組織をいろいろつくりたいと思っております、ちょっと写真だけ見せますが、「野生生物研究センター」、実は「日本の大学には動物園がないのはけしからん」と私は前から言ってるんですが、それを言うと皆さん笑うんだけど、一生懸命まじめに聞いてくださった先生がおりまして、松沢先生たちのグループが野生動物のことを考えようということになりました。一番少子化が進んでいる、日本で問題なのはゴリラです。若いカップルが一对しかいない。そういうヒト族ヒト科の将来を、どう考えるかというようなことを、これから考えていきたいわけでありまして。

それから探検大学の行方もあります。いろんな新しい探検をする目を持つ。そしてその場所があるということですね。

そしていろんな記録をしっかりと残していく。論文だけじゃないというわけでありまして、映像のアーカイブセンターも必要であろうというわけです。

それから世界トップレベル、これは2つのテーマでヒアリングを受けてきまして、そのうちの1つの例をお見せしますが、中辻先生が書いたこういう新しい仕組み、競争的資金が用意されれば、これもやはりしっかりもらわなきゃいけない。来週発表があるという話ですが、1つはもらわなければならないので、「1つはもらったつもりで準備に入ってくれ」と、部局長会議で宣言いたしました。そういうこともあって、いろんな新しい制度も考えていかなきゃいけないと思います。

いろんなデータを見ながら教員制度も支援制度も考えていくというわけで、いよいよ死亡のほうが出生を上回る時代に日本はなりましたので、そういうことも踏まえながら、いろんな支援センターを考えていき



ます。

それから環境と安全。これは法人化したことによって法律の背景が変わりますから、そういうことです。下から2番目は、部局長会議のときに申し上げたんですが、新聞社が環境税の導入を考えておるという記事を書いてくれたので、「それはいいね」と私が反応したというのがこれでありますが、具体的な施策が必要であろうと思うわけです。

広報のことがあります、広報にもっともっと力を入れて京都大学の情報を外へ見せていく。これは年齢別のインターネット利用率ですが、20代前後の人たちに情報を発信しようと思ったら、ウェブサイトをどんどん充実させていくしかないだろうと思います。

いろんなニュースがございます。

私はこれが一番気に入っております、Sheffield大学のウェブサイトであります、学生の姿が見えるようなホームページをつくってほしいというのが私の希望です。なぜかこれが一番、私の願いが通じない大学でありまして、私の顔ばかりやたら出てきて困るんです。こういうホームページをつくってほしい。

それから国公立を通じた大学間連携をやっていきたいと思えます。国際連携に関して1つだけちょっと時間をください。いろんなシンポジウムをやったり、いろいろやっているのですが、アジアにこれから力を入れなきゃいけないというのが私の考え方です。留学生を見てもわかりますし、貿易構造を見てもどんどんアジアのほうにシフトしている世の中です。それから人の動きを見ても、圧倒的にアジアに向かって、特に中国であります、伸びています。ロシアは天然ガス、石油で1位。

そういう世の中で、来年私がAEARUの議長を務めますが、この前ちょっとスピーチをやらせていただきまして、2つの提案をしました。17大学を中心にプログラムオフィサーというのを置いて、国際交流、留学生の交換に対して積極的に動いていこうじゃないか。もう1つは、2011年、10年計画で京都大学は30%の英語講義を導入したいとは思っているということを言いました。そして外国から来た留学生が日本語の授業なしに、学位が取れるような大学にしたいと思っていると申し上げました。

そういう中でAEARUのメンバーの大学がみんなプログラムオフィサーを置いて、そしてお互いにアソシエーションをつくって、そこでそういう計画を進めていこうじゃないかという提案をしていったら、非常に高い評価をするというご意見をいただいておりますので、ぜひこのあたりを、また国際交流その他を中心に詰めていただければと思います。いろんな大学と交流を進めていきたいと思っているのですが、京都大学はもともと国際交流を盛んにやってきた大学ですから、その中でいろんなことをやっていただければと思うわけです。

何をするにしてもとにかく平和を中心にする。

ここで、最近私が京都大学の21世紀の教育を考える上でどういう表現をするか、いつも書き直しているん

ですが、現時点で同質化が進む。競争社会でみんなグローバル化を言い出したものですから、同じ方向を向いているんだけど、そこで自学自習の伝統をどうやって受け継ぐか。そして若者がしっかりした個を確立するために、体験のできる場を京都大学は与えるところであってほしいと、私の目標を言っているわけであります。

このあたりでもう一ぺん基本理念をどう書いてあるかというのも、時々は思い出していただいて、この教育シンポジウムの議論にまたここまで思いをいたしながら、参加していただければと思うわけであります。

どうもご清聴ありがとうございました。

## 京都大学の今を知る

京都大学全学教育シンポジウム  
2007年9月6日(木)



京都大学総長 尾池和夫

## 国立大学法人

国立大学法人法の精神  
大学の独立性と自治、1法人1大学  
魅力ある教育  
役員会と民間の経営理念の導入  
学長の選考、CEOと教学の長  
非公務員型の教職員と人事  
監事監査のしくみ  
第三者評価と資源配分  
透明性と社会貢献  
競争的環境



## INNOVATION AND TRADITION

多くのピークと  
広大な裾野を持つ大学が



トップを目指す大学が



## 京都大学

自由の学風、自学自習の伝統  
教育と研究と社会貢献  
地球社会の調和ある共存  
探検とフィールドワークの世界  
基礎物理学研究所、霊長類研究所などの歴史  
変動帯の文化  
多様性とグローバル化  
変わる京都大学と変わらない京都大学



世界の最先端を行く多くの研究

「京」という字を入力して検索した画面



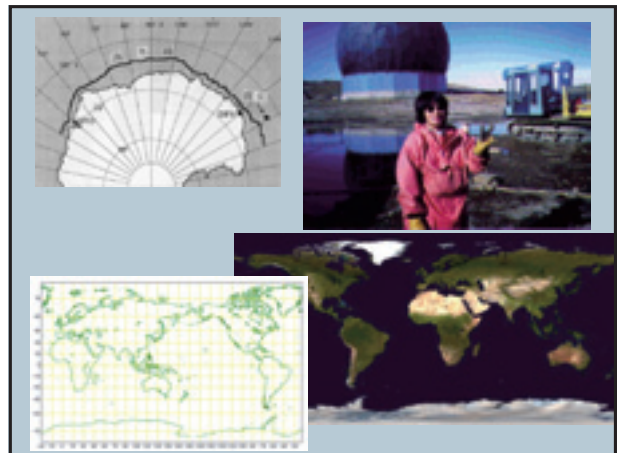
安岡孝一「拓本文字データベース」、京都大学21世紀COEプログラム  
東アジア世界の人文情報学研究拠点「漢字文化の全き発展のために」  
中国石刻文献研究国際ワークショップ」報告書(2007年3月)より

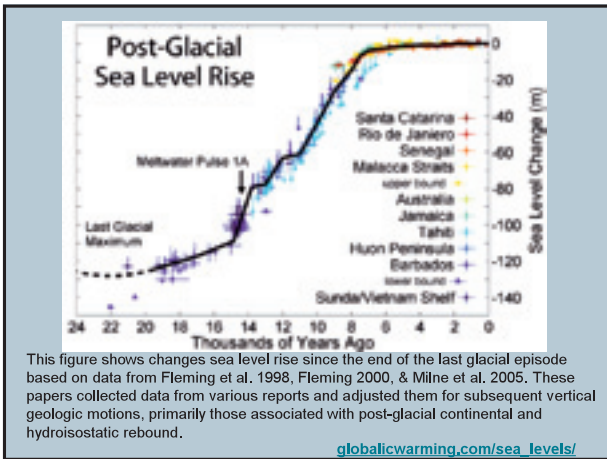
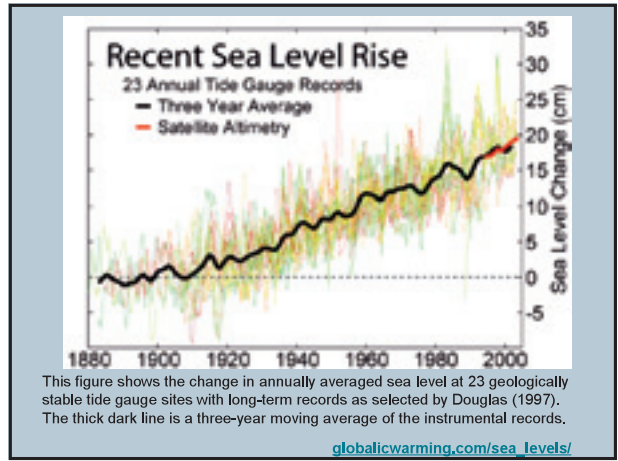
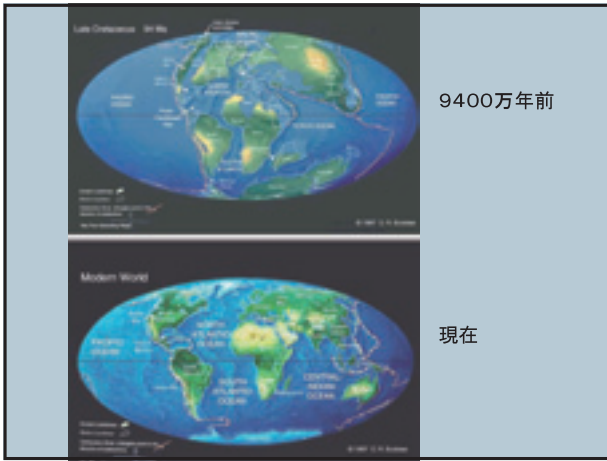


ガウス賞が伊藤 清  
博士に伝達されました。  
2006年9月14日

## 入学式式辞 — 2007年4月6日 —

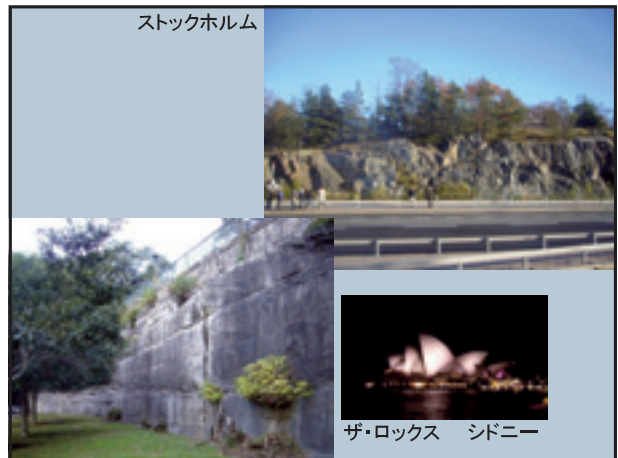
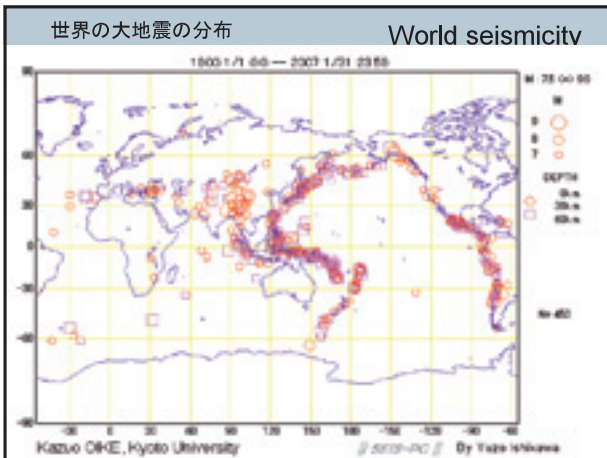
地球のことを考えるためには、地図をよく見る必要があります。皆さんはぜひ正確な地図を大切にしてください。21世紀の人類の生存のためにも、南極は大切な大陸ですが、世界地図に南極大陸を描いていないものがあります。五大大陸と言うときには、ユーラシア、北アメリカ、南アメリカ、アフリカ、オーストラリアで、南極大陸を含んでいません。それでは地球のことが理解できません。昨日、Googleで「五大大陸」で検索すると13万件、「六大大陸」で検索すると5万2千件ほどでした。まだ半部にもなりません。京都大学の学生の皆さんはぜひ六大大陸派になってください。

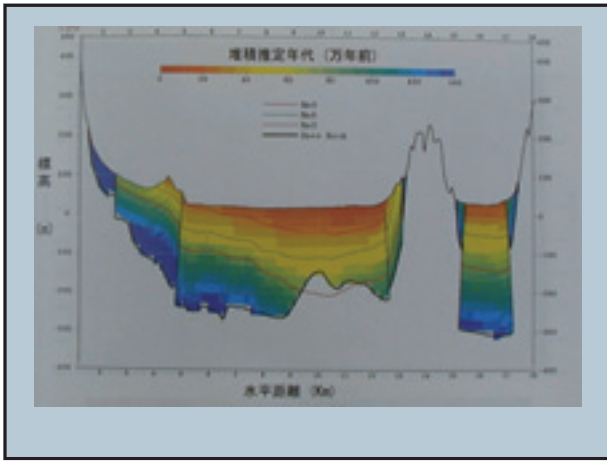




入学式式辞 — 2007年4月6日 —

プレート収束域に発達した変動帯特有の地形と、中緯度の気候の特性が、日本列島独特の四季折々の景色を生み出し、活断層運動によって形成された京都や奈良や近江の盆地には、たっぷりと地下水が蓄えられ、そこに都市が生まれ、豊かな文化が育ちました。私はその日本の文化を「変動帯の文化」と呼んでいます。その美しい日本の自然と文化を守り、さらに育てていくことに貢献するのも京都大学の役割であり、皆さんの参加を待っている教育と研究と社会貢献の意味でもあります。





水の文化



Gion Kobu Dance

Tea Ceremony

### 京都市の地下水

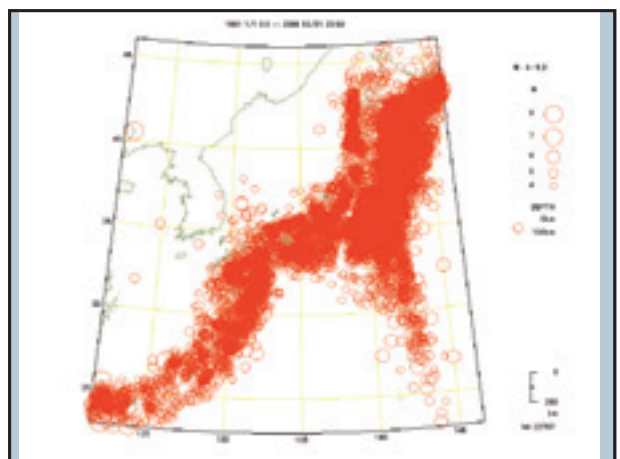
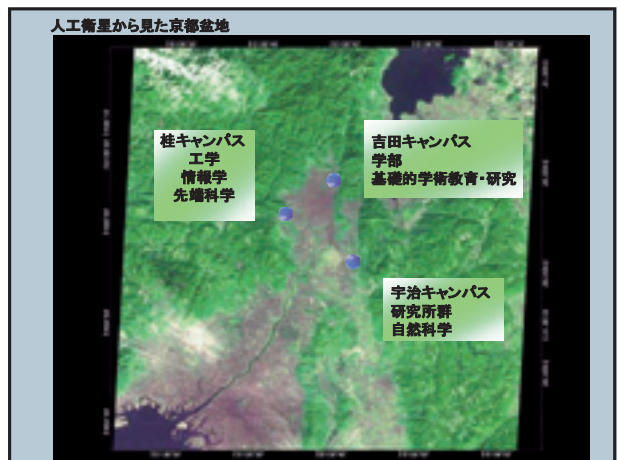
茶の湯  
 三千家 表千家、裏千家、武者小路千家  
 小川通りに面して、それぞれの井戸を持つ。適量の重炭酸塩。  
 友禅  
 河川の規制で、地下水。鉄やマンガンなどの金気がない。  
 豆腐、湯葉  
 ややミネラル分が多い。  
 日本酒  
 和菓子  
 蕎麦  
 京料理  
 半導体

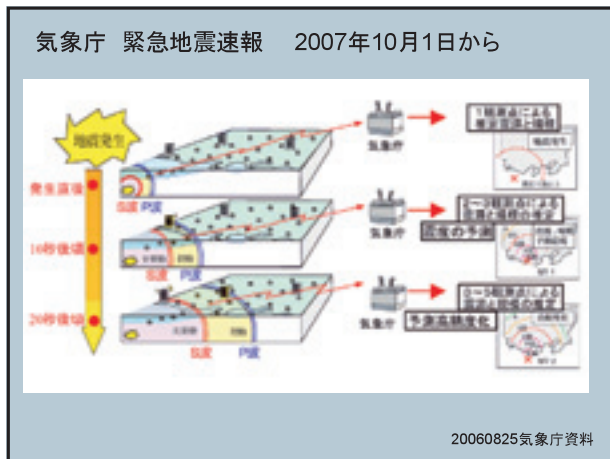
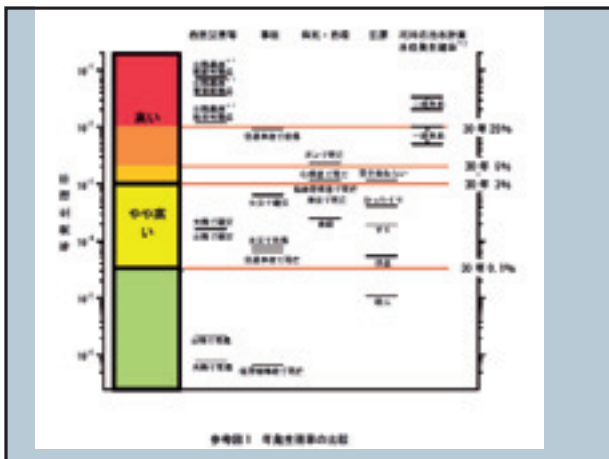
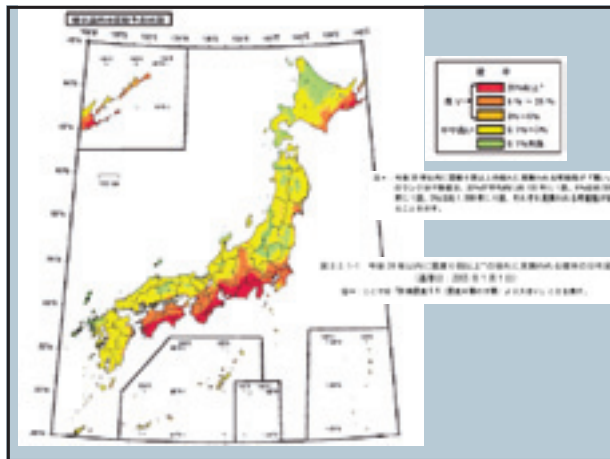
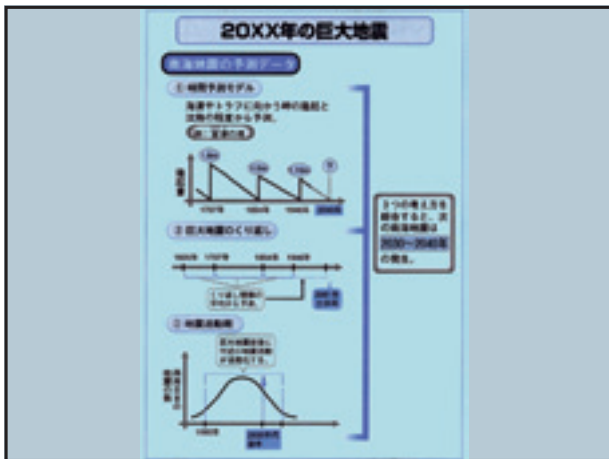
参考文献 尾池和夫『俳景』『続俳景』(宝塚出版)  
 『NHKスペシャル アジア古都物語 京都千年の水脈』NHK出版



京都大学の  
 学生証、職員証で入場無料

京都国立博物館





国立大学法人京都大学の組織に関する規程

第2条 国立大学法人京都大学(以下「法人」という。)に、学長として総長を置く。

2 総長は、学校教育法(昭和22年法律第26号)第58条第3項に規定する職務を行うとともに、法人を代表し、その業務を総理する。



As of May, 2007

## University Staff


President	1	2,886
Executive Directors /Auditors (including part-time)	9	
Professors	995	2,361
Associate Professors	768	
Lecturers	148	
Assistant Professors	975	
Non-Teaching Staff	2,361	

As of May, 2007

## Students

Undergraduates	13,381	22,758
Master's Students	4,697	
Doctoral Students	3,796	
Professional Degree Students (Graduate Schools of Law, Medicine, Management, School of Government)	735	
Other Graduate Students (part-time)	149	

## 京都大学小史

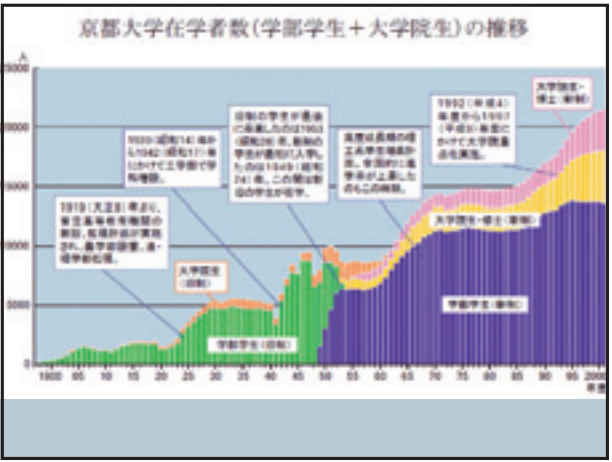


**明治** 明治30年(1897)に京都帝国大学として設置される。理工科大学(1897)、法科大学、医科大学(1899)、文科大学(1906)が設置される。

**大正** 大正8年(1919)に、分科大学を学部と改称する。経済学部(1919)、農学部(1923)が設置される。

**昭和** 昭和22年(1947)京都帝国大学を京都大学と改称。昭和24年(1949)、新制大学として発足。教育学部(1949)、教養部(1954)、薬学部(1960)総合人間学部(1992)が設置される。独立研究科。大学院重点化。

**平成** 平成16年(2004)国立大学法人京都大学によって京都大学が設置される。



**2007年 3月26日**

**3月23日**

**学士2708名 累計17万6806名**

**博士632名 累計3万4993名**

**修士2146名 累計5万4801名**

**社会健康医学修士(専門職)累計73名**

**法務博士(専門職)累計323名**

### 学認別在学者数・全学に占める比率の推移

年度	総数	文	法	医	経	理	工	農	計
1900	56	17%	54%	17%					100%
1910	226	8%	22%	27%	22%				100%
1920	290	29%	20%	5%	17%				100%
1930	1642	14%	34%	5%	12%	7%			100%
1940	1317	5%	29%	20%	5%	17%			100%
1950	1086	13%	19%	17%	4%	10%			100%
1960	425	14%	2%	17%	14%	4%			100%
1970	208	6%	2%	17%	12%	3%			100%
1980	1514	8%	2%	17%	8%	7%			100%
1990	1040	8%	2%	16%	9%	6%			100%
2000	990	8%	2%	16%	9%	6%			100%

	旧制		新制		累計
	卒業者数	既卒業者数	平成19年3月26日付卒業者		
総合人間学部	-	1,208	140	40	1,448
文学部	4,711	10,145	187	87	15,043
教育学部	-	19,295	79	44	2,950
法学部	14,501	12,240	379	112	24,994
経済学部	8,067	12,240	252	47	20,562
理学部	2,984	12,710	283	26	15,977
医学部	5,673	5,802	525	21	11,560
薬学部	-	3,470	93	34	3,563
工学部	8,606	43,349	900	61	52,855
農学部	3,262	13,201	292	89	16,845
小計	47,964	124,296	2,708	581	175,050
附属医学専門部	804	-	-	-	804
理工科大学	944	-	-	-	944
合計	49,712	124,296	2,708	581	176,806

備考:平成19年3月26日付卒業者の右欄は、女子の数の内数。

<修士学位取得者数>

	日本 2002	米 2001	英 2001	仏 2003	露 2003	韓 2003
人文・芸術	6,700	48,408	10,500	19,466	4,907	7,160
法経等	10,254	174,024	43,500	31,553	8,042	14,816
理	5,974	14,726	12,600		5,202	
工	28,893	48,148	9,600	21,865	7,099	20,016
農	3,880	4,519	900		859	
医・薬等	3,670	43,644	7,900	4,623	2,737	4,865
教育	5,093	136,579	30,500	-	1,921	15,786
家政	302	2,616	-	-	-	-
その他	4,000	9,454	9,300	690	32	4,077
計	68,766	482,118	124,800	78,197	30,799	66,720

<博士学位取得者数>

	日本 2002	米 2001	英 2001	仏 2003	独 2002	露 2003	韓 2003
人文・芸術	793	10,079	1,500	2,103	2,366	1,009	643
法経等	751	6,020	1,500	1,112	3,130	737	1,188
理	1,651	9,250	4,000		6,296	809	
工	3,921	6,152	1,600	4,792	2,332	1,114	3,516
農	1,258	1,166	300		944	70	
医・薬等	6,853	3,523	1,700	367	8,341	298	2,012
教育	191	6,967	500	-	296	521	349
家政	13	355	-	-	48	-	-
その他	883	648	300	46	85	9	300
計	16,314	44,160	11,400	8,420	23,838	4,567	8,008

<修士学位取得者分野別構成比>

	日本 2002	米 2001	英 2001	仏 2003	露 2003	韓 2003
人文・芸術	9.7%	10.0%	8.4%	24.9%	15.9%	10.7%
法経等	14.9%	36.1%	34.9%	40.3%	26.1%	22.2%
理	8.7%	3.1%	10.1%		16.9%	
工	42.0%	10.0%	7.7%	28.0%	23.0%	30.0%
農	5.6%	0.9%	0.7%		2.8%	
医・薬等	5.3%	9.1%	6.3%	5.9%	8.9%	7.3%
教育	7.4%	28.3%	24.4%	-	6.2%	23.7%
家政	0.4%	0.5%	-	-	-	-
その他	5.8%	2.0%	7.5%	0.9%	0.1%	6.1%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

<博士学位取得者分野別構成比>

	日本 2002	米 2001	英 2001	仏 2003	独 2002	露 2003	韓 2003
人文・芸術	4.9%	22.8%	13.2%	25.0%	9.9%	22.1%	8.0%
法経等	4.6%	13.6%	13.2%	13.2%	13.1%	16.1%	14.8%
理	10.1%	20.9%	35.1%		26.4%	17.7%	
工	24.0%	13.9%	14.0%	56.9%	9.8%	24.4%	43.9%
農	7.7%	2.6%	2.6%		4.0%	1.5%	
医・薬等	42.0%	8.0%	14.9%	4.4%	35.0%	6.5%	25.1%
教育	1.2%	15.8%	4.4%	-	1.2%	11.4%	4.4%
家政	0.1%	0.8%	-	-	0.2%	-	-
その他	5.4%	1.5%	2.6%	0.5%	0.4%	0.2%	3.7%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

<大学院段階(上級学位)構成比>

	日本 2002	米 2001	英 2001	仏 2003	独 2002	露 2003	韓 2003
人文・芸術	8.8%	10.5%	8.8%	24.9%	9.9%	16.7%	10.4%
法経等	12.9%	36.1%	33.0%	37.7%	13.1%	24.8%	21.4%
理	9.0%	4.0%	12.3%		26.4%	17.0%	
工	38.6%	8.9%	8.3%	30.8%	9.8%	23.2%	31.5%
農	6.0%	0.9%	0.9%		4.0%	2.6%	
医・薬等	12.4%	13.8%	7.1%	5.8%	35.0%	8.6%	9.2%
教育	6.2%	23.6%	22.8%	-	1.2%	6.9%	21.6%
家政	0.4%	0.5%	-	-	0.2%	-	-
その他	5.7%	1.7%	7.0%	0.8%	0.4%	0.1%	5.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(注)アメリカについては、修士、博士のほか、第一職業専門学位を含む。

平成19年度学部入学人数

学部	一般入試 (前期)		一般入試 (後期)		特別入試 (推薦)		特別入試 (生活科)		編入		再入		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
総合人間学部	96	96	124								1	1	1	1
文学部	114	109	223										2	2
教育学部	35	26	61								6	3	9	9
法学部	269	27	292			1	2	4		1	1	5	4	9
経済学部	197	41	238			2	4	6	3	3	6	6	3	9
理学部	279	38	317											
医学部	125	114	239	14	7	21					3	11	14	
農学部	56	28	86								2	2		
工学部	680	76	958						14	5	16	25	2	25
歯学部	199	124	322								3	3		
合計	2,229	667	2,896	14	7	21	3	7	10	22	9	30	43	23

平成19年度大学院入学人数

専攻科	外国人留学生		その他		合計
	男子	女子	男子	女子	
文学部専攻科		1	1	61	62
教育学部専攻科			29	29	48
法学部専攻科		1	1	10	11
経済学部専攻科		5	7	12	14
経営学部専攻科		3	3	261	264
医学部専攻科		1	1	10	11
薬学部専攻科		3	4	7	10
工学部専攻科		14	7	21	35
農学部専攻科		2	5	7	10
人間・健康科学研究科		6	16	22	28
工学部専攻科		2	1	2	3
アジア・アフリカ地域研究研究科					
経済学部専攻科		18	4	18	32
文学部専攻科				53	53
総合人間学部		1	1	26	27
合計	49	47	106	1,627	1,779

専門職大学院

専攻科	外国人留学生		その他		合計
	男子	女子	男子	女子	
文学部専攻科					
教育学部専攻科					
法学部専攻科					
経済学部専攻科					
経営学部専攻科					
工学部専攻科					
農学部専攻科					
人間・健康科学研究科					
工学部専攻科					
アジア・アフリカ地域研究研究科					
経済学部専攻科					
文学部専攻科					
総合人間学部					
合計	9	11	17	214	234



学部	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
文学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
経済学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
工学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
理学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
農学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
医学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
歯学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
薬学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
看護学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
国際学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
総合学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
環境学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
芸術学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
体育学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
情報学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
音楽学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
工学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
理学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
農学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
医学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
歯学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
薬学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
看護学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
国際学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
総合学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
環境学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
芸術学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
体育学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
情報学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
音楽学部	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

西洋の大学  
 500年以上の歴史  
 創設時以来 哲学 法学 医学 神学  
 自然科学は哲学の分野  
 近世になって理学が分離、工学は大学の外で

日本の大学  
 19世紀末に近代化のため導入  
 神学なし、哲学は文学部で、工学部の設置  
 経済学部、農学部の設置  
 理系と文系の分離

何がなか  
 教養学 自国の文化と異文化理解 倫理  
 人生観 世界観 情報学 地球社会の共存

京都大学受験者の状況

1. 後期日程試験の方式を変更する直前の平成18年度入試の場合

前期日程の出願者	受験者	合格者	後期日程の出願者	受験者	合格者	不合格者
4993	2444	390	2054			
内、前期日程の京都大学出願者		3947	1817	281	1536	
差		1046	627	109	518	

要点  
 平成18年度では、後期の出願者の79.1%が前期の出願者であった。  
 また、後期の受験者の74.3%が前期の出願者であった。  
 さらに後期の合格者の72.1%が前期の出願者であった。

2. 後期日程試験の方式を一部変更した平成19年度入試の場合

前期日程の出願者	受験者	合格者	後期日程の出願者	受験者	合格者
146	59	24			
内、前期日程の京都大学出願者		105	38	12	
差		41	21	12	

3. 平成18年度と19年度で、京都大学前期出願者で後期日程の合格者を一部の大学ごとにはびる。

大学	京都	大阪	神戸	九州	北海道	京都工機	横浜国立	東北	広島	//名古屋	東京	他大学計
18年度	281	187	157	51	46	58	32	60	21	74	4	887
19年度	12	228	215	102	69	49	44	38	29	22	12	1109
増		41	58	51	23							222

平成21年度入学者選抜方法の変更について

○経済学

- ・理系入試を新たに導入する。
- ・募集人員は、現行の論文入試の50名を論文入試25名、理系入試25名とする。

論文入試

- ・個別(第2次)学力検査で数学を廃止し、国語、外国語を課す。

理系入試

- ・大学入試センター試験で国語、地歴、公民、理科、数学、外国語を課す。
- ・個別(第2次)学力検査では、国語、数学、外国語を課す。

○工学部

- ・個別(第2次)学力検査で国語を課す。

○個別(第2次)学力検査の文系の数学において「数学C」を出題範囲から除く。

<資料> [平成21年度入学者選抜における学力検査の実施教科・科目について](#)

大学評価 改善と説明のために

2003年までの評価  
 自己点検・評価 外部評価 第3者評価  
 教育業績評価 研究評価

学校教育法が定める評価  
 自己評価  
 機関別認証評価 専門分野別認証評価 法科大学院評価  
 国立大学法人評価  
 年度評価  
 中期目標期間終了時評価 平成20年度に実施される評価  
 第2期中期目標

教育再生会議 経済財政諮問会議 総合科学技術会議 独立行政法人評価  
 インベーション25 など  
 競争的資金のヒアリング  
 ビアレビュー  
 大学ランキング

【世界潮流と日本—そして大学の在り方】 (国大協トップセミナー2007)  
 財団法人日本総合研究所会長  
 株式会社三井物産戦略研究所所長 寺島実郎氏

評価委員として  
 病院—社会の高い評価  
 国境を越えた連携・提携 具体的な連携  
 深い産学連携

日本は20年遅れのサッカー革命  
 イギリスがどうなっているかが重要


層の厚いシンクタンクを育てる必要  
 知的セクターを生み出す必要  
 創造的プラットフォームを作り出す

企業の種類で大学への発言 立ち位置による顔つき  
 企業物価指数：2000年=100とした価格水準 2005年12月水準  
 素材原料158.9 中間材105.7 最終材91.7

教育

入学試験の考え方  
 教養教育、専門教育、大学院教育のあり方  
 倫理と人権の教育  
 個に対応する教育  
 初等中等教育 社会人教育 生涯教育  
 国際語としての英語と自国語と、もう一つの外国語  
 短期留学と長期留学  
 教育産業の輸出  
 大学間協力と単位互換、ダブルディグリー  
 国公立大学の協力 国 公 私

大学数	87	89	516
学部生	19.3	4.4	37.3%
大学院生	58.7	5.5	35.8%



一個正在擴散的趨勢

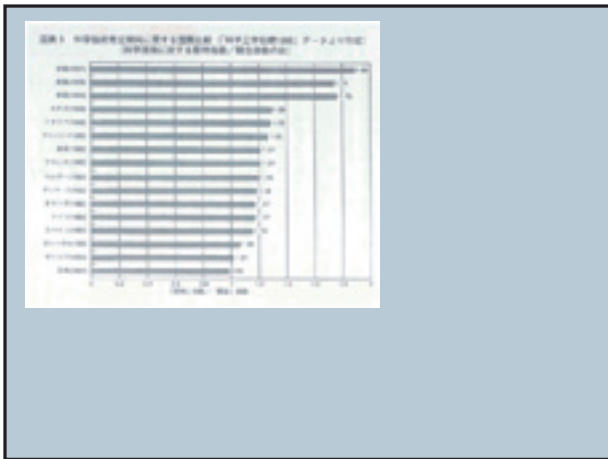
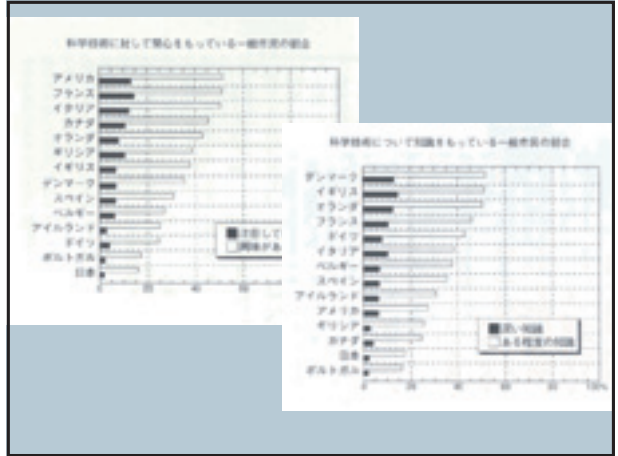
• Influence—Japan OCW Alliance (2005)  
 —Kazuo Oike (尾池和夫)—President of Kyoto U.

- *We hope to contribute not only to society as a whole, but also to the accumulation of intellectual capital within the WWW.*
- *Please take advantage of this world of knowledge, and encourage your friends and colleagues to visit OCW at Kyoto University.*



第3期科学技術基本計画は何を目指すのか。

- <目標1> 飛躍知の発見・発明～ 未来を切り拓く  
多様な知識の蓄積・創造
- <目標2> 科学技術の限界突破～ 人類の夢への  
挑戦と実現
- <目標3> 環境と経済の両立～ 環境と経済を両立し  
持続可能な発展を実現
- <目標4> イノベーター日本～ 革新を続ける強靱な  
経済・産業を実現
- <目標5> 生涯はつらつ生活～ 子供から高齢者まで  
健康な日本を実現
- <目標6> 安全が誇りとなる国～ 世界一安全な国・  
日本を実現



学生たちを見つめながら

Copyright 2006, Kazuo Oike

### 学生支援

- 寮と食堂、合同宿舎
- 助学金
- 奨学金制度
- 博士課程の給与
- 海外留学、単位互換、インターンシップ
- 留学生サービス
- RA, TA, OA
- 就職支援
- 課外活動環境
- 学生自治会の育成
- 大学コンソーシアム京都
- ボランティア活動
- 学生のニーズの把握

### 宇治地区合同の懇親会

2006年10月13日

Copyright 2006, Kazuo Oike



2006年度11月祭




京都学生祭典 第3回 大学コンソーシアム京都

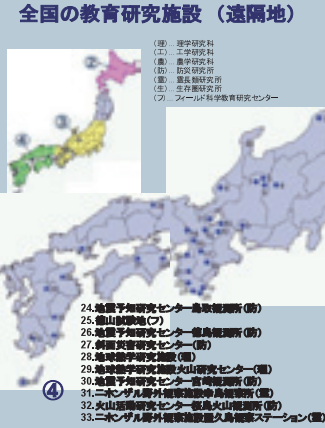


### 研究

基礎研究と応用研究のバランス  
 実験と理論と野外  
 地域の文化  
 漢字圏の文化  
 熱帯低気圧とプレート収束域の特徴  
 附属施設の役割  
 共同利用研究所、第2期中期目標  
 フィールドワークと標本の保存



### 全国の教育研究施設 (遠隔地)



① 理学研究科  
 ② 工学研究科  
 ③ 農学研究科  
 ④ 防災研究所  
 ⑤ 環境研究所  
 ⑥ 生命科学研究所  
 ⑦ フィールド科学教育研究センター

① 北海道研究林【福寿区(フ)】  
 ② 北海道研究林【白糠区(フ)】

③ 3. 災害復元実験センター-大規模実験棟(防)  
 4. 水害全学実験所(防)  
 5. 地震予知研究センター-上室(防)  
 6. 災害復元実験センター-防災砂防(防)  
 7. 飛騨天文台(防)  
 8. 地震予知研究センター-北室(防)  
 9. 農長研究所  
 10. 生体学研究所  
 11. 産地資源開発センター(工)  
 12. 産地(山) 産地(山)  
 13. 地震予知研究センター-釜山(防)  
 14. 地震予知研究センター-阿波(防)  
 15. 農地(産)  
 16. 電子学研究所  
 17. 地震予知研究センター-奄美(防)  
 18. 大学総務研究所  
 19. 総務大島(防)  
 20. 災害復元実験センター-鹿児島(防)  
 21. 災害復元実験センター-鹿児島(防)  
 22. 鹿児島実験所(フ)  
 23. 霧峰山研究林(フ)

④ 24. 地震予知研究センター-島根(防)  
 25. 霧峰山(フ)  
 26. 地震予知研究センター-徳島(防)  
 27. 新築災害研究センター(防)  
 28. 地球科学研究所(防)  
 29. 地球科学研究所(防)  
 30. 地震予知研究センター-香取(防)  
 31. ニンゲル野外観察施設(防)  
 32. 火山噴射研究センター-鹿児島(防)  
 33. ニンゲル野外観察施設(防)

### フィールドワークのすすめ

北海道研究林(フィールド科学教育研究センター)



J-Podの開発(地球環境学、フィールド科学教育研究センター)

### 基礎研究の重視

飛騨天文台



### 研究所と研究センターなど

1926	大正15年10月	化学研究所
1939	昭和14年 8月	人文科学研究所
1941	16年 3月	結核研究所
	11月	工学研究所
1944	19年 5月	木材研究所
1946	21年 9月	食糧科学研究所
1951	26年 4月	防災研究所
	8月	基礎物理学研究所
1956	31年 4月	ウイルス研究所
1962	37年 4月	経済研究所
	4月	数理解析研究所
	4月	原子炉実験所
1965	40年 4月	東南アジア研究センター
1967	42年 6月	霊長類研究所
	6月	結核研究所を結核胸部疾患研究所と改称
1971	46年 4月	放射性同位元素総合センター
	4月	工学研究所を原子エネルギー研究所と改称
1976	51年 5月	ヘリオトロン核融合研究センター
	5月	放射線生物研究センター

## 産学連携の歴史

島津製作所のサイトより  
島津においてエックス線写真の撮影に成功したのは、明治29年(1896)10月10日で、レントゲン博士がエックス線を発見してから10ヵ月後のことでした。



わが国にレントゲン博士がエックス線を発見したとの報告が届くと、京都では第三高等学校の村岡教授が島津を実験場にあて、実験を行いました。

真空管を天井からつらし、写真乾板を枠に入れ、桐箱に入れた銀質を乾板上において起電気を回転させると、数十分してうすうすとエックス線像が映し込まれました。この日が明治29年(1896)の10月10日でした。

Copyright 2006, Kazuo Oike

**研究内容(分子プローブと高次生体イメージング)**

◆2006年6月9日  
先端融合領域イノベーション創出拠点の形成に向けたキヤノン株式会社とのプロジェクトについて

平成18年度科学技術振興調整費において京大(提案機関)とキヤノン株式会社(協働機関)とのプロジェクトが採択されました。  
本プロジェクトは、京大が有する、国際的に卓越した化学分野、材料化学分野等の研究実績をフルに活用し、キヤノン(株)が有する、世界に認められたイメージング技術分野で蓄積された高度研究実績をフルに動員し、両者の融合によるイメージング技術の統合を図り、効率的な最先端医療の実現を目指すものです。

## 経営

運営費交付金制度の見直し  
教育経費、研究経費、一般管理費の明細  
経営協議会外部委員の役割  
自由化と規制  
施設整備の遅れと安全  
寄附の文化の育成と税制  
キャンパスの多様化  
京大ファンド  
京大カード



## 附属病院

経営改善係数の見直し  
破綻へのスパイラル  
病院経営と教育研究との連動  
診療報酬の改定  
看護職員、産科医、麻酔医  
患者教育と健康科学

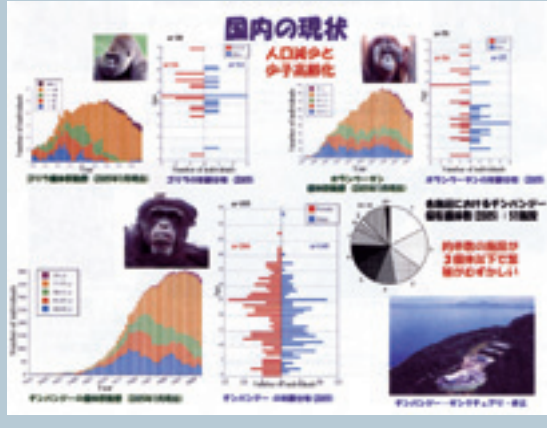


## 企画と運営

教育研究の基盤整備、情報、図書  
職員の企画力  
部局自治の確立と法人法への理解  
基本理念の浸透  
法的背景と人員配置  
大学の将来計画  
アクションプラン2006-2009  
スペースマネジメント、データ入力  
諸報告の活用 PDCAサイクル  
職場間、職員間の連携

## 新しい組織

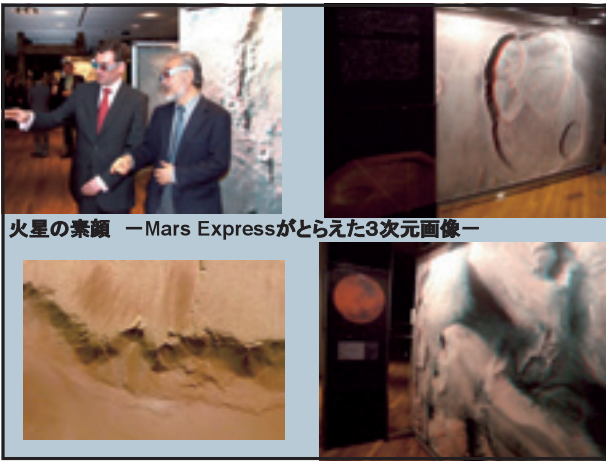
生存基盤科学研究ユニット  
こころの未来研究センター  
映像アーカイブセンター  
京都賞博物館  
野生生物研究センター  
芸術学部  
グローバルCOE  
**世界トップレベル研究拠点**



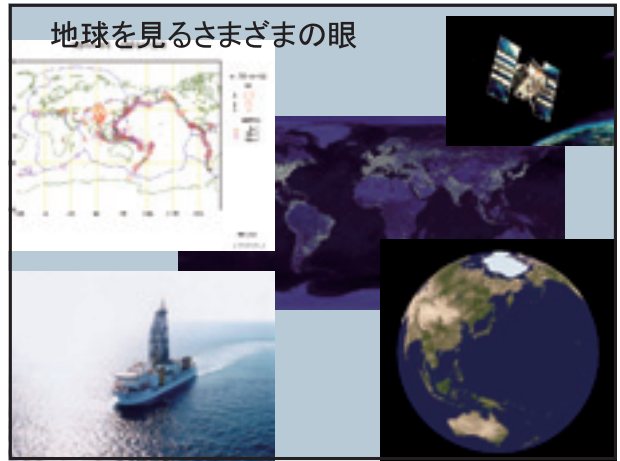
## これからの探検は・・・

例えば、小山勝二他「見えないもので宇宙を観る」  
(学術選書、007、京都大学出版会)  
宇宙物理学

- ・ 可視光のみならず、あらゆる手段で宇宙を
- ・ 赤外線、温度を知る、遠くを見る、昔を観る
- ・ X線で観る、星の誕生、星の最後
- ・ 超新星、ブラックホール
- ・ 重力波を検出する。
- ・ ブラックホール、ダークマター、
- ・ ビッグバン、ダークエネルギー
- ・ 未知の問題を考える。



火星の素顔 — Mars Expressがとらえた3次元画像—



地球を見るさまざまな眼

### 保存と利用を今後とも考える必要のあるもの

- 知財、図書、情報、物
- 生態、生体の保存と利用、植物園、動物園、水族館
- 古文書の修復、保存、利用
- 標本の全部保存、大型の標本
- 観測記録の保存と利用
- 音声の記録の検索と利用
- 映像の記録の保存と利用
- 大量のデジタルデータの永久保存と利用
- 研究者個人のウェブサイトの保存と利用
- など、など

- 学問のあらゆる分野で
- 人類の財産と言える映像を記録
- 記録をだれでもが見ることのできる仕組み
- 京都大学の社会貢献
- 映像アーカイブセンターの設置

## iCeMS

世界トップレベル研究拠点

**Institute for Integrated Cell-Material Sciences**  
Kyoto University

**Norio Nakatsuji :**  
Prospective Director  
Professor of Developmental Biology  
Director of Inst. Frontier Med. Sci.

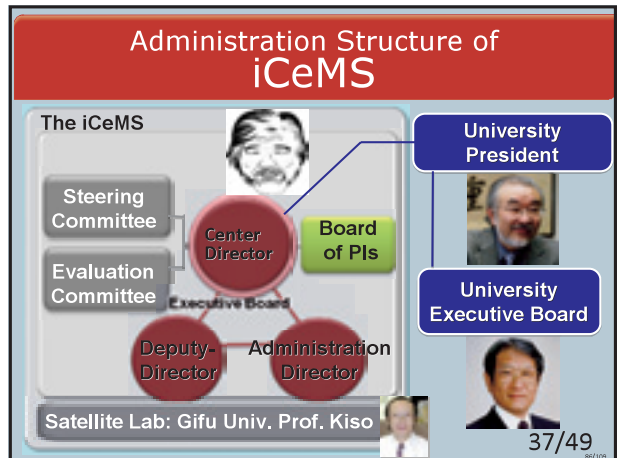
**Susumu Kitagawa :**  
Prospective Deputy Director  
Professor of Chemistry

**Aki Kusumi :**  
Prospective Chairperson of the PIs Board  
Professor of Biophysics

**Kazuo Oike :**  
President

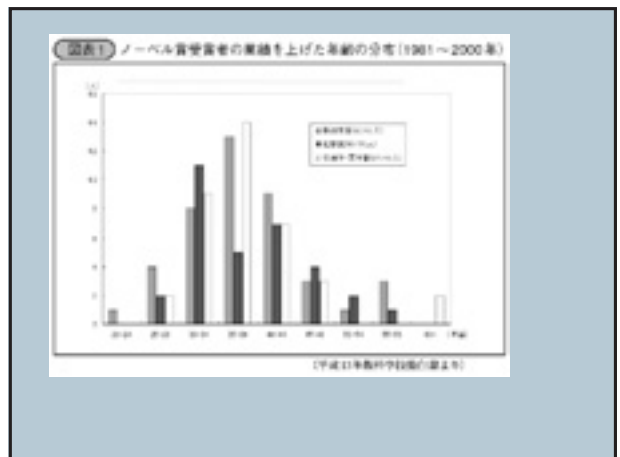
**Hiroshi Matsumoto :**  
Executive Vice President  
for Research and Finance

2/49

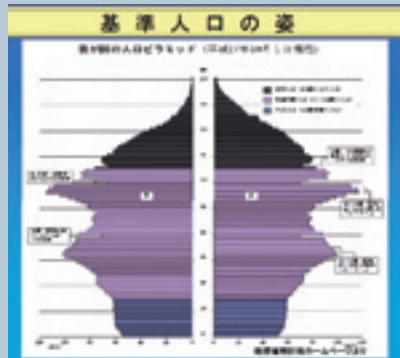


### 教職員制度

- 非公務員化の意味
- 教職員の職種
- 技術職員の制度
- テニュアトラック
- サバティカル
- 子育て、介護の支援
- 外国人教職員と家族の支援、初等中等教育
- 定年と定年後
- 名誉教授の活用

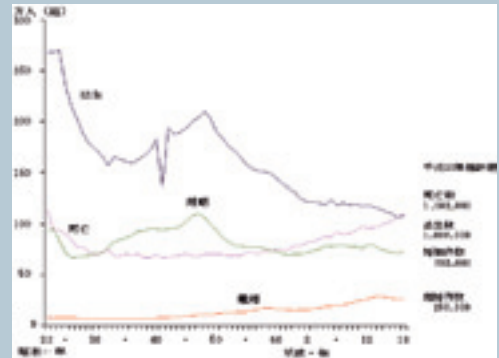


**日本の将来推計人口(平成18年12月推計)**  
 国立社会保障・人口問題研究所



<http://www.ipss.go.jp/>

2007年1月1日  
 平成18年 人口動態統計の年間推計



<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai06/index.html>

女性研究者支援センター



男女共同参画  
 社会の実現

西 2005

ついでながら、  
 シオカラ ♀ ムギワラ ♀  
 翡翠  
 鯨 鯨  
 麒麟 麟  
 鳳 鳳  
 鳳 鳳  
 鶯 鶯

♂は槍 ♀は手鏡秋の空 和夫



Copyright 2006, Kazuo Oike

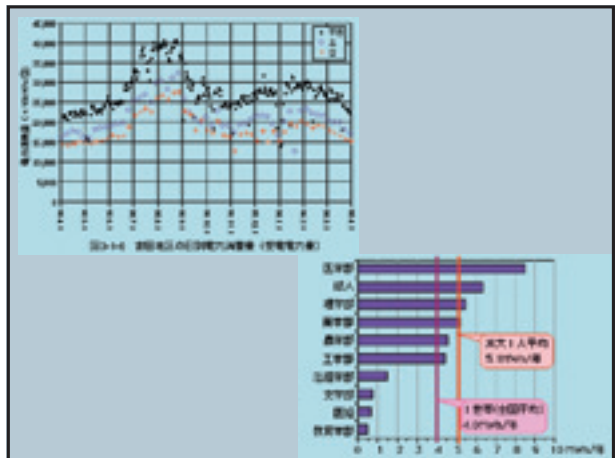
卒業式式辞 — 2007年3月26日 —

少子化の第2の原因は女性が働くことを支援する仕組みの遅れであります。京都大学では、2006年度にようやく「京都大学女性研究者支援センター」を設立し、2007年2月5日には附属病院に病児保育室を開室しました。京都大学の女性教員は増加傾向にはあるとはいえ、2006年現在6.7%であり、まったく少ない状態が続いています。

スウェーデンのKarolinska InstituteのProfessor Harriet Wallgerb-Henrikssonは、KI初の女性のPresidentです。彼女はカロリンスカインスティテュートの女性教授の割合を40%に引き上げたいと言っていますが、今でもすでに15%の女性教授がいます。

環境と安全

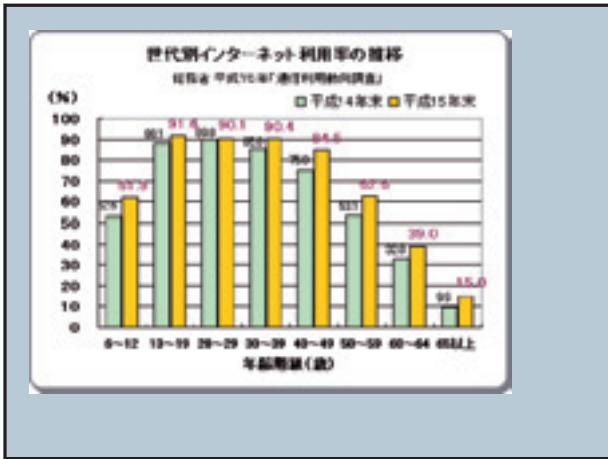
- 自然災害対策
- 環境保全
- 廃棄物処理
- 木と紙と炭酸ガス、水
- エネルギー、電気、ガス、石油
- 環境税の導入
- 莫大な潜在的資源と財源



広報

- 広報の意味と機能、専門職の設置
- ステークホルダー
- 多くの種類の窓
- 各国語のホームページ
- 市民の関心
- 大学の透明性
- モニター制度
- 京都大学友の会





プラスのニュース  
 マイナスのニュース  
 どちらも京都大学のニュースとして大切に

情報発信の三現則  
 (自分に、学生に、記者に、職員に)  
 現場へ行く。自分で行く。  
 現象を見る。自分で見る。  
 現在を書く。自分で書く。

職員は教員と学生と、社会と大学と、野田 進教授、田中 良典研究員  
 さまざまな形のインターフェース



## 理科離れ

2006年5月  
 文部科学省科学技術政策研究所  
 科学技術動向研究センター  
 「忘れられた科学—数学」

2005年9月26日  
 学術会議叢書10  
 「今、なぜ、若者の理科離れか、  
 科学者と社会との対話に向けて」

王立協会「社会における科学」プログラム

国語  
2

文部科学省  
科学技術政策研究所  
科学技術動向研究センター  
「忘れられた科学—数学」

2005年9月26日  
学術会議叢書10  
「今、なぜ、若者の理科離れか、  
科学者と社会との対話に向けて」

## 国際連携

広報誌の活用 海外留学の奨励  
 AEARU APRU UMAP etc.  
 京都アメリカコンソーシアムとの連携  
 東アジアの大学と漢字圏の文化  
 中国からの留学生 特に内陸、西安など  
 東南アジアとの連携  
 教育研究拠点  
 世界標準  
 大型実験設備の共有

## KYOTO UNIVERSITY INTERNATIONAL SYMPOSIUM "Plant Sciences in Japan and China – from Genomics to Breeding" on 8<sup>th</sup> to 10<sup>th</sup> October, 2005

Copyright 2006, Kazuo Oike

## 京都大学国際シンポジウム(第7回)バンコク 2005年11月23-24日

Copyright 2006, Kazuo Oike

The 10<sup>th</sup> Kyoto University  
 International Symposium  
 In Bandung, 24-28, July 2007

Tangkuban Prahur

Lemban Fault

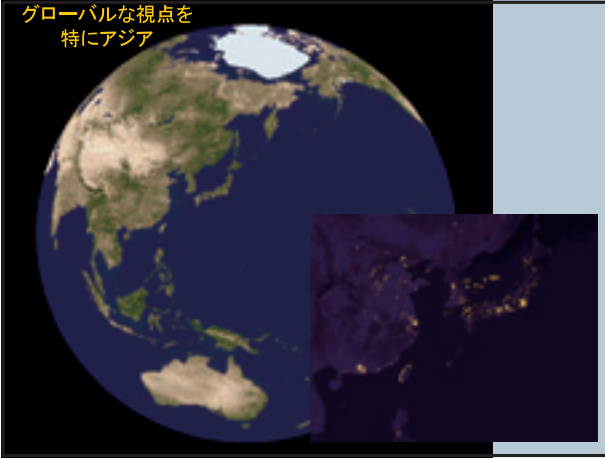
Gesikan 3, Desa Wijirejo,  
 Kecamatan Pandak,  
 Kabupaten Bantul

Ms. Hamamoto  
 and Director Dr. Mizuno,  
 CSEAS

Pusat Informasi

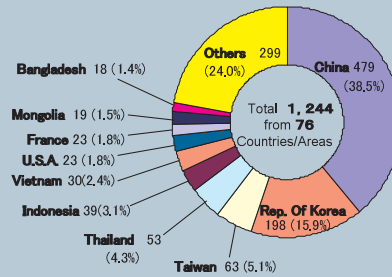


グローバルな視点を  
特にアジア



特にアジアとの連携

STUDENT FROM ABROAD



貿易構造の変化

輸出に占める比重			
	1990年	2003年	2006年
米国	32%	25%	23%
中国	2%	12%	14%
大中華圏	16%	28%	30%
アジア	31%	46%	48%
輸入に占める比重			
米国	22%	15%	12%
中国	5%	20%	21%
大中華圏	11%	25%	44%
アジア	29%	45%	44%
中東	13%	13%	19%

2006年の貿易総額に占める比重  
米国17.5% 大中華圏27.8% アジア45.7% 中東10.5%

寺島実郎氏(2007)による。

	1995年	2006年
日本人出国者	1108万人	1754万人
内米国	475万人	367万人
内中国	87万人	377万人
訪日外国人	335万人	733万人
内米国	54万人	81.7万人
内中国	22万人	81.2万人

寺島実郎氏(2007)による。

アジアが世界GDPの4割を占める時代(20年後)へ:  
現在25%(日本11%、その他アジア14%)  
中核としての大中華圏の躍動: 経済産業における  
「陸の中国」(中国本土)と「海の中国」(香港・台湾・シンガポール)  
の相互連携の深化: 中国の南進

ロシアの「大ロシア主義」への回帰: プーチンの自信回復を支える石油生産  
(03年849万BD、04年929万BD、  
05年948万BD、06年速報値972万BD)

\* 天然ガス(石油換算)と原油生産量の合計での  
世界ランキング(2005年):  
1位ロシア2145万BD  
2位米国1679万BD 3位サウジアラビア1198万BD、  
4位カナダ664万BD 5位イラン577万BD

寺島実郎氏(2007)による。

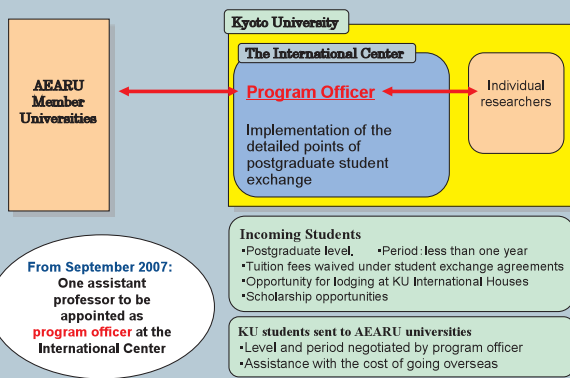


AEARU総会および理事会 2006年9月28日 POSTECH 韓国浦項、慶州

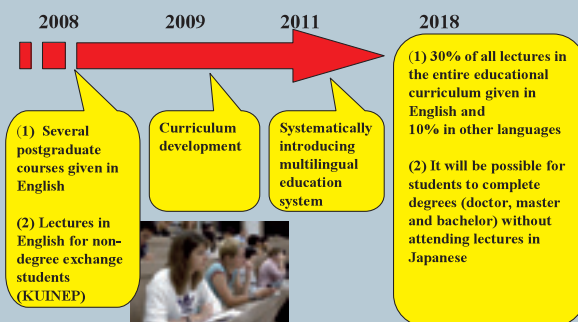


AEARU総会および理事会 2007年8月21, 22日 京都大学

1. Program to Promote Student Exchange in East Asia



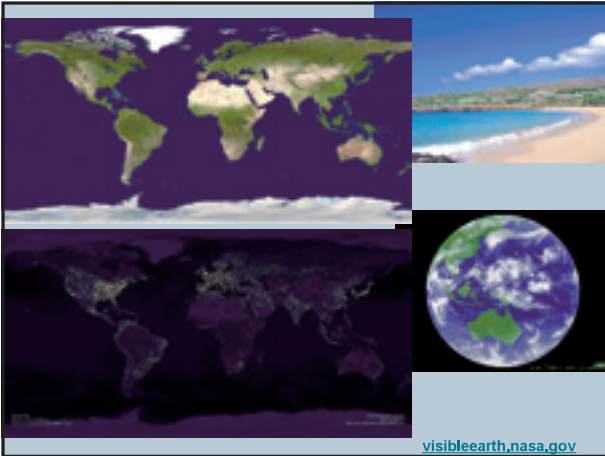
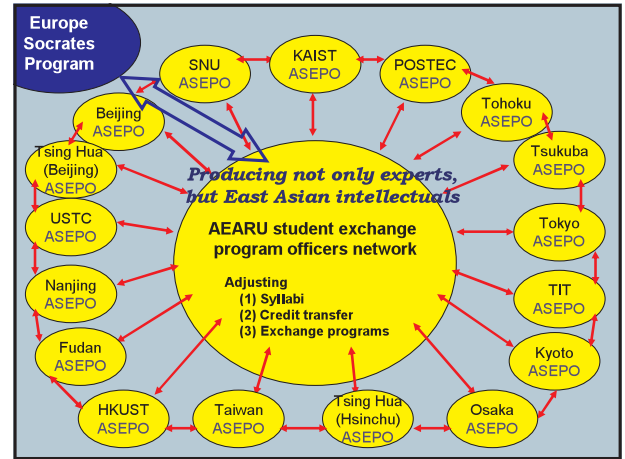
2. Ten-year plan to promote multilingual education

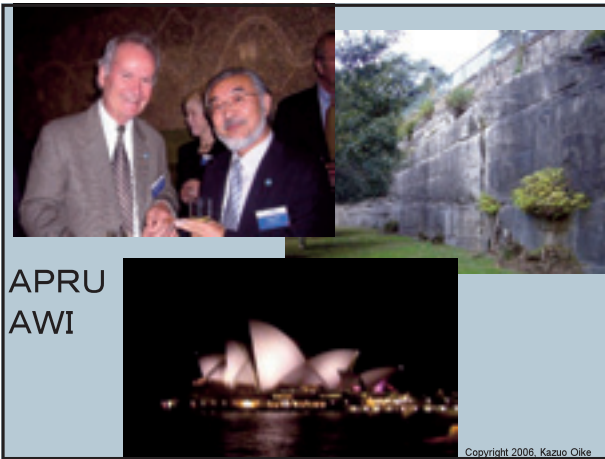




**One Proposal: Network of AEARU student exchange program officers**  
(a proposal to AEARU member universities)

1. Each AEARU member university could appoint an AEARU student exchange program officer (ASEPO)
2. ASEPO meetings would be held to increase the operational effectiveness of student exchange programs
3. For effective communication among ASEPOs, we propose the establishment of a communication network based on a solid administrative organization.





APRU  
AWI

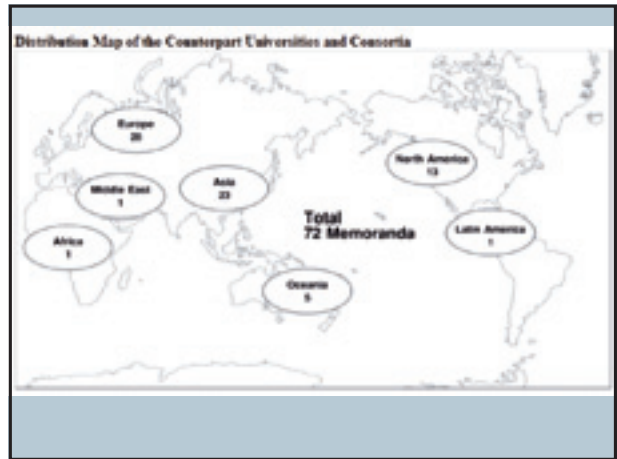
Copyright 2006, Kazuo Oike

**Campus Information**  
**Facilities Overseas**

As one of Japan's leading research-oriented campuses, Kyoto University not only engages in joint research with many universities overseas, it is also building its own overseas research facilities, chiefly in Asia and Africa. Plans call for nearly half of the 22 projects that Kyoto University is running as part of "The 21st Century COE Program" to be located in overseas research centers.



霊長類研究所 ギニア共和国で「緑の回廊」



For the future of peace and harmony for the human family

Hiroshima

In memory of the investigation team of Kyoto University

Nagasaki

**21世紀の京都大学(教育)**

大学の世界同質化の進む中で、自由の学風と自学自習の伝統を受け継ぎ、若者が何かに向かって真剣に対峙し、その経験を通して個を確立し、その結果として社会、国家の多様性と公共性の増進に貢献し、最終的に世界の平和に貢献する。21世紀の京都大学は、若者がこのような体験のできる場所と機会を提供する。

**基本理念**  
京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多角的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

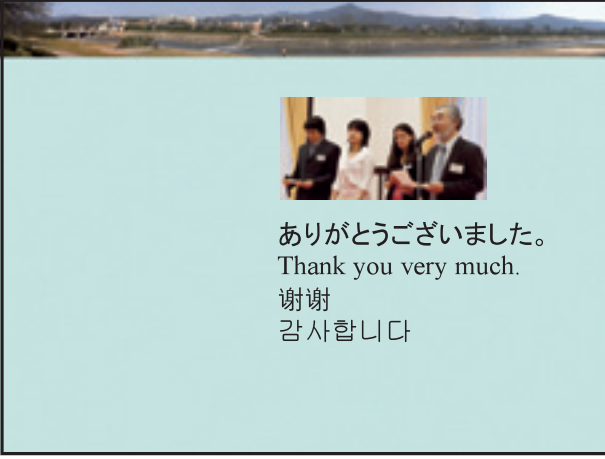
**研究**  
京都大学は、研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う。京都大学は、総合大学として、基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の多様な発展と統合をはかる。

**教育**  
京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

**社会との関係**  
京都大学は、開かれた大学として、日本および地域の社会との連携を強めるとともに、自由と調和に基づく知を社会に伝える。京都大学は、世界に開かれた大学として、国際交流を深め、地球社会の調和ある共存に貢献する。

**運営**  
京都大学は、学問の自由な発展に資するため、教育研究組織の自治を尊重するとともに、全学的な調和をめざす。京都大学は、環境に配慮し、人権を尊重した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える。

(平成13年12月4日制定)



ありがとうございました。  
Thank you very much.  
谢谢  
감사합니다

## 5. 問題提起

高等教育研究開発推進機構長 北村 隆行

先ほど丸山理事から大きな方向づけがありまして、「内部崩壊」とありましたが、学生さんのことは皆さん日々接してられることが多いかと存じますので、私は外からのいわゆる「外圧」とおっしゃられた、まわりの状況を少し話したいと思います。特に、中期目標・中期計画を視野に入れて今日議論していただきたいんですけども、よくご存じの方はいらっしやると思いますが、総長からお話がありましたように、大学評価とセットです。しかし、多くの方は、こういう単語は聞いておられても、中身はあまりご存じないんじゃないかと思ひまして、システムからご説明させていただきたいと思ひます。



今年のテーマは丸山先生から方向づけがありましたので、飛ばさせていただきます。そもそも、法律に基づく大学評価は大きく分けると、法人評価と認証評価の2種類です。それぞれ基になっている法律が違ひまして、法人評価は国立大学法人法、認証評価は学校教育法です。いわゆる中期目標・中期計画に関係しますのは、法人評価と言われるほうです。だから今日は認証評価についてはしゃべりません。これを含めてしゃべりますと、1時間では終わらなくなりますので、法人評価について少し詳しく説明させていただきます。

どういう構造になっているかと言ひますと、国立大学法人と書いてありますが、これが京都大学です。中期目標・中期計画を国立大学、京大がつくる。それを文部科学大臣に出す。少しやりとりがあるんですけども、基本的にはそれが認可され、それに基づいて運営・教育・研究等をやるということです。その実績につままして、文科省の中にある国立大学法人評価委員会に報告を出す。ここが評価をするわけなんです。ただし、教育・研究については専門性が高いので、それを大学評価・学位授与機構、普通「機構」と言ひております機関に丸投げする。教育・研究はここで評価して、その結果を返してくれるというわけなんです。評価委員会はそれを尊重するということなんですけれども、まあ、ここでの評価をそのままスルーする形になっております。これが大きなスキームです。

どんなタイムテーブルになっているかと言ひますと、いわゆる第Ⅰ期が法人化が始まりました平成16年から始まっています。6年がⅠ期です。だから平成22年から第Ⅱ期が始まります。2サイクル目に入るということです。これを見ていただいたらわかりますけれども、中期目標・中期計画と言ひましたが、さらに年度ごとにブレークダウンしたものを年度が始まる前に出します。年度が終わった直後ぐらいにその報告を出します。そのサイクルを繰り返していきます。それを年度評価と言ひています。これは全部通称です。正式な名称は先ほど総長がスライドでお見せされたようなものですが、長いので、みんな通称で呼んでおります。

これを繰り返していったサイクルの最後のところで最終評価を受ければよいというのが普通ですけども、その前にサイクルが変わってくるようなことが出てきました。というのは、第Ⅱ期の計画を立てなければいけないんですが、その1年前ぐらいに原案を京都大学から文科大臣に出して、やりとりをしなくては行けない。ここに案ができていなくては行けない。ただし、第Ⅱ期の計画を立てるのに第Ⅰ期の結果がどうだったか、次期のお金とかかわってきますので、そういうことがわかっていないと第Ⅱ期の計画は立てられないんじゃないかという議論が出てきました。それで、それに対応するような1サイクルのまとめ、我々が通称「暫定評価」と呼んでいるようなものですが、を1年前に出せということになってきました。

ここに出そうと思いますと、京都大学のような大きい大学では、その前に大学内の議論をしなくては行けませんので、議論はその前の年にやるということで、それが今年にあたっている。今年の第Ⅰ期のまとめは、すなわち第Ⅱ期の計画をつくることにつながっております。だから、今年のシンポジウムは、「Ⅱ期中期目標・中期計画をにらんだ」ということになっております。

実は、法律の中にはどこにもお金とかかわっているということは書いてありません。「所要の措置を講ずる」というあいまいな言い方が法律の中であるんですけども、ずるいもので、国会の附帯決議とか、国会答弁とか、暫定評価の実施要綱に「次期の運営費交付金は関連してるよ、今年やる評価の結果をもって予算措置をするよ」というふうに書いてあります。

さらにもっといやらしいことがあります。よく法人法を読みますと、その後ろに総務省が見え隠れします。いわゆる国立研究所等がかなり苦しんでいる独立行政法人通則法というのがありまして、国立大学法人法にもそれを準用する、そこを見なさいと書いてあるのです。そこには、「総務省が勧告する権利を持っている」と書いてあるのです。ご存じのように総務省は役所の組織を考えると、当然、お金や人を減らそうという方向性と関連があります。「勧告」という言葉は、「聞いておけばいい」ような気がするんですが、かなり強い拘束力を持っているというのが現状です。つまり、文科省の向こう側には総務省がいる。

これは文科省からもらった先ほどお見せした図ですけど、さりげなく先ほど説明したサイクルの外側に総務省が書いてあるんです。もちろんお金のことは財務省がその向こうにいますので、私たちは、文部科学省だけを見て評価をするのではなくて、その向こうに総務省がいて、さらに財務省がいるというような外部環境の中に置かれている。これが大学の評価の現実なんです。

私もこの仕事をするまで、中期目標・中期計画はあまり見たことがありませんでした。先ほど京都大学のウェブという話が出ましたが、実はウェブの中にあるんです。しかし、多くの方は見られてないんじゃないかと思います。大きな構造はこんな7つの項目です。これは、大体法人法の中で「これを評価しなければいけません」と示されている項目です。目標は、よく見てみますとこんな構造になっていまして、大項目がさらに中項目に、中項目が小項目に、さらに小小項目、小小小項目まで割られています。すなわち、5層構

造になっています。ここにたくさんポツがありますが、具体的なことがいっぱい書いてあります。いくつぐらい項目があるとお思いでしょうか。

中期目標と中期計画の違いをご存じでしょうか。こんなふうになっておりまして、5層構造の中期目標に对照させて中期計画を書いてあります。数字が違っていることからわかりますように、大体、項目ごとに1対1対応しています。一番下の小項目がこちらにもいっぱいあります。

これは特殊な例で、取ってきたところが悪かったかもしれませんが、目標の項目が多くて、計画が少ないんですけれども、大体は、目標が少なく、計画が多くなっています。目標を立て、それをいかに実行するかというふうな形の構造になっております。

全部紹介することはできませんが、中期目標95、中期計画 284です。大体計画が目標の3倍です。各国立大学が、大体同じようなフォーマットでつくっています。項目はもっと多い大学もあります。

これぐらいの数があるということは、微に入り細に入り、「こういうことをやるよ」と約束しているということなんです。また、外圧の厳しい目からの言い方をしますと、「これを守らないとまたお金の響くよ」というような状況が「評価」というわけです。

さて、そのお金とつながって今年やらなくては行けない暫定評価の構造です。ここに書いてありますように、法人全体（京都大学）で出す部分が主です。中期目標・中期計画のすべての項目に対して答えなければなりません。ただし、教育・研究に関しましてはこの機構が取り仕切ります。さらに、各部局で「ちょっと大変やなあ」と思われている、部局ごとの評価というのがここに入ってきました。

これは、後出しジャンケンだという批判もあり、昨年度は尾池総長が国大協の評価関連委員会の委員長をされていまして、文部科学省とかなりやりとりをいたしました。私もそのお手伝いをしたのですが、文科省自身が譲れないんですね。水準とそれから質の向上度の評価をせよと言われております。こういうのは見られている方はいらっしゃるかもしれません。

例えば、教育水準。必ずデータを示せ、客観的資料を出せと言われるんです。これをもって示すのがなかなか難しい項目が多々あります。

全部をご紹介することはできないので、ちょっとだけ例をとりますと、例えば卒業者の進路、これはデータ例です。機構が「こんな例もあるよ。でも、これに従わなくてもいいよ。」と言ってるんですが、こんなのが出ますと「デフォルトはこのデータか」とある程度思うのは人情でしょう。就職のデータは、たぶんど部局もお持ちだと思んですが、下のほうの「関係者からの評価」というのがいるんです。しかも、データや客観的資料をもってそれを示す必要があり、やや答えにくいようなものもある。

研究のほうも各部局でやらなくてはならないパートがあります。研究をSS・S・A・B・Cに分けて、SSとSをリストにして出せというふうなものです。

こういうのが大きなバックグラウンド、システムです。

さて、今日のシンポジウムの主立った趣旨は、こういうものを背景にしながら教育についての問題点を議論していこうということです。

1つ目の議題は、教育資源です。それは、人もお金も施設も含めてです。第I期中期計画でこういうことを京都大学は約束しています。番号は295項目です。「重点的な資源配分をするよ」と言っているわけです。さらに、評価委員会は「大学は計画してようが計画していまいがこれは絶対全大学がんばってくれよ」というような共通指摘事項を18年度に出してきました。この中で「効率的な資源配分、重点的な資源配分をなさいよ」と、「これは特別に私たちが注目して評価する項目ですよ」と言ってきました。もちろん京都大学では例えば財務的なこととかいろんな措置をしています。

効率化係数というのは一種の定員削減だと思っていただいてもいいんですけども、「1%ずつ毎年削減なさい、人件費を削減なさい」というので、大学から文句が出ました。「学生がいるから教育の部分の人員は削れないじゃないか」という文句です。それに対して、教員には標準教員と特定教員がいる。教育を担っているのが標準教員であり、大体、京都大学では半分ぐらいの教員の方がこちらです。半分の方が特定教員と言われ、それ以外の形になっています。こちらは研究所・センターが多い、いわゆる協力講座等が入りますし、学部・研究科の3分の1ぐらいの先生がこちらになっています。「減らすのはこっちだけだよ、こちらは減らさないよ」と文科省は言ってきました。

大学の中で議論されまして、部局長会議や役員会を経て、「大学全体で痛みを分かち合おうね」ということになっています。「特定教員だけではなくて、全体的に減らそうね」ということで、今は進んでおります。こういうふうなお金にかかわること、定員にかかわること、これからますますもっともっとシビアなことが出てくるかと思しますので、教育資源についてご議論していただくことは非常に大切なことだと思っています。

2番目は、教員の評価です。教員の評価のシステムを「検討する」と京都大学は書いたんです。「検討している」というので逃げられるかと思ったら、評価委員会から「他大学の模範となるようなシステムを開発すること」と言われているわけです。こういう指摘も受けまして、やらざるを得ないということで、今、この人事制度検討会教員評価ワーキンググループで骨子案が練られていて、部局長会議で報告されました。まだ決定まで至っていませんが、議論が進んでいるところです。こういう教員の評価をどうするかということも非常に大切な問題で、考えていただきたい。議論の俎上に乗せていただきたいと思っています。

教育課程では、たくさん約束していることがあります。いろいろあるんですけども、全学共通教育（教養教育）と専門教育、学部教育と大学院教育、大学院教育の中でも修士課程と博士課程、あるいは、学部間の連携、研究科間の連携をよく考え直すことです。文部科学省のルールとしては、昔みたいに非常に強い拘束



がなく、かなりフレキシビリティが許されています。例えば3年学部3年修士というような方法も議論されていまして、規制緩和の流れの中で「いいアイデアがあったらいいよ」ということが言われています。将来の夢をとるのであれば、あるいは京都大学らしい教育をとるのであれば、こういうふうな課程間の連携も考えながら、新しい教育について議論していただきたい。それが3つ目の課題です。

実は考えるといっぱい課題はありますが、主なものだけピックアップして話をしようと思います。先ほどの総長のお話にありましたが、学生定員も課題のひとつです。最初は、博士課程の充足率が悪い研究科があるというのも頭に入れながら、計画に約束が入ったと思います。ところが、状況がかなり厳しく、先ほどの共通指摘事項の中でも「しっかり収容定員を守れ」ということを言っています。

もう一步厳しいことも出てきています。例えば、学部の定員超過です。これは、私学からのクレームが大きくて話が進んでいると思うのですが、文科省から非公式に配付された資料を見ますと、「学部の定員超過をした場合には授業料を国庫にある割合で返せ」というような、罰金案みたいなものまで考えられています。これが大学院まで適用されるかどうかは、いろいろ私学との関連があつて難しいところがありますが、この定員問題、超過と充足についても議論していただかなくてはならない。これも先ほどの教育課程の問題とリンクしてくるのですが、これらを考えあわせながら知恵を出して行って、京都大学らしい教育方法を考えていただきたい。

4番目・5番目の国際化、英語化の教育につきましても、いっぱい約束しています。先ほどお話がありましたが、京都大学の学生さんの他国への留学、それから留学生だけではなくて、京都大学の学生への英語の講義ですね。さらに、英語の教育じゃなくて英語による教育をどうするか。こういうのは、先ほど総長がお見せになりました政府の委員会の資料にほとんど全部と言っていいほど出てきます。京都大学の中でもこういう検討会をつくられて、長期計画を練っている最中です。いま検討中だということをたくさん紹介していますが、こういうところへどんどん意見を出していただいて、吸収していこうというのが、今回のシンポジウムの大きな趣旨です。もちろん先ほどありました留学生に関することも含みます。

英語教育は、10年でかなり改良していただきました。全学共通教育はここにあるような3つの旗印を持ってまして、特に外国語の場合は文化的言語力に相当し、いろんな工夫をしていただいています。CALLとか、どこかで名前を聞かれたことがあるでしょうか。専門語彙のデータベース等いろいろあります。

CALLというのは、後でご紹介があるかもしれませんが、コンピューターを使った英語の勉強です。最初は特に単位を落とした学生を対象としてきました。単位を落とした学生はモチベーションも低いわけですが、以前はそういう学生が、新たな学生と一緒にクラスになるんですね。ものすごく人数が多くなって、語学教育が大人数でやらずにちゃいけないという問題がありました。コンピューターは最近の若い学生さんは好きですから、モチベーションも上がるということもあって、そういうのを使って勉強できないかという

ような観点から、CD-ROM（ソフト）を開発していただきました。もちろんそれをちゃんと勉強しているというのをレギュラーにチェックし、最後に試験をして単位にというものです。最近、英語以外にも使われはじめています。また、他大学から教えてくれという要請が多くて、いろんな工夫を水光先生、田地野先生をはじめとして、中心になる先生方にさせていただいています。このようなことも、知っていただきたいと思っています。

中期目標に戻りますが、気になる点がいくつもあります。

例えば、内容とはちょっと離れるのですが、研究所・センターの先生方はちょっとご注目いただきたい。中期目標・中期計画の中に別表があって、基本組織というのを書き込むようになっていきます。第Ⅰ期の場合は書き込めと言われていたのは学部・研究科、附置研究所だけで、京都大学はこれだけを書き込んでいます。気が付かれるように、センターというのがございませぬ。今度、暫定評価の中でも共同利用のセンターだけが入っておりまして、共同利用のセンターだけが先ほどの部局別の評価を受けなさいということになっています。「ラッキー、私たちは評価を受けなくてもいいわ」という考えもあるかもしれませんが、評価されないことのほうのデメリットもお考えいただきたいと思ひます。

これはオープンな言い方ではないんですけども、文科省からすればそれは学内措置じゃないかと言わんばかりなんです。またはちょっと不穏な噂を聞きますところ、第Ⅱ期ではこれがさらに、研究所の中でも全国共同利用の研究所だけ表に載せなさいというふうな議論が進んでいると聞いております。評価されないということは、そこから直接的な予算要求ができなくなったりして、ダイナミックな変革がしにくくなったりするでしょう。

また、このへんはちょっと政策的なことで、霞の向こうではあるんですけど、悪く悪く考えますと、学内措置なので、いろいろお金は学内で措置しなさいと言われる可能性もある。大きなお金が減るかもしれないという危険性もあります。決まっているわけではなくて、霞の向こうに少しあるというわけです。こういう危機感を持って臨みたいと思っております。

評価は、大学全体、法人で受けます。そうすると統一性を持って書かなくてははいけません。統一性は、総長が示された大学の理念が芯なんです。これから中期目標や中期計画が出てきていますし、各部局のミッション、各部局としての計画等が出てきています。これを基に統一性を持って結果に書かなくちゃいけないんです。

一方、京都大学には学部の自治があります。この折り合いが非常に難しいところで、学部の自治というのは私も大切なことだと思ひます。「世界一がたくさん」と先ほど総長がご紹介されましたが、そういうのもやはりある意味の独立性を持って自分たちの考えを持って進められる組織だからだと思ひますが、一方、文科省からは「おまえたちバラバラじゃないか」というような指摘が暗にされています。これはいやな兆候でも

あるんですけども、現実には現実で、危機感を持ってその学部の自治と統一性とをまとめあげていくのが、評価が大変難しいところです。こういうところも頭に入れながら、「私たちの部局はね」だけでは困るので、京都大学全体を見ながらご議論いただきたい。

例えば、各部局の理念、ミッションも1つの例です。研究所とセンターを別にいじめているわけではないんですけども、今までは研究ということに大きく重きをおかれたミッションを持っておられました。ところが、グローバルCOE等に見られますように教育への資金のシフトがかなり見られます。それは日本だけじゃなくて世界的な潮流でも大きく見られることだと思います。そういうときに、研究所・センターがいかに教育にかかわっていただけるか、あるいはミッションステイトメントとして教育をどのように取り扱われるか、大きなことなんです。このへんの所も頭に入れながら議論をしていただきたいと思っております。

データベースは時間の関係もありますので飛ばします。

今までは、京都大学の約束したことを中心に、固い地盤があるところについて話してきました。ここからも少し柔らかいところ、どうなるかわからないというところを見ていきたいと思っております。

先ほど総長からご紹介があったのと同じようなデータソースだと思うんですが、こんなところがいっぱいいろんなことを、勝手なことを言ってます。教育のことを全く知らないような方が、その場限りの自分の経験でものを言われているようなものがいっぱい出てきています。こんなにたくさんあります。もうちょっとブレイクダウンしたもの、これはたまりかねて文科省がつくった表をもらったんですけども、横軸にいくつもいくつも各省庁が持っている委員会があって、縦軸には政策を分けてあるんです。読めないのですが、こんなたくさんところがこんなたくさんところに何かものを言ってるわけです。

それを今年の6月にまとめることになりまして、教育再生会議で第2次報告というのが出ました。これをベースに書かれたのがいわゆる安倍内閣の最初の骨太の方針と言われるものです。官僚というものはうまく書くもので、たぶん文科省の役人は、そういう意味では非常に知恵があったんだと思うんですけども、このめちゃくちゃさからするとかなりマイルドに、何かわけがわからないように書いてあるんですね。

さすがに知恵があるものだと思いますが、ただ、わけのわからないように書いてある中でも、ちょっとピックアップしてくると、いま私が紹介したようなところは入ってるんですよ。さらにもうちょっといろんなところを持ってきたんですが、いやな言葉が入っているようなところは少し持ってきました。「時代や社会の要請にこたえる」、これは「ウン、それは当たり前や」と思うんですけども、読みようによっては、「おまえたちを社会の流れの中にはめこんでしまえ」というようなとってもいやな読み方もできます。あるいは「大学による自助努力を可能」という言葉もあります。これも読みようによってはとっても厳しいいやな言葉にも読めます。

たくさんこういう言葉が入っていますが、いま私が指摘したようなことは「必ず議論するように」と指摘さ

れています。これが政策提言ですよ。安倍内閣の強さがちょっと選挙の後どうかわかりませんので、果たしてこれがどれくらい強い政策となって返ってくるかどうか、私たちには全然見えません。それは内閣の将来にもよるでしょうが、そういうものがあって、霞の向こうだと私が申し上げたのは、こういういろんな会議のまとめで出てきた政策自体がどれくらい、かかわってくるかわからないんですけれども、ただ、一番下にこういうのがありまして、これは先ほどもいろんな所に出てきているということです。これは変わらないだろう。非常に厳しいことです。

「大学からの意見提言なんてものはないねえ」と総長先生はおっしゃられたんですけど、じゃあ、文科省はどうしているのか。出してくれているんです。いろんな教育の専門家と言われる方がいろいろ出しているんですが、少し足が遅い。勝手なことを言うのはすぐできますので、どうしても足が早く、センセーショナルで新聞も取り扱いやすい。少し足の遅いのが残念ですが、文科省もいろんなことを言っている。全部を読んでもいいんですけど、これもなかなか大変です。こういう大学審議会や中央教育審議会の答申は、多くのものはそれなりの形で、どれくらいか遅れて大体政策になってきています。

2年半ぐらい前に出されたときには、こういうもので12の提言というものが出ています。そのときに先ほど申し上げましたような3年プラス3年、教養教育や専門教育について総合的に見直しなさいよとか、大学院について考え直しなさいよというふうなことも言われています。留学生の交流の促進、いま申し上げたようなことはこの中に出ています。これだけじゃなくて、この中のほとんどの部分に今までのようなものは、出てきています。

これを京都大学の教育にどういうふうに折り合わせていくかというか、あるいはもうちょっと夢のある言い方をしますと、こういう状況の中でも京都大学の学生をいかに自由の学風とか自学自習という言葉のもとにどのように教育を具体化するか。もう1つは、まわりのことがあります。社会へ京都大学の教育をどういうふうにして説明するか、アピールするかが重要になってまいります。先ほどの丸山先生のお話ともあわせますと、自学自習を柱に、京都大学の教育の将来像をつくっていかなくちゃいけないんですけれども、現実なかなか甘くなくて、評価というものがかかっている。もう1つは学生さんの気質の変化という、内部崩壊という言葉もありましたが、圧力がかかっている中で、これを柱にどういうふうに将来像をつくっていくかというのが、このシンポジウムの役目と考えています。

最後に分科会のテーマを示しまして、私が言ったようなことのキーワードだけ少し取り上げてみました。これを中心に議論をしていただいたらどうかと思っております。

外形的な説明がかなりの部分を占めましたが、1～2分だけ時間がございますので、もし私が何か間違ったことを言ったり、あるいはこういうことは大切なので、もう少し言っておいてもらいたい、これは頭に置きながら議論してほしいと思われることがありましたら、挙手をお願いします。ちょっと司会のほうに帰り

まして、お受けしたいと思います。

**磯（情報学研究科）** 現在、評価の実行委員会の委員長をしておりますので、多くの先生方には、私の本意ではないわけですが、あれをしてくれ、これをしてくれというようなことでご迷惑をかけ、またご協力をいただいておりますことを感謝いたします。北村先生は非常にマイルドに言われたのですが、私は非常に腹が立っていることがたくさんありますので、この機会に申し上げて皆さんと共有したい。

それは何かと申し上げますと、本来は、京都大学の理念があって、その下に各学部、研究所、センターの理念があって、そしてそれにリンクする形で中期目標・中期計画があってというふうになっているのであれば、これは実行もできるし評価もできるわけです。ところが、まず、各部局の理念、各学部の理念というのが、場合によっては京都大学の理念と相反しているところがある。全部を踏襲してくれとは言わないんですが、相反しているところがある。そこについての部局の自己点検ができていない。

私は前回ありました実行委員会で、大学全体として各部局の自治を尊重すると言っているわけですから、大学全体の理念は理念としても、どうしてもそれが当該部局の教育・研究と抵触するのであれば、それをなぞる必要はないと思うけれども、意識的にそうできないということをきちんと評価してください。つまり理論武装してください。その理論武装がある中であればそれは説明ができるけれども、各部局の自己点検・評価を拝見させていただくと、まず部局の理念が京都大学の理念とどのような位置関係にあるかということが自己点検できていない。

さらに、各部局にいろいろな教育改善とか中期目標・中期計画があるんですけども、それがまた部局の理念とは関係なく、あれやりましょう、これやりましょうとやっておられるところがあるんです。ですから、全体として評価をまとめようとする、評価書を書くときに、評価書は基本的に、文科省がどのようなになっているかという、「大学の個性を豊かにしてください。ですから総体的なものでよろしい」。それが下の段階にいきますと、部局について、「その部局の独自性が出るように考えてください」。しかしながら、外に対して資料を出すときには、部局についてどうであるかということを書かれたものは、各部局の目標であったり、理念であったりというわけですが、そこと目標との、現実に行われている施策とのリンクがないので、なぜそうしたのかということの説明ができなくなるんです。

例えば先ほど総長が留学生のこともおっしゃいましたけれども、この間の認証評価の書類を書くときに一番困ったのは、留学生を受け入れている場合は、その入学試験が当該部局の理念にそっているかどうかを検証しろというんです。そうしますと、実は学部・研究科、いくつかの中で二、三のところは留学生についての受け入れをミッションの形で書いてありますから、そのような形で入学試験ができていくかどうかを検証できるわけですが、ほとんどの部局は実は漫然と留学生を受け入れている。たくさん取るということは施策として目標には書いてあるんですが、理念には何も書いていないので、入学試験としてどのようなもの

を課してどうしようとしているか、何も書かれていない。さらに、「当該部局の中で留学生を取っている場合はどういうふうに教育に配慮していますか」ということでは、何も配慮していない。もちろん1つ1つ個別の留学生に対してはいろいろ配慮があるわけです。個別の留学生に対しては配慮があるわけですが、組織としてどのように対応していますか、大学としてどのように対応していますかということをお問われて、評価書を書こうと思うと書けないわけです。

書けないから結局どうなるかという、私も委員会のときに申し上げましたが、外へ出す報告書ですからウソは書けませんけれども、グレーの部分は「ちょっと白いな」と書いたところもありますし、黒を白とは言いくるめませんけれども、灰色の部分はどうしてもいろいろなものから傍証して、「いや、灰色だけれども実は白いんだよ」みたいなことを書かざるを得ないわけです。そういう作文力でごまかすような評価が、今回通ったとしても、これから通るかどうかは私は疑問だし、無理なのではないか。

ですから、これから議論されるⅡ期の中期計画ということの中では、まずは京都大学に理念があって、その理念にリンクして各部局の理念があって、それを実現していくものとして各部局の中期目標・中期計画があって、そしてそれが総体して大学の中期目標・中期計画があるというようなシステムティックな取り組みをしていただかないと、これは対応ができない。

私個人的な希望は、一刻も早く私を評価の委員長からやめさせてくださいということで、どなたがなっただけでもいいんですが、この苦しみを分かち合いたいというか、やっていただけると今どうなっているかわかるんですが、ほとんどの先生方は今どういうふうに置かれているか、この切羽詰まった状態がご理解いただけないんじゃないかと思うんです。それを理解していただかないと、次の中期計画ということの中の議論ができないと思います。

私は一方で、評価の委員会でも申し上げたんですが、京都大学が部局自治を大切にしているということは、今日決まったことでも昨日決まったことでもなくて、百年間ずっとそのような形でやってきているわけですから、私はそういう京都大学の気風と言いますか、学風というものは大事にすべきだと思う。

しかしながら、だからといってそれは各部局が、例えば学部と研究科だけでも15研究科がありますが、そこがお互いに主張するだけであれば収拾がつかいません。ですから、今までであれば部局の独立性と言いますか自主性ということが強調されていますが、理念の中には調和という言葉も出てまいりますので、やはり各部局の自主性を重要にしなが、大学として調和をとる歩み寄りをしていただきたい。

ですから、今までであれば、いくつかの学部は「これを言い出したら聞かない」という話があるわけですが。それはその個別には事情はわかるわけですがけれども、大学全体という視点で歩み寄っていただかないと、できないんじゃないかというのが率直な私の気持ちですので、今日の議論の中ではそのようなことをご配慮いただいて、共通理解をしていただけたらと思います。

もう1点、最近腹が立っていますから、いろいろ言って申し訳ないんですが、教員に対してはこのような形で、評価に対して、大学評価にはさまざまなものがあるのを総称して申し上げますが、評価に対しての研修があるんですが、職員の方に対して組織的な研修がなされていない。これは事務局で一緒に仕事をしても、事務局の職員の方が、一部の方は非常に評価について精通されているわけですが、評価の重要性なり意味が全くわかっていない、法人化の意味が全くわかっていない、課ごとわかっていないんじゃないかと思うところもあります。このような状態を改善していただくためにお考えいただきたい。

**北村 磯先生**、よくわかります。明日もありますので、その議論を残しておきましょう。私も実行委員会に参加していますし、ここでの議論はそういう正式の委員会にフィードバックされて京都大学の意思として出ていきますので、皆さんいろいろないいアイデアを出してください。遠慮なくいろいろないいアイデアを出していただくのが今日の場合です。ものを決める場ではございませんので。

磯先生、中断してごめんなさい。

分科会への移動の前に一息入れていただいて、コーヒーを飲んでいただいて各分科会に向かっていただきたいと思います。

長い時間お聞きいただきましてありがとうございます。

それではコーヒータイムにいたします。

# 中期目標計画と大学評価を視野に入れた議論のために

北村隆行  
 高等教育研究開発推進機構 機構長  
 工学研究科 機械理工学専攻

# 今年のテーマと分科会

テーマ 京都大学における教育の将来像を問う  
 第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する

1. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題  
 文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る
2. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題  
 理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る
3. 学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る
4. 京都大学における英語教育の現状と課題  
 グローバル化社会における英語教育のあり方を探る
5. 学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題  
 世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る

キーワード  
 次期中期目標計画、法人評価  
 教育資源、教員評価、教育課程、定員問題、組織、理念、データベース  
 国際化、外国語教育、留学生

# 大学評価

法人評価  
 (国立大学法人法)  
 年度評価、暫定評価、最終評価 (通称)  
 国立大学法人への移行に関する議論  
 新しい「国立大学法人」像について  
 通称 グリーンブック

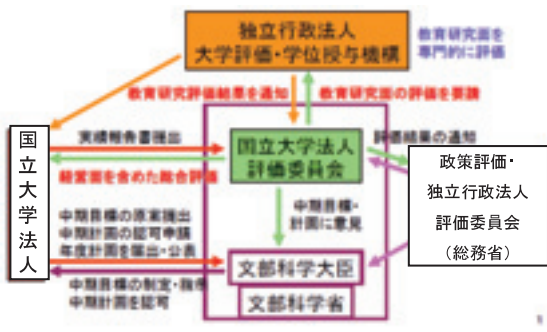
認証評価  
 (学校教育法)  
 事後評価  
 7年に1度  
 京都大学は本年に受けている

# 大学評価

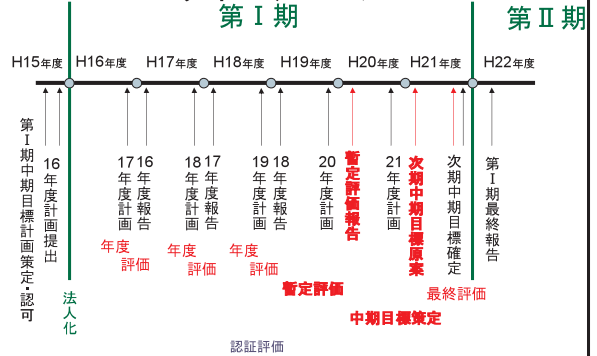
法人評価  
 (国立大学法人法)  
 年度評価、暫定評価、最終評価 (通称)  
 国立大学法人への移行に関する議論  
 新しい「国立大学法人」像について  
 通称 グリーンブック

## 中期目標計画とその評価

# 中期目標計画と法人評価



# 第Ⅰ期中期目標期間のタイムテーブル



# 第Ⅱ期の予算との関連

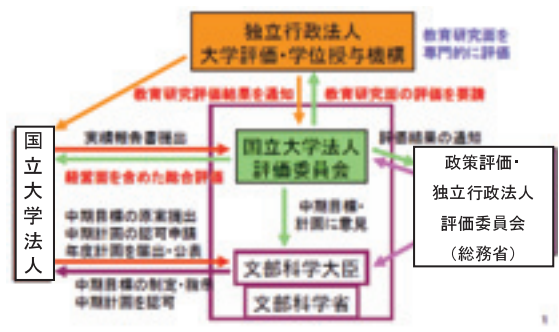
国立大学法人  
 文部科学大臣は・・・業務を継続させる必要性、組織の在り方その他・・・検討を行い、・・・所要の措置を講ずる・・・ 独立行政法人通則法第35条の読替

文部科学省 調査検討会議の報告書 予算措置  
 国会附帯決議(H17)  
 ……運営交付金を算定する際にその評価結果がどのように反映されるか……  
 国会答弁(H15)  
 ……評価結果を反映させた次期中期目標、中期計画が策定され、その内容に応じてその業務の確実な実施を担保するための所要の予算措置を講ずる……

暫定評価の実施要綱(H19)  
 次期中期目標期間における運営交付金の算定に反映させることができるようにするために、……暫定的な評価結果を明らかにすることが必要である。

総務省に、・・・評価の結果に関する意見の表明、・・・事業の改廃の勧告等を行う委員会を置く……  
 → 独立行政法人通則法 → 政令  
 準用 中央省庁等改革基本法

# 中期目標計画と法人評価





## 中期目標の構成

### 大項目

#### 前文

- I 中期目標の期間及び教育研究上の基本組織
- II 大学の教育研究等の質の向上に関する目標
- III 業務運営の改善及び効率化に関する目標
- IV 財務内容の改善に関する目標
- V 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標
- VI その他業務運営に関する重要目標

II 大学の教育研究等の質の向上に関する目標	1 教育に関する目標	(1) 教育の成果に関する目標	1-1. 教育の目的及び目標	【学士課程】 ・学問の伝統を理解し、社会の急激な変化にも対応し得る、幅広く深い教養と総合的な判断力等の知の基盤を涵養し、国際的視野とバランス感覚を備えた人材を育成する。 ・専門学系の教授を通じて実践能力を養成し、最先端分野を包括する高度専門教育を実施する。 ・大学院課程に進学し、高度な研究課題に取り組み得る基礎学力を備えた人材を育成する。 【大学院課程】 ・基礎研究をはじめ、多様な学術研究を推進するとともに、すぐれた研究能力や高度の専門的能力を備えた人材を養成する。 ・学術研究の進展や社会・経済の变化に対応できる幅広い視野と総合的な判断力を備えた専門的及び学際的人材を養成する。 【専門職大学院課程】 ・幅広い教養と学識を基盤に、高度専門職業人を養成するために、専門的知識と能力の育成に特化した実践的教育を実施する。
	(2) 教育内容等に関する目標	1-2. 卒業後及び大学院修了後の進路等に関する基本方針	【学士課程】 ・幅広い基礎学力を活かしつつ、卒業後における大学院進学及び就職のための進路設計を支援する。 【大学院課程】 ・高度な研究能力を活かし、世界をリードする研究者として活躍できるような大学院修了後の進路設計を支援する。 【専門職大学院課程】 ・専門職業人として専門分野で社会に貢献できるよう、専門職大学院修了後の進路設計を支援する。	

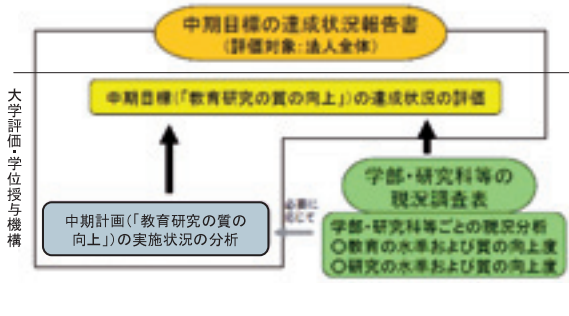
## 中期計画の構成

中期目標	中期計画
II 大学の教育研究等の質の向上に関する目標	I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
1 教育に関する目標	1 教育に関する目標を達成するための措置
(1) 教育の成果に関する目標	(1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置
1-1. 教育の目的及び目標	1-1. 教育の目的及び目標の進捗の周知及び公表
【学士課程】 ・学問の伝統を理解し、社会の急激な変化にも対応し得る、幅広く深い教養と総合的な判断力等の知の基盤を涵養し、国際的視野とバランス感覚を備えた人材の育成を図る。 ・専門学系の教授を通じて実践能力を養成し、最先端分野を包括する高度専門教育を実施する。 ・大学院課程に進学し、高度な研究課題に取り組み得る基礎学力を備えた人材を育成する。 【大学院課程】 ・基礎研究をはじめ、多様な学術研究を推進するとともに、すぐれた研究能力や高度の専門的能力を備えた人材を養成する。 ・学術研究の進展や社会・経済の变化に対応できる幅広い視野と総合的な判断力を備えた専門的及び学際的人材を養成する。 【専門職大学院課程】 ・幅広い教養と学識を基盤に、高度専門職業人を養成するために、専門的知識と能力の育成に特化した実践的教育を実施する。	・教育の目的・目標、アドミッション・ポリシー、カリキュラム等について、学生募集要項、シラバス、ホームページ等を通じて学内外に公表する。 ・学生に対するオリエンテーションや授業、教職員に対する初任者研修、学外者に対するオープンキャンパス等を活用して周知する。
1-2. 卒業後及び大学院修了後の進路等に関する基本方針	1-2. 卒業後及び大学院修了後の進路等に関する目標を達成するための措置
【学士課程】 ・幅広い基礎学力を活かしつつ、卒業後における大学院進学及び就職のための進路設計を支援する。	・キャリアサポート・センターによる進路情報の提供、国内外の各種資格試験等への円滑な対応に関するガイダンス、及び教職員による進路指導に努める。

## 京都大学の目標計画の項目数

- ・ 中期目標  
最小項目の数 95
- ・ 中期計画  
最小項目の数 284

## 暫定評価の構成



## 教育水準に関する分析項目〈各部署〉

分析項目	基本的な観点
I 教育の実施体制	○基本的組織の編成 ○教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制
II 教育内容	○教育課程の編成 ○学生や社会からの要請への対応
III 教育方法	○授業形態の組合せと学習指導の工夫 ○主体的な学習を促す取組
IV 学業の成果	○学生が身につけた学力や資質・能力 ○学業の成果に関する学生の評価
V 進路・就職の状況	○卒業(修了)後の進路の状況 ○関係者からの評価

基礎資料: ①教育活動状況 ②客観的資料 ③各大学で適切と判断したデータ

## 教育水準データ例

分析項目 V 進路・就職の状況
観点 1-1 卒業(修了)後の進路の状況 この観点では、学生に在学中に身に付けさせる学力や資質・能力及び養成しようとする人材像に照らして、学生の卒業(修了)後の進路・就職状況から、教育の成果や効果があがっているかについて把握します。
【資料・データ例】 就職率・卒業後の進路状況、就職中、進学状況、進路別の就職状況
観点 1-2 関係者からの評価 この観点では、学生に在学中に身に付けさせる学力や資質・能力及び養成しようとする人材像に照らして、卒業(修了)生や就職先等の関係者からの進路結果等の結果から、教育の成果や効果があがっているかについて把握します。
【資料・データ例】 卒業(修了)生や、進路先、就職先等の関係者からの評価結果等を示す資料

## 研究水準に関する分析項目〈各部署〉

分析項目	基本的な観点
I 研究活動の状況	○研究活動の実施状況 ○大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附属研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況
II 研究成果の状況	○研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附属研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果を含めること。)

基礎資料: ①当該組織を代表する優れた研究活動実績 ②当該組織が重点的に取り組んでいる研究 ③活性化を示す客観的なデータ ④各大学等で適切と判断したデータ

## 研究業績区分

区分	学術的意義	社会、経済、文化的意義
SS	当該分野において、卓越した水準にある	社会、経済、文化への貢献が卓越している
S	当該分野において、優秀な水準にある	社会、経済、文化への貢献が優秀である
A	当該分野において、良好な水準にある	社会、経済、文化への貢献が良好である
B	当該分野において、相応な水準 <sup>(*)</sup> にある	社会、経済、文化への貢献が相応である
C	上記の段階に達していない	上記の段階に達していない

## 京都大学第 I 期中期計画 教育資源(人、経費、施設)

- 基盤的教育経費について安定的な資源配分を図る。(166)
- 全学的な教育研究支援体制を円滑に機能させ、全学共通サービス機能を充実させるため、全学的視点に基づいた資源配分を行う。(169)
- 教員と事務職員等が連携・協力し、効果的な大学運営に当たるため、企画立案、教育研究支援、学生支援等に従事する体制を整備拡充する。(172)

参考：年度評価における共通指摘事項(H18)  
効率化係数に関する標準教員と特定教員  
教育環境改善経費等の予算処置

## 京都大学第 I 期中期計画 教員評価

- 部局等における教員の教育研究活動等に対する評価システムを整備するとともに、大学全体としての人事評価システムの在り方について検討する。(182)

平成17年度国立大学法人評価委員会からの京都大学への指摘  
…他大学の参考となる人事評価システムを開発すること…  
人事制度検討会教員評価WGでの検討(部局長会議報告)  
教員の個人活動評価制度(試行)の骨子(案)

## 京都大学第 I 期中期計画 教育課程

- 学部教育課程の編成に関する連絡協議システムの導入を図り、学部間の情報を共有するとともに、連携を強化する。(16)
- 学士課程における専門性と総合性を重視し、担当科目のバランスを考慮した体系的カリキュラムの編成に努める。(17)
- 学部教育科目との接続に配慮した大学院課程の体系的なカリキュラムを編成し、専門性の高い科目を配当するとともに、既成の専門分野にとらわれない分野横断型科目を拡充する。(24)

参考：骨太の方針2007等  
文科省審議会報告等

## 京都大学第 I 期中期計画 学生定員

- 分野の特性に応じて、大学院修士課程と博士後期課程の入学定員比率の最適化や博士後期課程学生定員の充足率の改善に努める。(13)

年度評価における共通指摘事項(H18)  
収容定員を適切に充足した教育活動が行われているか  
文科省(国大協配布)資料  
学部定員超過の場合の授業料国庫納付案

## 京都大学第 I 期中期計画 国際化<教育>

- 外国の国際交流協定大学との間で単位互換制度を拡充し、学部学生の留学意欲を喚起する。(19)
- 外国の大学との双方向遠隔講義の実施、記録保存した講義の学生による自学自習の促進等、教育効果を高めるためにインターネットを活用する。(30)
- 国内外の研究機関等に大学院学生を派遣し、大学院生の視野の拡大と研究経験の蓄積を図る。(34)

参考：骨太の方針等、審議会報告等  
京大「多言語による京大式教育体制確立十ヵ年計画」検討会

## 京都大学第 I 期中期計画 留学生

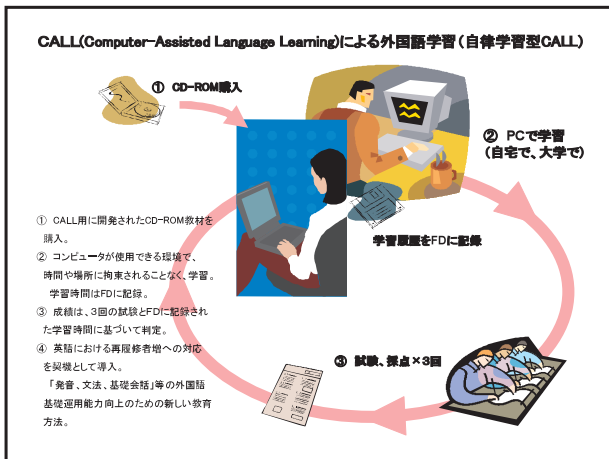
- 留学生に対する受け入れ方法の多様化を図り、外国人の修学機会を拡大する。(12)
- 社会人学生・編入学生・留学生等、多様な学生の増加に対応して、柔軟かつよりきめ細かな学習支援体制を構築する。(73)

参考：骨太の方針等、審議会報告等  
京大「多言語による京大式教育体制確立十ヵ年計画」検討会

## 京都大学第 I 期中期計画 外国語(英語)教育

- 専門知識の修得とともに外国語によるコミュニケーション能力を高めるために外国人教員による外国語中心の専門科目を配当する。(21)
- 実践的な外国語能力を高めるための教育方法・教材の改善および新規開発に努める。(29)
- 実践的な外国語の指導力を備えた教員を確保し、学生のヒヤリングやスピーチ等の能力向上を図る。(42)
- 語学力の向上と異文化の理解につながるカリキュラムの編成に努め、国際貢献に寄与する人材を育成する。(139)

CALL、専門語彙データベース等  
全学共通教育の目的：学術的教養、文化的言語力、基礎的知力



### 京都大学第Ⅰ期中期計画 気になる点(組織)

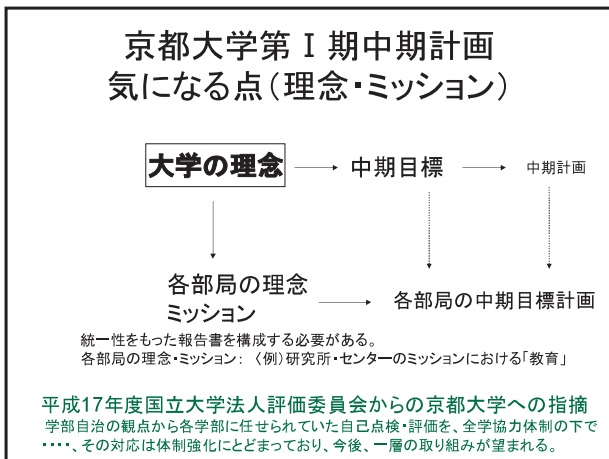
I 中期目標の期間及び教育研究上の基本組織

2. 教育研究上の基本組織

この中期目標を達成するため、別表に記載する学部、研究科及び附置研究所を置く。

別表(10学部17研究科13附置研究所)  
これ以外の教育研究施設(センターを含む)は入っていない

意味するところや影響は不明であるが、第Ⅱ期には、学部、研究科、全国共同利用研究所となるとの噂もある。評価されないことのデメリットは？



### 京都大学第Ⅰ期中期計画 データベース

• 年度評価添付資料

法人評価に限らず、評価には基礎となる資料やデータを添付することが求められている。

大学評価・学位授与機構において試行的に検討されてきたデータベースへの参加を要請されている。

多くは公表済みの基礎データ、役員会等で検討中

### 参考 今春 教育に関して意見を出した政府関連会議

- 経済財政諮問会議
- 総合科学技術会議
- イノベーション25
- 教育再生会議
- 規制改革会議
- アジア・ゲートウェイ戦略会議
- .....

政策への影響度合いは???

### 骨太の方針(2007)

教育再生会議第2次報告を基にしている

大学・大学院改革

- 教育の質の保証
- 国際化・多様化を通じた大学改革
- 世界トップレベルを目指す大学院教育の改革
- 国公立大学の連携による地方の大学教育の充実
- 時代や社会の要請にこたえる国立大学の更なる改革
- 競争的資金の拡充と効率的な配分
- 大学による自助努力を可能とするシステム改革
- 国立大学運営費交付金の改革

### 文部科学省の審議会答申

- 新時代の大学院教育 中央教育審議会(H17.9)
- 我が国の高等教育の将来像 中央教育審議会 (H17.1)
- 大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について 中央教育審議会 (H14.8)
- 新しい時代における教養教育の在り方について 中央教育審議会 (H14.2)
- グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について 大学審議会 (H12.11)
- 21世紀の大学像と今後の改革方針について 大学審議会 (H10.10)
- 高等教育の一層の改善について 大学審議会 (H9.12)

## 我が国の高等教育の将来像 中央教育審議会答申(H17.1)

### 12の提言(抜粋)

- ・教養教育や専門教育等の総合的な充実  
3年+3年等の課程の多様性
- ・大学院教育の実質化  
教育の課程の組織的展開の強化
- ・留学生交流の促進・充実

## 京都大学の教育 自由の学風 自学自習

### 理念

京都大学は、創立以来築いてきた**自由の学風**を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

### 教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として**自学自習**を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。  
京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

どのように、理念を京大の教育において具体化するか？  
どのように社会へ京大の教育を説明するか？

## 今年のテーマと分科会

テーマ 京都大学における教育の将来像を問う  
第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の  
現状と課題を考察する

1. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題  
文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る
2. 自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題  
理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る
3. 学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る
4. 京都大学における英語教育の現状と課題  
グローバル化社会における英語教育のあり方を探る
5. 学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題  
世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る

### キーワード

次期中期目標計画、法人評価  
教育資源、教員評価、教育課程、定員問題、組織、理念、データベース  
国際化、外国語教育、留学生

## 6. 分科会報告

### (1) 各分科会報告

北村 昨日は、さぞ血を見る議論をしていただいたことと存じますので、早速ですけれども、その分科会の報告をさせていただきたいと思います。第1分科会から順番に約10分ずつでご報告させていただきたいと思います。

それでは、第1分科会の西村理事のほうから報告をいただきます。

#### 【第1分科会報告】

西村（理事） 第1分科会の報告を申し上げます。赤のところが私たちの重点でございます。私のほうから、最初の基調であったことを若干繰り返して、外部から、シラバス、あるいは成績評価の厳格化、大学の充足率といったものが問われているという話と、そしてもう1つ、資料を1枚配りまして、学生気質の変化という問題が生じているという話をしました。この内容は、キーワードで言うと、「知的な渇き」欠乏症というのがあるんじゃないか。あるいは学生が劣化しているというのがあるんじゃないかという報告に基づいて、こういうことがあるかどうかという問題提起をさせていただきました。



それから自学自習といっても、学部教育と大学院教育に分けて議論をする必要がある。当然学部に関してはほとんどそういう問題があることはよくご存じと思いますが、併せて文科系に関しては、すでに専門職大学院がいくつかできまして、それに加えて教育系に関しても間もなくできようとしている。そういうことで、先生のほうにも、いわゆる自学自習ということに対する考え方が、特に法科大学院に関しては、いろんな外圧がありますから、そういう動向のもとで、自学自習ということに対する考え方も変化があるのではないかと、教え方にも変化があるのではないかと問題提起をさせていただきました。

さらに具体的には、学生の受講科目数が多すぎて自学自習ということがなかなかできないような状況で、単位の実質化の必要性があるのではないかと。以上の問題提起をさせていただきました。

それに対して、全般的な議論としては、学習意欲の低下というのは、そんなに切実にはとらえておられない先生方が多かったように思います。一方、大学院においてさえ、例えば博士課程の学生でさえ、自学自習ができなくなっているのではないかと問題提起もありましたが、一方では、そういうことは視野の外に置くべきであるという議論もありました。

ただし、今回、一番中心的な議論となったのは、自学自習の意味でございます。これは学問の性格によって相当異なる。先に提起した法科大学院、あるいは法学部に関しては、単位のキャップ制を採用するな

ど、自学自習を妨げることがあるのではないかという問題提起をしたんですが、それはやっぱり根本的に違っている。むしろキャップ制等々を行うことによって、少ない科目を取って、その少ない科目に関して、本来、法律の勉強というのは講義で学ぶことだけではほとんど理解できず、それを自宅に持ち帰って、あるいは友達同士相互学習をすることによって、それを補うということが基本的なものであるから、そういう意味で、自学自習というのは、一貫して従来から貫徹されているというお考えがございました。

他方、文学研究科に関しても、全体的には自学自習の、特に京大生の自学自習および学習意欲の高さに対する高い評価というのは、むしろ皆さんから披瀝していただきまして、動機づけ、学び方の提示をうまくすれば自学自習はうまくいく。

今、ちょっと拝見したら、化研の准教授の平竹先生の文章がありますが、この内容と私たちの議論も大変似ているような印象を持ちました。自学自習のためには、当然まったくの放任ではなくて、いろいろ工夫が必要であろう。

1つは、例えば評価をどうするかということに関して、自学自習を評価するような仕組みも考える必要がある。昔のような完全放任ではだめということです。社会科学系に関しては、例えば世界で起きている事象に驚嘆する能力をいかに高めるか。

あるいは西洋文学に関しては、最近、学生がマニュアル化しているという批判があるけれども、むしろマニュアルと戯れる能力を持っている。西洋文学読書案内というのを配ったら、それを非常に上手に利用しているといったことがありまして、全体的に高い評価であったわけですが、学生を当然ひとくくりに見てはいけない。一生懸命勉強する上部の学生は昔から変わっていないし、自学自習の意欲は低下していないけれども、ボトムラインが低下している。特に中間層対策が必要である。その中でも、特に何をやっていいかわからないという学生が増えている。こういう問題に対してどう対応するかということが話題になりました。

最後にポケット・ゼミでございますが、これに関してはかなり高い評価をされる方と、他方で、まだ、ここで十分な意欲を高めることに成功していないのではないかというご意見もございました。

他方、分科会に出た皆さんの共通の認識では、博士課程の定員が相当増えたこともあって、ドクターの就職の困難さが非常に深刻化している。この問題をどう考えるかということが非常に大事ではないかということがございました。

ただ、以上の議論に対して私の個人的な印象を申し上げますと、理科系における自学自習意欲の低下に関する問題意識と、文科系では若干違いがあると思います。非常に牧歌的な雰囲気のもとで、皆さん「うちではみんな、ちゃんとやってますよ」というご意見が非常に多かったので、私個人としてはほんとかなどという印象がありまして、特に評価の問題、国際化の問題、予算減の問題、定員削減といった問題の外圧に

対する感覚は、おそらく理科系と比べて、悪い言い方をすると鈍い、しかし、いい言い方をすると打たれ強いという印象を持ちました。

先ほど磯先生とお話をしたんですが、大体文科系というのは、こういうところに集まるとみんな羊みたいなもので、しかも、群れない羊で、勝手にみんな、あっち行ったりこっち行ったりしている。そこに私は犬のシェパードのつもりで行って、相当刺激的なことを申し上げたつもりですが、どうも犬ではだめで、狼が入ってこないとなかなか事態は変わらないという印象を持ちました。(笑)

以上が司会の私の報告でございますが、一緒に司会をしていただきました辻本先生に補足をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

**辻本（教育学研究科）** たった今まで、このシナリオはなくて、全部西村先生にご報告いただくことになっていて、あわてております。おおむね上手に西村先生にご報告いただいております。少々繰り返しが含まれますけれども、若干だけ付け足します。つまり文科系の先生方は、現状の自学自習が減退しているということに対する危機感はそんなに大きくなかったということです。

というか、今の学生たちの学習能力は高い。知的能力は高い。意欲もある。問題は、何をすればいいのか、そしてどうすればいいのかのところ、実はわからない学生が多い。そこに手を打てばうまくいくんだよというのが、おおむね全体から伝わってきたメッセージでした。何をすればいいのかというのは、自学自習というのは、本当は問題を自分で見つけてほしいわけですが、それを期待しているんですが、放っておいたらそれは無理なので、そこに教育的な手立てをうまくほどこす。

それからもう1つは、調べるための具体的な本の選び方とか、あるいはこの事実をどう調べるかという、学習のツールとかやり方などの方法論をしっかり教えれば、あとは比較的うまくいくんだというニュアンスが強かったわけでありましたが、そこでの教育的な工夫をどうするのかというところでは、具体的には、例えば自主ゼミをもっと増やすための制度的なサポート、あるいは施設と財政のサポートが必要なんじゃないかとか、あるいはポケゼミをもっと広げて活用していけばいいのではないかとか、いろんな細かい具体的なアイデアは提示されております。例えば問題を見つけるために、複数の教員が現代の問題を拾い出して、いかに学問的に構成すればいいのかという講義も、自覚的に取り入れるほうがいいのではないかとか、それから学生たちを集めて雑誌を発行させて、そのやりとりの中で、意外と学生たちは自分のやりたいことに目覚めてくる。その目覚めさせることの手立てを我々はもっとやらなきゃいけないというところでは、かなり共有されたものがあつたと思います。

他方で、そういう仕掛けをしないのが自学自習なんだから、教員は一切そういうことはやるべからず。木の下でやろうと思えばできるわけだから、放っとけばよろしい、という昔ながらのご意見も、一方では強く出ていました。これも文科系の特徴でございます。

そういう議論を聞きながら、理科系の理事の方から非常に大きな声で手が挙がりまして、君たちは「中間層」をどうするかを考えてないのか、トップアップしか考えてないじゃないか、放っておいてもそういう連中はできる、放っておいても彼らはきっちりトップレベルを維持できる。教育はそうじゃなくて、むしろ中間層の多くの部分の意識の変化というものに目を向けなきゃだめだ。そこを議論することがこの分科会の本来の目的ではないかという、危機の思いに満ちた発言がございまして、一瞬ハッとしたような部分もないわけではありません。しかし、そこが文科系のまた文科系たところで、ああ、それはそうだろうな、というところで、「まあ、頑張っってね」という雰囲気が一瞬支配したように、私個人は感じた次第ではありますが。

しかし、やはり今時のご時世、外圧の中で、文科系の教員たちは、ほとんど自分が放ったらかされて、そしてトップレベルを維持して、何年かかかって卒業しながらも、ちゃんと京大の教員になっているという原体験。そういう原体験に規定されて、学生指導にもどうしてもそうした意識が出てくるところがございまして。そこをどう超えて、外に向かって、京都大学の自学自習の中身はこういうことをやっているんだということを戦略的にどういうふうに見せることができるか。確かに外からの目を意識したときには、今までのような雰囲気だけではだめだろうという気持ちもあったように思っています。

非常にまとまりませんが、そんな印象を持ちました。以上です。

**北村** ありがとうございます。これから養成した理科系の狼を送り込みたいと思います。(笑)

では、第2分科会の理科系のほうに移りたいと思います。理科系のほうは大きいので、2つに割っておきます。2-1の分科会の磯先生のほうから報告をしていただきたいと思います。

## 【第2-1分科会報告】

**磯（情報学研究科）** 2-1のとりまとめをさせていただきました情報学研究科の磯でございます。私は羊みたいなものですから、ここでメエメエと鳴くだけですけれども。

まず、第1分科会のご報告を伺いまして、同じ問題意識だなと思うところと、まったく違うなというところがございまして。まず、先ほど辻本先生が、文系の分科会の中では、学習能力も高く、知的水準も高く、意欲も高く、何も変わっていないということが支配的であったということについては、学習意欲もないし、知的水準も低いし、意欲もない学生をどうするのかというところから、理系は始まっているというところで、現状認識についての危機感がかなり違う。

例えば学問というのは寿命がいろいろございまして、文系の中には非常に息の長い学問があると思うのですが、理系の中でも基礎的な分野で息の長い学問もありますが、プロジェクト的な研究が重要で





あって、非常に短い中で競争していかなければいけないという分野もありますので、そのあたりは学問分野の考え方や教育の仕方の違いということが、文系、理系ではあるのではないかと、今も伺いながら、このお話をさせていただくわけです。

分科会の冒頭では、自学自習は何のためかということを考えながら検討していきました。そうすると、自学自習というのは、単に大学の目標としてあるのか、それも精神を述べているのか、何か具体的なシステムのことをいっているのか、そのようなことがそれぞれの先生方のご発表の中からいろいろな形で出されております。

自学自習ということが京都大学の重要な教育理念の中に含まれている。それは踏襲していくべきことであるということについては、学部を超えて先生方のご理解があるわけですがけれども、問題は、現在の学生は学習能力についても問題があると、理系の先生は思っておられますし、知的水準についても問題があると思っておりますし、学習意欲についても問題があると思っている。それは先ほど辻本先生がおっしゃったことと真反対の状況の中で、自学自習をどう考えていくのかということ、それぞれの先生方が教育の現場で感じられていることを述べられますと、そもそも、今や学部の学生について自学自習ということ、全面的に考えていいのだろうか。別の先生のコメントをすれば、自学自習で伸びる人もいますが、現に自学自習ということで壊れていく人がいるんじゃないかと。今や学生は多重構造になっているので、自学自習で伸びる人は伸ばしたらいいけれども、自学自習ということを出すために壊れていく人をどうケアしていくのか、そういうことも考える必要があるんじゃないか。

本来、自学自習というのは成熟した人に対してあるものであって、現在の学生の全員がそのレベルに達しているのか。実はこの話の背景には、自学自習は本学の基本理念であるということの源泉はどこでしょうかということ、僭越ながら私が少し印象を述べたんですけれども、本学の自学自習の源泉というのは、京都帝国大学の第1回の宣誓式にある総長の自重自敬というところから端を発しているんだろうと。そのときには京都帝国大学に入ってくる学生さんはマチュアだということ、あるいは教員の方は学者としてマチュアだということが前提になって、自重自敬という言葉があり、それが現在の自由の学風であったり、自学自習であったりという形で受け継がれているのであれば、その当時の帝国大学の学生に要求されていたようなマチュリティーを今の学生が持っているのかどうかということは、考える必要があるんじゃないか。

自学自習というのは、本当の意味では自らが気づいて学習していくことだけれども、現実のことを考えれば、自学自習の訓練というんですか、自学自習へ導いていくということも必要なんではないか。つまりひと昔前であれば、京都大学は自学自習ということが教育の根幹ですよということだけで、あとは皆さん考えてくださいで済んだわけですがけれども、現在もそれで済む学生がいるのは事実ですが、いくらかの学

生については、自学自習とはどういうものか、自学自習を訓練するというような導きの中に、本来、訓練をしたり導いたりするものが自学自習かということになりますけれども、やはり導入部分ではそのようなケアも必要なんじゃないかと。そうすることによって自学自習を体現していく学生がいれば、それはそれでいいんじゃないかと。そういうふうを考える必要があるのではないかとということが、多く、いろいろな形で述べられました。

それは別の言葉で言えば、自学自習に対する個人差があると。個人差があって、その個人差を尊重しながら、また、自学自習についての多重構造があるということをしちんと認識して、多重構造であるということはどうケアしていくか、これが教育でしょうというような意見であったと思います。

さらに自学自習を阻害する要因としては、単位が取れすぎているんじゃないか。先ほどの法学研究科のキャップ制がうまく働いているということと同じことなんですけれども、1回生、2回生段階で容易に単位が取れすぎていると。容易に単位が取れすぎているために、自学自習をするチャンスがかえって失われている。

ここにおられる先生方で、京大出身の方であれば、私もそうなんですけれども、容易に単位が取れるから、単位は単位で取って、そして自分で勉強しようということで、そこで自学自習があったわけですけれども、今の学生は、単位がさっと取れてしまうと、あとどうしたらいいのか。つまり自学自習に気づきがないままに先に単位が取れてしまいますから、残った時間の使いようがないというようなことになっているのではないかとということで、いわゆる単位についての取れやすさが、自学自習を阻害しているんじゃないかというようなご意見もありました。

とにかく昔であったら、自学自習ということである段階で気づきがある。ひと昔前であれば教養部プラス専門ということで、3回生になったときにあらためて巻き直して気づきというのがあったわけですけれども、そういうことがないままになっていることを、どのように教育のシステムの中で考えていくべきかということがありまして、最終的には施策としては、まずは自学自習を気づかせる教育のシステムとして、少人数教育の充実ということが1つは考えられると。

ただし、この少人数教育の充実というのは、決してポケット・ゼミを充実しろという意味ではありません。ポケット・ゼミについてはいろいろな意見があるので、これについては別途考えるとして、少人数教育を充実させる必要があるんじゃないか。

それから成績評価を厳格にして、それによって留年制、つまり自動的に上へ上げていくシステムではなくて留年をさせる。ここは私も強く言ったことですが、留年を繰り返すことによって退学をさせる。退学をさせるというのは、決して懲罰的な意味で退学をさせるというのではなくて、本人が京都大学へ入ったというだけで出られないような状態であるよりは、抜本的な進路変更を促すということも教育の1つでは

ないかということで、単位とか成績評価の厳格化と留年・退学制ということも考える必要があるんじゃないか。

あるいは自学自習はトップの学生については、まだ十分機能しているというのであれば、思い切って学生定員をシュリンクさせて、昔ながらの水準というのを、教育方法は変えないで、学生の数を減らすということは、考えられないのかということもございます。

あるいは、現在議論になっています、いわゆる3・3制。この3・3制というのがどういうものかということがよくわかりませんので、申し上げにくいわけですが、ざっと説明しますと、いわゆる学部3年プラス大学院3年、修士課程3年という形ですけれども、その統一的な理解がまだありませんけれども、悪いふうに考えますと、ひと昔前、2年でやっていた教養教育を3年でやりなさい。そして卒業させてしまって、専門教育と修士課程教育を3年でやりなさいという話になっているのか、あるいは現在のものを期間短縮で早期修了させて、4年のものを3年で修了させて大学院に進学させなさいというのか、システムによって意見がまったく違うわけですけれども、現に教育再生会議の中ではそういうことが提言されていますから、そういうことも視野に入れながら考える必要があるんじゃないか。

あるいは、制度というのは触れば必ず悪くなるから、むしろ現在の制度を踏襲しながら、TAを充実させる等のことで、自学自習を助けていくということも考えられないのかということで、施策のレベルではいろいろなご提言がありましたが、あえてどれかをまとめるということではございませんでしたので、このような議論がありましたということのご報告とさせていただきたいと思います。

重要なことは、仕組みには多様性があるので、その多様性を理解しましょう。つまりこれでなければいけない、こうでなければいけないということではなくて、次期中期目標・中期計画の施策を考えるときには、仕組みも多様であるということを理解しながら、今後考えていくのが重要ではないかということ、最終的には部会に出られていた松重先生にコメントしていただいて、それまでの議論はいろいろ発散して、あっち行き、こっち行きしたんですが、さすがに理事の先生が最終的に重要なことをおっしゃっていただいて、私からすると非常に終わりやすかったというか、(笑)収束しないまま終わったらどうしようかと思ったんですが、まとめていただいたので大変ありがたかったです。

大体このような議論で理系の2-1の分科会が行われました。ご報告申し上げます。

**北村** ありがとうございます。それでは、続きまして同じように2-2の分科会のご報告を、田中先生からさせていただきます。

## 【第2-2分科会報告】

田中（工学研究科） 今、磯先生が、理科系のその1の報告をされたわけですが、私どもの分科会では磯先生みたいに理路整然というわけにはとてもいきませんで、どちらかと言うと発散ぎみであったといえますか、よく言えば多様性があり、悪く言えばばらばらのご意見があったという印象でした。それをまとめるのは少し苦労しました。伏木先生には非常に上手に司会をしていただいたのを、私ができるだけまとめるという格好でやらせていただきました。



早速ですが、最初の問題提起は、昨日から出ていますように、外的圧力と内部崩壊のちょうどはざまで、自学自習が危機に瀕しているという位置づけです。この外的圧力と内部崩壊について、プラス自学自習について前半と後半の討論会で掘り下げてみながら、問題点を共有するという格好で進めました。

まず、内部崩壊についてのエスティメーションなんですけど、最初に文科系のご報告がありましたように、我々の分科会では、オプティミスティックなムードが結構強かったと思います。順番にいきますと、まず、学生の子供化というか、我々の世代から見ての子供化というのは確かに存在する。抽象的なものとか内省的なもの、それから答えのないものについての議論が非常に苦手になっている。そういう意味ではちょっと東大化してるようなところがある。言葉は悪いですが（笑）。あんまり京大の学生っぽくないような連中が入ってきて、ちょっと大学を間違えているんじゃないかというところがあります。

それからポケット・ゼミですね。さっき磯先生はポケット・ゼミと少人数教育を截然と分けられましたけれども、我々の表現としましては、特には分けません。それで、ポケット・ゼミというのは人気がある。これはいいことだという位置づけであります。1回生というのは、何も知らないのが、ちょうどプラスに効いて、目を輝かせてくれる部分がある。これは事実であります。

それからアーリーエクスポージャー。これはちょっと専門的な用語かもしれませんが、専門的なものを最初から、つまり1回生のあたりからちらちらかいま見させるやり方ですね。医学部で言うならば、目の前に死体をドンと置いて、これをあんたら扱っていくんだよということを、見せてやるのがアーリーエクスポージャーの原点だと思います。そういうことをやると、理工農薬などいろいろな学部の学生も結構喜ぶということがあります。

それから高校時代から、受け身教育にやっぱり慣れている。それに対してうまく立ち振る舞いができる学生が結構入ってきていて、そのまま持続して大学でその精神構造が残ってしまっている、というところあたりまでの解析がなされました。

次に先生の側からも反省がいろいろありまして、先生の側の話し方が通じていないのと違うか。教員と

か社会というシステムがむしろ壊れてきているんじゃないか。これはずいぶんとつましいご意見ですが、ひょっとしたら自分たちのほうが悪いんじゃないかというご意見までありました。

6番は、いわゆるトップクラスの学生は、必ずある一定の比率でおります。それはいいとしても、平均的の学生、あるいは平均以下の学生との格差をどうするか。どこかの政治の話みたいですが、格差が拡大している。そのいずれに焦点を当てて教育していくかというのは、どうしても教員側としては困惑があります。例えば京大全学として、どういうスタンスを持っていいのか、ある程度ガイドラインを教えてほしいというご意見もあったほどです。

7、8、9に行くと、だんだんオプティミスティックなご意見が出てきまして、それでも京大はましであると。ほかの大学から見たらずいぶんうらやましがられることが多いということもあるそうです。

最近は大学のカリキュラムはずいぶん過密化しています。そういう意味で我々が大学に入ったころのカリキュラムとは簡単に比べられないほどです。確かに知識としてたくさん知らなければならないことがあり、内容も深くなってきているということがあります。このことをあんまり無視するわけにはいかない。それがまた問題を大きくしているのではないかというご指摘もありました。

それやらこれやら言うてるけども、例えば理科系は4回生が研究室に配属されたりしますけれども、そういうふうになるとかなりやる気が出てくるというご意見が結構多かったです。ですので、そういう意味でオプティミスティックにこのエスティメーションというのはつながっていくんだろうという感じがいたしました。

じゃ、完全に学生が壊れているかということなんですが、結局、いや、そうでもないということでした。(笑) 非常におもしろいことに、京大の先生らしいと思うのは、こっちも壊れてるんちゃうかということに常に気にされるんですね。いいことではあるんだと思いますが。少なくとも壊れた、あるいは壊れていると見えるような学生の直し方について、もうちょっとスキルアップする必要があるんじゃないか。そういう対処法の問題ということも指摘されましたし、もっとオプティミスティックなのは、崩壊することはむしろよいことだと。創生の始まりではないかというご意見もありました。

ということで、完全に壊れてるわけではないよと、私が勝手にまとめて怒られるかもしれませんが、そういうご意見がメインのように感じました。

一方、外的圧力をどう考えるかという問題です。外的圧力は、昨日からお話がありますように、学校化、単位の実質化、成績評価の厳格化ということと、自学自習の勧めというのはどうもスジが違うんじゃないかなど。本来、自学自習が持っている意味と、この学校化云々ということはちょっと違うんで、複線で考える必要があるということが言われました。

ただ、学校化云々については、最低限の教育を受けてもわからないような、いわゆる落ちこぼれること

を回避する必要は当然あります。それから受け身のお客さん学生を脱皮させる必要もあります。けどもお勉強だけをさせるのはどうも虚しい。それだけではよくないので、京大式の論理というのか、教育に対する論理構築をちゃんとしましょうよという話も出ておりました。

ちなみに単位の実質化というのは、よくご存じと思いますが、一応復習しますと、大学設置基準では1単位45時間の学習が必要ということになっております。京大では1週1コマ90分を2時間、つまり120分と見なして、半期13週の26時間で2単位与えている。つまり与え過ぎているわけですね。大学設置基準を、四角四面にとると与え過ぎている。じゃ、時間不足をどうするかと言うと、相当時間数の予習と復習をなさいよということでやっているわけです。実際学生がやっているかどうかは別として、それをやっていると見なします。そういうことからキャップ制という履修制限の話も出てくるということ、共通認識として知っておく必要があるということです。

まずは、落ちこぼれを防止する必要がありますが、それに対する結構詳しい方法論が討論されました。例えば学生に対する初期、ちょうど入学した直後ぐらいからこまやかなガイダンスをする必要がある。それから予習、復習が必要だということを教えてやらなければいけない。昔だったら、ほっといても適当に予習、復習したかもしれないし、あるいは全然しなかったかも知れませんが、最近の子供さんというか学生諸君には、やっぱり言ってやらなければダメということがある。もっと言えば将来設計も提示してやる必要がある。これは教員がやるのか院生がやるのか、それはいろいろ方法はあります。1も2もこまやかということに関連しますが、そういうことをやってやらなければならないのではないかということでした。

予備校の先生のほうが、大学の先生よりも尊敬できるという学生が結構多いので、パッションを持っておられる先生を増やすとか、教員のパッションを上げるということも必要ではないか。このへんは落ちこぼれ防止に対する対処法ですね。あとKULASISを充実しましょうとか、シラバスを充実しましょうとかいうこと。それからものすごく踏み込んだご意見としては、場合によってティーチングの専用教員を確保する。それで第1番目の関門をクリアする。このように手当てしてやると、今の京大生でもかなり応答できる。医学部とか薬学部のように国家試験を伴う学部からは、上級生になるとちゃんとやれてくるということで、以上のような対応でかなりいけるはずだというご意見が大勢を占めました。これは楽観的にすぎるのかもしれませんが、現場の先生方というのは、非常にきつい危機感を持っておられるわけではないということがわかりました。

今度は自学自習への方策です。これは異次元とか別次元の問題で、座標軸も違うのではないかと思います。先ほどまで申し上げたようなことで、まず外圧をかわす。学校化ということもある程度満たす。そういうふうになりながら、しかも、落ちこぼれを救いながら、同時に自学自習を進めてやると

いうやり方をする。

自学自習はやりにくいというか、それが遠くなっているような社会的風潮があります。例えば高校などで理科系の知的好奇心を萌芽するような仕掛けが昔の教科書には結構あって、今はもちろん総合理科とかいろいろあるわけですが、どうも本当の意味の萌芽の仕掛けというものが脱落してきているのではないかと。それを京大としては、高校に対しても、そういうことも含めてきめこまかいメッセージを発信する、あるいは発信し続ける必要があります。

それから初学年のアーリーエクスポージャーからのモチベーションを持続させるようなことも必要であろうということです。

結局、京大の卒業生には結構人気があるというのは、彼らは役に立たないこととか、余計なことができる。そういうことができるから人気があるということ、もう1回よくかみしめる必要がある。学生の中のトップの連中はそれができるわけですね。できるわけですから、それはそれでいいということになります。先ほど磯先生のおっしゃったこととよく似てくるんですが、平均的とか平均以下の学生に対して、これをどう進めるかというのが、本質的な問題になってくる。

ここまで結構時間を食ってしまいましたので、深い議論はできなかったのですが、昔だったら平均とか平均以下の学生に対して、結構おおらかに見てやる風潮があったわけです。今、それをやっていると、なかなか自学自習まではいかない可能性があるんで、ここをどうするかという方策を考えてやる。それについては西本先生が指摘されたのですが、現在ではおおらかに見ているだけでいいのかということですね。

それから当初の課題としては、大学院教育まで論じなさいということでした。申し訳ないですが、そこまで議論を深めきれませんでした。一応、学部教育との対応とか連続性とか、それから大学院教育としてはまたちょっと違う全学的なユニバーサル化を図ったらどうかなどというご意見はちらちら出ましたが、まとめきるころまではいかなかったんで、この程度にいたします。

最後のまとめとしまして、我々の希望も含めて、外圧の中でも京大というのはやれているんだということ、を何とか示したいし、示すべきである。また、それは可能であろうという結論でした。資源的にも学生の能力的にも何とかそのようにしていけるのではないかと。学校化と同時に放任をしながら育てようではないかと。もちろん放任というのは手抜きということとは違います。放任というのはなかなかむずかしく、適度に見てやりながら放任するということを必要としますので、相当の工夫や仕掛けは必要であるという認識のうえです。

以上が種々多様性のあったご意見を私が独断と偏見でまとめたものですので、あるいはお叱りを受けるかもしれませんが、大体以上のようなこととさせていただきます。どうもありがとうございました。

北村 ありがとうございます。時間の関係もありますので、引き続きまして、第3分科会のご報告をお願いしたいと思います。川井先生から報告をお願いいたします。

### 【第3分科会報告】

川井（生存圏研究所） 化学研究所の宗林先生とともに本分科会の司会をさせていただき、ここにまとめさせていただいております。

第3分科会は、「学部教育における研究所・センターが果たすべき役割」ということで、第1分科会と第2分科会とはだいぶ性質が異なり、研究所・センター群の教員が集まって議論をさせていただきました。

そのようなことですので、参加者は13研究所、13センターに及ぶ非常に多様な、それぞれの部局の事情を持った先生方が集まって、その上にこの全学教育シンポジウム、私も実は昨年が続いて2回目ですけれども、ほとんどの方が初めての参加ということでした。そこで、丸山先生のオリエンテーションにもございましたように、ものを決める場というのではなく、情報を共有して、そして将来の京大の教育を考えていく場にしたいということで、話を進めさせていただきました。

はじめの討論では、昨年の第1分科会、研究所・センターの教育のかかわり方、教育は権利か義務かといった議論の概要について私のほうから簡単に説明させていただきました。最終的な結論は、全学の教員がそれぞれの組織のミッションを配慮しながら、全学の共通教育の負担をできるだけ公平に分担していきましょうといったコンセンサスが得られたというご報告をさせていただきました。さらに、研究所・センターを取り巻く周辺状況というのは、文科省の学術審議会の議論、中期目標・計画への記載の有無、さらには教育再生会議など、さまざまな形で外圧として風が吹いておりますし、内部のほうからは、教育への貢献をどのようにしていくのかといった問題、あるいは標準教員と特定教員の関係、雇用調整、効率化係数といったような問題について認識を深める議論をさせていただきました。

その上で、多くの方が初めての参加でしたので、情報を共有するために、研究所・センターの教員が、学部、専門教育を中心にして携わる際に持っている現状の課題と問題点について、全参加者からできるだけ多くの現状報告と問題提起をしていただきました。

その内容ですが、研究所・センターの先生方は、協力講座として大学院教育の一翼を担っているということになっていますが、しかし、極端な場合には協力講座として認められていない場合もあります。

学部教育については、部局によって大きな差があって、まったく参加していない、あるいはさせてもらえないということもありますし、講義のみを1コマ、あるいは2コマ担当している、後の2つが大半です





が、中には講義を5つも、7つも持っているといった先生方もおられますし、講義、実験、演習、さらには4回生の課題研究まで含めて、基幹講座とまったく同等に扱われている場合もあり、非常に多様な状況がありました。研究所・センターと協調的な関係にある学部・研究科もありますが、全般的に言えば、学部教育への参画は認められていない、または非常に制約を受けているというのが現状ではないかという認識をいたしました。

研究科における附置研というのは、研究所としての組織として研究科に対応してはるわけではなくて、個別の先生、個対組織という形で協力講座が取り扱われているために、大学院教育に関しても、どうしても教育の手助けをする立場という位置づけられ方をしていますし、結果的に教育方針、教育カリキュラム編成に加わることは、今のところほとんどないんじゃないかと思います。学生定員の配分にも差があります。できればイコールパートナーとして参加させていただければと思っております。極端な話、学部学生の希望があれば、課題研究を受け入れられる措置があれば、大変いいんじゃないかという提案もありました。

夕食後の討論では、これまでの先生方からのご意見を取りまとめて、現状の問題点を整理し、課題を抽出させていただき、次期中期目標・計画に研究所・センターの教員の教育への寄与について記載いただけるもの、具体的な提案について多くの時間を費やしました。

昨日のオリエンテーションでは、大学と研究科のミッションの違いがあればどのようにするのか、検証も含めて考えるべきだという議論もございましたが、我々の場合には、大学、研究科、そして研究所のミッションをどのように整合させるかといったような問題があるかと思えます。

ここで私も必ずしも認識が十分じゃなかったんですが、研究所・センター群の中には、学内措置の中で研究教育以外の多様な業務を抱えているセンター群もあります。それらは、例えば、フィールド、場を提供するようなセンター、カウンセリングのセンター、寒剤供給、情報インフラの整備、産学連携、社会連携などが1つのセンターの大きなミッションになっていて、実習教育を主催し、データベースを作成し、インフラを整備し、維持管理している。このようなセンター群については、これらの業務はいわゆる教育研究のインフラですので、その下支えになっている貢献をきちんと評価してほしい。また、逆に言うと、中期目標・計画についてこのような貢献についても評価されるように記載の工夫が欲しいといった要望がありました。

学部教育に関連して、多くの研究所のミッションは、研究を中心に、そして研究を通じて教育をしているというスタンスで、研究が主になっている場合が多い。その中で学部教育へ積極的にかかわるという考え方の部局もありますし、また少数意見ではありますが、学部教育には消極的な部局もないわけではありません。この場合は、国際的、先端的な研究をしている、またポスドク、あるいは博士課程の学生の研

究、教育、あるいは人材養成に重点を置きたいという主張です。共同利用において、学内だけではなくて学外の学生にも教育をして貢献しているという意見がありました。しかしながら、全般としては大学の研究所・センターとして、教育への責任についての共通認識はあったと思っております。

それから自学自習をサポートする教育を学部と協力してやっていきましょう、大学院生の獲得とかいった損得勘定を別にして、学生本位で、学生の立場に立って、多様な学生のニーズにこたえるような研究所・センターの独自の人材を生かした教育というものがあるのではないかとということで、化学研究所の平竹先生から第3分科会の資料として提示いただいた資料は、第1分科会、第2分科会とも大変関係がある、手間はかかるけれども、自学自習は京大の看板で、これを捨ててはいけません。「みんなで一緒になってやっていきましょう」といった大変積極的な意見を伺いましたので、この資料を総合討論の場の資料として、今回、提示させていただきました。

そのほか、研究所・センターが学部・研究科教育に参画するために必要な学内協力について、いくつか要請したいことが話題になりました。教育負担を公平化してほしい。全体としては、研究所・センターの学部教育への参画の量、質というのは大変小さいものだと思いますが、大変多様で、個人ベースで大きな違いがある。ある一定の特定の教員が大きな負担をしている、あるいは負担が集中しているということの是正。そのためには、どの程度のレベルでみんなが負担しているのかがわかるようなデータベースをつかってほしい。大学院の協力講座として、少なくとも教育に参画できるような保証をしてほしい。細かいこととなりますが、教育研究基盤経費の速やかな移算、大学院の学生経費が、研究所に来るのは大体年が明けてから1月になり、大学院の学生のほとんどが修士論文の課題研究等が終わってからお金が回ってくるという状況を何とか是正してほしい。それから組織として、教育への関与が正当に評価される中期目標の記載をお願いしたいという要望が出ております。

大学院の重点化後の教育組織としての附置研の位置づけですが、これはもう10年以上前に京都大学の将来構想委員会が、「21世紀における京都大学のあり方について」ということで議論をしています。そこでは、大学院の重点化、学部教育の改革、それから研究所・センターの位置づけを重要な課題として示しております。

その中で研究所・センターの位置づけについては、「特定の研究課題に対応する研究を使命としてきた研究所・センターが、学部の大学院重点化によって研究科への関与の方法が問われている」という問題提起がございますが、この具体的な対応については示されておられません。

また、学部の専門教育に関して、大学院基幹講座に所属する教員が兼担するとして、独立研究科の教員にも関連学部の学部教育が兼担できる制度が確立しているわけですが、協力講座として大学院教育を担当している研究所・センターの教員について、学部の専門教育に対する位置づけというのはまったく明記さ

れていません。

そんなことで、できればそれぞれの研究所の特性に応じて、教育組織としての研究所の役割、機能を規定して、明確に位置づけていただきたい。学部教育について、必要に応じて大学院教育も含め、総合的な観点から京大の教育理念を反映するような教育のあり方というものを、全学的なレベルで考えていくことが大変重要で、10年先の京大の教育の枠組みを考えるための全学的なワーキンググループといったようなものをつくっていただければ、大変ありがたいと思っております。

以上です。ありがとうございました。

北村 ありがとうございました。引き続きまして第4分科会の報告をお願いいたします。銚井先生からお願いいたします。

#### 【第4分科会報告】

銚井（工学研究科） 第4分科会の報告をさせていただきます。この分科会は、京都大学における英語教育の現状と課題ということで、「グローバル化社会における英語教育のあり方を探る」というタイトルのもとに議論いたしました。担当者は佐治先生で、29名の参加のもとに行いました。



昨日のオリエンテーションで丸山理事からありましたように、本分科会の課題であります英語教育が、全学教育シンポの最大の成果のうちの1つと高く持ち上げられました。ただし、全国的に高い評価を得ているが、学内では認知されていない。その意味でまずは学内の教官がそのへんの実情を知ることと、それをベースに学部・大学院教育とのつながりを考えてほしいという要請があったものに対応する検討会です。

まず、経緯と状況の説明ですけれども、佐治先生より目的、経緯、状況の説明がなされました。目的としましては、ほかの分科会と同様ですが、意見を集約するというのではなくて、現在の英語教育で何をどのように教えているのか、また、それを学部・大学院教育、研究といかに結びつけていくのかということについて、自由に討論をすることとされております。

今回の英語教育の改善の経緯ですけれども、10年ほど前に英語教育の問題が取り上げられました。そのとき、1つの典型的な問題として再履修者、その当時2,600名程度の再履修者がいて、非常に大人数のクラスで教育せざるをえないという状況がありました。それを含めて、本来英語教育はどうあるべきかという授業内容の改善、それから大人数教育への対応をどうしようかということが問題として挙げられました。

対応策の一つとして出されたのがCALLシステムと呼ばれるものですが、これは教材、モチベーション、

勉強時間、達成度との対応などいろいろな意味で努力されて、現状では 2,600名程度の再履修者が 1,200名程度まで減っているということです。それで、それを再履修者でない通常のクラスにも使ってはどうか、さらには初修外国語への適用が考えられ、これも実際に使われております。そういうところにまで現状では至っているということなどの実情を、10年前の問題点とその対応策ということで、水光先生から詳細な説明をいただきました。

主にはここに書いてある3つの点ですね。再履修者とクラスサイズが非常に大きいこと。それから資質と書いてありますが、どのような方が英語教育をすべきなのかという点。3つ目としては、これは大きな枠組み変革になっていて、ある意味ではドラスティックな変化を、この1、2年で始めているわけですが、カリキュラムの改革についての説明をいただきました。

まず1つ目の再履修者が非常に多いということと、クラスサイズがそれに伴って非常に大きくなったということですが、10年前は、80~100名を超えるようなクラスは結構あり、非常勤講師の数もそれに合わせて70名程度で、全体の7割程度を占める状況だったということです。

これに対する対応策として、自律型のCALLシステムを導入したということです。もともと場所、時間を定めて語学を教えるということ自身が、ある意味で不自然な面も持っています。それに対してCALLシステムというのは、CD-ROM教材を渡して、学生がいつでもどこでもできるため、一部の学生にとっては非常に適切な方法だということで始めているものです。

再履修者を8クラスに分けて、それをTAが補助する。同時に、単に学生に任せるだけではなくて、各学期で4回程度のかかなり詳細な試験をして試しているということです。その結果ですが、勉強時間と習熟度には強い相関があること、それから学生の非常に多くの割合がこれに満足しているということが報告されました。このシステムを導入する前の平成16年度には外国語への満足、不満足の内訳がほぼ3割ずつあった。これは東大もそうだと伺いましたが、それに比べると現在は学生自身はるかに満足できているということです。

このCALLシステムを導入したことによる効果ですが、1つ目は再履修者の減少、それからそれに伴う普通クラスのクラスサイズの減少ですね。したがって、比較的人数の少ない対面式のクラスがかなり可能になってきたということです。それも非常勤講師を増やせない状況で、少ない専任教員で対応できるようになってきたということです。

その結果がどうなのかと言うと、先ほども言いましたが、学生、教師ともに満足度が上がっている。これについてはいいことづくめの結果になっているということかと思います。

2つ目の問題点。英語を担当いただく教員はどのような資質を持った方なのか。それまでは文学をされている方が英語の講義をされていて、いわゆる英語教育を専門とする方はほとんどいなかったということ

です。英文学を担当される先生にとって、英語教育というのは本来の仕事ではなくて、雑用に近いものとしてとらえられる面があったのではないかと。それに対しては、英文学、英語言語学、英語教育学を、それぞれ専門にする先生方が適切な割合でミックスされて英語教育をするのがいいのではないだろうかということ、そのような方向に人事とかシステムそのものを変えていくということと、さらにもう少し進めて、日本における英語教育学の専門家が不足している状況から考えて、人間・環境学研究科に外国語教育論講座を創設したということです。

3つ目の問題。これが一番大きな変革になるわけですが、カリキュラムの改革になります。従来、カリキュラムというのは一応あったわけですが、実質的にはあつてなきがごとし、極論を言うとうそことだとおっしゃられた方もいます。例えば一般目的の英語と専門目的の英語と分けられてますが、この一般目的というのは、往々にして、無目的の英語になっていたというのが、大きな欠点だったかと思えます。それから、各講義の難易度、目的に統一性がない。また、京大の英語というのは、目的が定められていないということがあります。したがって、具体的に学生に示すシラバス等になると、文学部の授業と全学共通英語の違いがわからない。これも一つの比喻ですが、そんなシラバスが結構多かったという問題点があります。

ということから、どのように考えるべきかを、英語部会で水光先生、田地野先生をはじめとする先生方が検討されて、基本的には大学の英語というのは大学教育の基本理念を実現、具現するためのものであるべきである。学術研究を目指すというのが京大の理念の一つですから、学術研究に資する教育をすべきである。したがって、全学教育もそれに資するものでなければならないという論法で、結果的に言うと、学術研究に資する英語教育をするというのが本筋であろうというのが、今回のカリキュラム改革の骨子になるかと思えます。

そこから必然的に出てくる例としては、例えば英検のような、いわゆる学術研究に関係しないようなものは認めがたい。それから非常勤講師の採用においても、自分自身で研究をして、英語の論文を書いた経験のない人は、この講義には不適切であろうというような、ある種の規範のようなものが自動的に出てくるということになっているかと思えます。

その結果として、シラバスにどの程度反映されているかということ、現状で半数程度がそれにパスできるようなシラバスになっているんじゃないか。これは全国的に見ても大変優れたシラバスになっているであろうということです。

このカリキュラムそのものは平成18年度からの開始ですので、今後こういう理念に対応して実際にどうなっていくのかを見守っていく必要があるかと思えます。

以後はちょっとランダムになっておりますが、いただいた質問、意見等をざっと7、8ページぐらいに

書いてあります。代表的なもので言いますと、やはりきっちりとした文法ができるような指導がなされていないのではないだろうかという指摘ですね。これは学習指導要領の変化に伴うものとの説明がなされておりますが、そのへんのところをしっかりとしてほしいという要望です。この最初もそうですね。特定の専門的な英語というのは必ずしも必要でない。やはり基礎のところをきっちりやってほしいという希望があります。

もう1つは、学術目的の英語については多少疑問がある。簡単な専門英語だけではやはり寂しい。専門で教えない英語、英語圏の人々の気持ちがわかるような教育をしてほしいという、昔の英語教育の持っていたよさを残してほしいというものです。これについては、3つ目に書いてあります教養と技能を結びつけるところに今回のカリキュラム改善の意味があるんだ、決して教養を否定するものではなくて、包含するような形の講義を進めていくんだというのが回答としてあったかと思えます。

時間が押しておりますので、多少飛ばさせていただきます。もう1つは、例えば会話に関する話。これは無視しているわけではないと。各学生が必要に応じてやればいいし、また、一部リーディング、ライティングの中でも多少やっているけれども、基本としては学術研究のための英語ということで、リーディング、ライティングに重点を置いているとの回答であったかと思えます。

分科会Ⅱのほうでは、以上のようなことに対応して、学部ではどうなのか、学部からの要望、学部の専門英語をしている立場でどういう意見をお持ちなのかを伺いました。ただし、必ずしも学部の特化した話ではない、一般的な話がいろいろ提起されたかと思えます。

時間の関係で少し飛ばさせていただきます。最後のほうですが、教養教育と専門教育との間の情報交換がどの程度できているのか。その前に、まずは今回やったような英語教育の改善が学生にどのように伝わっているのだろうか。一応ガイダンス等で説明はされているんですが、必ずしも十分伝わってない。その意味では、専門側は入学した学生とある意味でつながりが強いですから、それを利用して、今回の英語教育の変化について適切に連絡する必要があるんじゃないかということです。

このように教養側に変革があったことを、専門に進んだ後にモチベーションをどのように保っていくのかという意味で、専門教育をする教員と教養教育をする教員との間の密接なコミュニケーションと忌憚のない意見交換が必要であろう。

これはまとめになりますが、今回の英語教育カリキュラムに関しては、まず1つ目の目的は、各学部の内容を十分知っていただくこと。2つ目としては、それを前提に各学部での専門英語について検討いただくこと。ファカルティー・ディベロップメントにも通じる面が出てくるかと思えます。それからできればそれをさらに発展させて、双方向の作用を期待したいということです。

1つの方策としては、これを教養教育だけでなく、さらに学部・大学院にも適用したらいいのではな

いか、1つの例としては、アメリカでもうすでにあるというライティングセンターの設置などが考えられるだろうということでした。

佐治先生、補足をお願いいただけますでしょうか。

**佐治（薬学研究科）** 銚井先生にうまくまとめていただきましたので、特にはないんですが。最後にみんなが考えていたことは、教養で大きく英語教育が変わりつつあります。それを実際に学部の先生方との間に十分情報が伝わっていない、あるいはお互いにそのことがわかっていない状況で、せっかく教養でやった英語を専門英語の基礎としてさらに積み重ねていくというプロセスがなかなかうまくできていない。その仕組みをつくっていくことも大事ではないかということが考えられます。

そこで、お互いに情報を交換する場を持つということを含めて、双方向の作用を期待していきたいということが、我々の考え方としてあってもいいのではないかという話であります。もちろんライティングセンターの設置のようなものもその1つかもしれませんが、ほかにもっと多くの情報の場を持つ機会を設けていただくことが大事かと。逆に専門のほうもそういう場も利用して、自分たちの教育をする能力、スキルを付随的に高めていく必要性はあるのではないかという話が、ずいぶんと出てきたように思います。

以上です。ほぼ同じような話ですが、これで終わらせていただきます。

**北村** ありがとうございます。少し時間も押していますので、第5分科会の報告のほうへ移りたいと思います。第5分科会は河合先生からの報告です。

### 【第5分科会報告】

**河合（国際交流センター）** 第5分科会では、学部教育における国際教育プログラムの現状と課題というタイトルで、主に多言語による京大式教育体制確立10カ年計画について、その実現に向けての検討が行われました。担当は横山先生と森先生です。



まず、趣旨説明が行われまして、次に7名の先生方からの話題提供がありました。それから夕食を挟んでの自由討論で、さまざまな意見が出されました。まず、趣旨説明のところ、学術の国際化が進む中で、分野を問わず多言語による国際教育が必要になってきているというお話がありました。例えば理学部、工学部、医学部、経済学部などにおいて、外国語による論文発表が必要なことは言うまでもありませんし、古典研究や歴史研究においても、さまざまな文化や言語を背景とする研究成果のせめぎ合いが必要であるということです。そしてまた、今は英語が主流ですけれども、1つの言語で事足りるということではありません。1つではなく多言語によってせ

めぎ合いをする。その中で文化に根ざした価値が創出されるということです。

このような背景で、多言語による京大式教育体制確立10カ年計画というものが出されました。これは今年の8月22日に開催されたAEARUの年次総会で尾池総長が提案されたものです。どういうものかと申しますと、2008年から2011年までの最初の3カ年で大学院諸専攻の多言語教育化を行い、多言語科目による学部教育プログラムを施行する、さらに向こう10年で多言語科目による学部教育プログラムを完全実施し、全教科の30%を英語で行い、10%を英語以外の外国語で行うことを目指すものです。特に一番最後の目標がはっきりしていると思うので繰り返しますが、全教科の30%を英語で、10%を英語以外の外国語でというプランです。

AEARUについてももう1度簡単に説明をしておきます。AEARUといますのは、中国、韓国、台湾、日本の4カ国の研究大学が連携して人材育成を図るという仕組みです。今、そのために各大学に強力なプログラムオフィサーの育成、配置が求められており、シラバスの調整やクレジットトランスファー、エクスチェンジプログラムの設立が目指されているということです。これに相当しますが、ヨーロッパのソクラテスプログラムです。

こういう動きが背景にございまして、これに対応するために、単に専門家を養成するだけではなくて、地球社会の構成員になるにふさわしい、東アジアの文化に根ざした知識人を育てることが目指されるわけです。

我々のディスカッションの論点に入っていきたいと思います。まず、3点からまとめさせていただきます。非常に多様なディスカッションがなされたので、まとめるのはむずかしいんですけども、まず、多言語教育化の意義についてです。次に、多言語教育化を支えるための具体的な現状の取り組み、つまりどのようなリソースがあるかということです。それらを踏まえまして第3点目として、具体的に今後何ができるか、すぐに始めたいこと、3年後を目指して仕込みたいこと、長期にわたって仕上げたいことについて議論しました。そのときに、京大の学内のキャンパスだけで完結しない包括的な体制を念頭に置いて進めることが強調されました。

まず、多言語教育化の意義について、さまざまなディスカッションがなされたんですけども、ハブ的存在としての京都大学の存在感を強めることができることのご指摘がありました。1つの国のことを学ぶためにその国に行くという発想はもちろんあるわけですけども、そうではなくその国以外の外国に行くことによって、相対化してその国をとらえることができることがあります。すなわち京都大学はアジア研究の層が厚いわけで、それを生かして京都大学でアジアのことを学ぶ。京都大学を拠点にして、そこで学んだ人たちが世界に巣立っていくということですね。これにより、京都大学から世界への一層の情報発信が可能になるわけです。



また、学ぶ対象となる言語と媒介となる言語ですが、学ぶ対象となる言語は、多ければ多いほどいいだろう。媒介としての言語は、今のところ主流は英語であり、もちろん英語で学んでいくことは、十分意義があると思われますが、理想は、媒介言語も多言語となることで、それによって、いっそう豊かな思考が可能となるという議論がなされました。

それにも関連するんですけども、母語と他（多）言語による重層的思考の促進も意義の一つとして挙げられました。私たちは母語で普段、自分の世界を感じているわけですが、それをほかの言語で体験し直すことにより、知識や考え方を深めていくことができるということです。このような体制を教育の早い段階からスタートして、系統立って教育を行う必要がある。発信能力のある人材育成を多言語教育化によって可能としていきたいということです。

また、多言語教育化というのは医療の面とも関係があります。文化的背景の異なる人々に対するサービスと、それを担う人材育成につながるのご指摘がありました。文化的背景が違うことで、医療へのアクセスがむずかしくなるケースがありますが、これは単に言語の問題ではなくて、ヘルスリテラシー、医療に関する概念自体が違うという問題があるわけです。このことは、単に医療だけの問題ではなくて、ほかの文化から来た人、すなわち留学生、外国人の受け入れの基本的問題とも言えます。ひいては自分以外の他者とコミュニケーションを取る能力の育成につながっていくと思います。

それから、一つの問題提起としてですが、10カ年計画は、AEARUという東アジアを中心とした取り組みの中から出てきた発想なんですけれども、多言語教育化を考える際には必ずしも東アジアに地域を限定する必要はないのではないかと。すでに世界を舞台にして京都大学は開かれているわけですし、それをどんどん発展させていくという発想のほうがいいのではないかとのご意見も出されました。

また、対象に応じた多言語教育化を進める上で、だれを対象とするか、あるいはどんな目的で教育するかをはっきり区別してやったほうがいいのではないかとのご意見も出されました。例えばKUINEP。後からKUINEPの話がいろいろ出てきますけれども、KUINEPは(1)日本人学生の教育、(2)外国人学生の教育、(3)教員のトレーニング、(4)学生の交流など、さまざまな人の教育をいっぺんにやろうとしているわけですね。一石四鳥をねらっているので、それは無理ではないかというご意見がありました。また、一方で、できれば一石二鳥ぐらいはいいのではないかとご意見も出されて、これらは結論というわけではなくて、今後もディスカッションを続けるべき問題と考えていただければと思います。

このように意義は多様であるわけですが、実際、多言語教育化の実現に向けて、今、どんなリソースがあるかということで話題となったのは、遠隔講義の蓄積、医学における多言語教育、そしてKUINEPです。

遠隔講義については、UCLAとの連携で1999年からTIDEと呼ばれる授業を行っています。また、清華大、マラヤ大、京大の三大学の連携による遠隔講義や、ハイブリッドe-learningもあります。特に熱心に行わ

れているのはキャンパス間の遠隔講義で、週30コマ。私は全然知らなかったんですけども、これだけたくさんの方が実際に実施中であるということです。国際的にも週4コマ程度実施中で、こういう蓄積を生かして、多言語教育化を進めるということも可能であるということです。

医学の面では外国人の患者さんへの対応練習やリスク管理などの取り組みがなされています。特にリスク管理につきましては、全学的にも対応が検討されているということです。

KUINEPについてですが、KUINEPといいますのは、Kyoto University International Education Program というものですが、1997年に実施されまして、今もずっと続いております。これは海外の協定校からの留学生を受け入れて、英語で授業する。それを京大生にも開放しています。年間40名以上、KUINEPの学生がやって来て、京大生の受講者は年間500名を超えています。現在の科目提供数は21科目です。

このKUINEPのもう1つの特徴は、協定校からの学生を受け入れることによって、京大生をその協定校に留学させることができることで、29名から39名程度の京大生がこれにより海外留学している点です。

このような蓄積があるわけですけども、これらを踏まえて今後どうしていけるかということです。今からでも始めたいこと、3年後を目指してやること、そして長期的計画です。

その前にもっと念頭に置くべき問題がたくさんあるというご指摘もありました。羅列してみます。KUINEPの講義の改善が大切であるということと、留学生が増えた場合に、その財政サポートを大学がどこまでできるか、どこまですべきかというような議論も必要かと思います。また、留学生の住居、健康問題への対応。それから果たして日本人学生の英語力、教員の英語力は大丈夫かというようなことも指摘されました。

これらも踏まえて、今からでも始めたいことは何かということです。ポイントとなりますのは、繰り返しになりますが、学内だけでやろうとしないことです。英語30%、10%を英語以外の言葉でということ、学内だけではないけれども、実現を目指していくわけです。

まず、今からでも始めたいこととして、KUINEPは多言語教育の現在進行中の取り組みの1つであるわけですので、これを改善していく必要があるといえます。具体策として3点ありますが、まず、担当科目をボランティア扱いで教員負担とするのは絶対にだめだという意見は非常に強く出されていました。現状では、KUINEPを各部局で担当して下さってる先生方は、ノルマ以外でボランティアという形で、やっつけて下さっている方が多いわけです。その中にはなかなか科目を拡充していくことはむずかしいということです。次に、KUINEP学生の科目履修の柔軟性を高めることが挙げられました。学部を超えた履修を認めるということで、例えば日本語がまずまずできるKUINEP学生がいた場合に、どんどん学部の授業を取ることを認めていくということです。3点目は、部局の定める京大生のKUINEP科目の履修制限もなくしていく。

他にはe-learningの活用、授業に力を入れる文化をつくること、それから学生の交流の場の仕掛けをつくる

こと、KCJS（京都アメリカ大学コンソーシアム）との連携の強化が指摘されました。

ラストのスライドです。長期的な提案の一つですが、KUINEPは多言語教育化と発展的に融合できる。各教員が各部局で提供している授業を、英語、あるいは各教員が得意な言語に変えて実施する。これなら可能だという意見もたくさん出されました。KUINEPの成功は、KUINEPが特別なプログラムとして存在するのではなくて、京大全体の授業の中に入り込んで、発展的に解消することであるという意見が出されました。以上でございます。

**北村** ありがとうございます。

分科会報告を全部いただきましたので、ちょっとひと息入れましょう。10分間、コーヒータイムを入れて、最終コーナーに突入したいと思います。

自学自習を根幹とする  
 京都大学の教育の現状と課題  
 —文系学部・研究科における新しい教育のあり方  
 を探る

第1分科会

問題提起(1):  
 外部からの要請と学生の気質の変化

- 外部からの要請  
 シラバス  
 成績評価の厳格化  
 充足率  
 その他、各種提言
- 学生気質の変化  
 「知的な渇き」欠乏症  
 学生の劣化

自学自習環境の変質

近畿地区  
 大学教育研究会での報告

問題提起(2)  
 学部教育と大学院教育とに分けて議論したい

- 共通する課題としての「学習、研究意欲の減退」をどう考えるか？
- これに対して、  
 個々の教員の努力を超えた「制度的な工夫」はあるか？
- 教員の側の意識にも変化が・・・？  
 専門職大学院  
 法科大学院  
 公共政策大学院  
 経営管理大学院  
 教育系専門職大学院
- 教え方に変化はないか？

問題提起(3)  
 単位の実質化の必要性？

- 学生の受講科目数
- 1科目あたりの学生の投入努力

議論の内容(1)

- 全般的に、「学習意欲の低下」という認識は少なかった。
- 「大学院においてさえ」という問題提起
- ただし、「自学自習」の意味は、学問の性格によって異なる。  
 法科大学院  
 文学研究科
- 動機付け、学び方の提示をうまくすれば自学自習はうまくいく。

議論の内容(2)

- 自学自習のための各種の工夫が必要  
 意欲を高めるための評価の工夫が必要  
 昔のように完全放任ではだめ  
 世界の事象に驚嘆する能力  
 マニュアル化に対する批判があるが、マニュアルと戯れる能力を持っている。 Cf. 西洋文学読書案内  
 法学の場合は、もともと自学自習と講義の組み合わせ、相互学習
- ↑  
 学生をひとくくりして見てはいけない  
 Bottom line が低下している、中間層対策の必要性  
 特に、何をやって良いのかわからない学生の増  
 ポケゼミに対する評価は分かれた。

議論の内容(3)

- ドクターの就職の困難さの深刻化  
 自然科学とは考え方が違う←  
 充足率
- 理科系における問題意識とはかなりのずれ
- 外圧(評価、国際化、予算減)に対してどのように対応するか？

多言語による京大式教育体制  
 確立十カ年計画

第11回京都大学全学教育シンポジウム

於 淡路夢舞台

森 純一・横山俊夫

## 第2-2分科会報告

テーマ：自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題：  
—理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る—

出席者： 計38名  
副学長：1名  
教員：人環・理・医・薬・工・農・情・地球環境の各研究科と  
高等教育センターから合計32名  
企画部長・教育推進部長・理学研究科職員の3名  
共通教育推進課：2名

### プログラム：

討論 I 15:04-17:35 (149分間)

開会・扱う問題点・自己紹介・前半討論（内部崩壊）

討論 II 19:35-20:58 (83分間)

後半討論（外的圧力）・全体の纏め・閉会

担当：伏木先生（農学研究科）+田中（工学研究科）

## 最初の問題提起

外的圧力

中期目標・中期計画、評価、学校化、  
単位の実質化、成績評価の厳格化

自学自習の危機 !!

内部崩壊

学生の気質の変化、学力低下、  
中学・高校の教育の変化

## 内部崩壊についての Estimation

- (1) 学生の子供化はある：抽象的・内省的、答えのないものについての議論が苦手。
- (2) ポケットゼミは人気がある。
- (3) Early exposureは喜ぶ。
- (4) 高校時代から「受身」に慣れており、それが持続している。
- (5) こちらの話し方が通じていない？ システム(教員・社会)がむしろ壊れている？
- (6) トップと平均的学生の格差が拡大している(いずれに焦点を当てても困惑がある)。
- (7) それでも京大はマシ。
- (8) 近年の大学カリキュラムの過密化が問題を大きくしている？
- (9) 上級生になると結構やる気が出てくる。

## で、完全に壊れているか？

いや、そうでもない。  
こっち(教員)も壊れている？  
直しかた(対処法)の問題

むしろ崩壊は創成の始まり？

現場の教員は楽観的

## 外的圧力をどう考えるか

- ・学校化・単位の実質化・成績評価の厳格化と、自学自習のすすめは異次元のもの。
- ・ただし、ここでの落ちこぼれを回避する必要がある。
- ・「お客さん」学生を脱皮させる必要もある。
- ・「お勉強」だけさせるのは良くないので、京大式の論理構築をしよう。

註) 単位の実質化：大学設置基準では、1単位45時間の学修が必要。京大では1週1コマ90分を2時間と見なして、半期13週の26時間で2単位与えている。時間不足を補うには、相当時間数の予習・復習が必要。ここから履修制限(Cap 制)の話も出てくる。

## 落ちこぼれ防止に 対する方法論は？

- (1) 学生に対する初期の細やかなガイダンス：予習・復習の必要性を説く。
- (2) 将来設計の提示(教員・院生などによる)
- (3) 教員のPassionを上げる。(cf. 予備校の先生)
- (4) 宿題を出す
- (5) クラシスなどの充実を図る。学習支援ソフト等の充実。
- (6) シラバスの一層の充実化を図る。
- (7) 場合によっては、Teaching専用教員を確保する。

このように手当てしてやると、京大生はかなり応答できる。  
医学・薬学部のように国家試験を伴う場合でもかなりできている。

以上のような対応で、かなり行けるはず(楽観的に過ぎる皮算用か?)。

## 自学自習への方策

以上のようにして、まず外圧をかかわす方向に持っていき、落ちこぼれを救いながら同時に自学自習をすすめる。

- ・高校などで、理系制的好奇心萌芽のしかけの脱落が見られるので、京大としてよりきめの細かいメッセージを発信する必要がある。
- ・初学年のEarly exposureからのMotivation持続も重要。
- ・「役に立たない」こと、「余計な」ことができるので、京大の卒業生は人気がある。
- ・トップの連中はこれができる。
- ・ただし、平均的あるいは平均以下の学生にどのようにしてこれをすすめるかは議論できなかった。(昔風におおらかに見てやるだけで良いのか?)
- ・また大学院教育までは議論を深め切れなかった(学部教育との対応・連続性・ユニバーサル化など)。

## 結論

- ・外圧の中でも、京大は「やれてる」ことを示すべきであり、またそれは可能であろう。
- ・学校化と同時に放任。
- ・ただし、相当の工夫やしかけは必要。

## 第3分科会： 学部教育における 研究所・センターが果たすべき 役割を探る

担当者：川井秀一（生存圏研究所）  
宗林由樹（化学研究所）

## はじめに

- ・参加者の多様性：13研究所、13センター等、26部局
- ・教育シンポジウムへは、はじめての参加者が多い

ものを決める場ではなく、情報を共有して、将来の京大の教育を考えていく場として

## 討論 I-1

- ・昨年度の第1分科会（研究所・センターの教育への関わりかたー教育は権利か、義務かー）の議論の概要について報告

全学の教員が、それぞれの組織のミッションを配慮しながら、  
（全学共通）教育負担をできるだけ公平に分担する。  
今後、そのための制度設計、仕組み作りを検討する。

研究所・センターを取り巻く状況

- ・外圧：  
文科省学術審議会の議論  
中期目標・計画への記載の有無  
教育再生会議
- ・内圧：  
教育への貢献  
標準教員と特定教員の別  
雇用調整・効率化係数の関係

## 討論 I-2

- ・情報の共有を図る
- ・研究所・センター教員が学部（専門）教育に携わる際の現状の問題点と課題について
- ・全参加者からできるだけ多くの現状報告と問題提起

## 学部・研究科における研究所・センターの位置付け

- ・多くは協力講座として、大学院教育の一翼を担う。
- ・しかし、極端な場合は、大学院の協力講座として認められていない。
- ・学部教育については、部局により大きな差。
  1. 全く参画していない
  2. 講義を担当
  3. 講義、実験、演習、課題研究など、基幹講座と同等
- ・研究所・センターが協調的な関係にある学部・研究科もあるが、多くは学部教育への参画が認められていない、または制限されている。

## 学部・研究科における研究所・センターの位置付け

- ・研究科における附置研は（研究所総体としてではなく）個別の協力講座として扱われ、大学院教育に協力する立場として位置づけられている。
- ・教育方針・教育カリキュラム編成に加わることもなく、学生の定員配分など差が付けられ、イコールパートナーとして参加していない。
- ・学生の希望があっても、課題研究を受け入れることができない。希望する学生がいれば、協力講座にいける道を。

## 討論 II

- ・討論Iの取りまとめ
- ・現状の問題点を整理、課題の抽出
- ・次期中期目標・計画に研究所・センター教員の教育への関わりをどのように盛り込むか
- ・学部専門教育を中心に必要に応じて、全学共通教育（教養教育と専門基礎教育）と大学院教育
- ・具体的な提案、改善策について

## 1. 大学・研究科・研究所のミッションとの整合性-1

- ・研究・教育以外の多様な業務を抱えているセンター群もある。  
フィールド・場の提供、カウンセリング、寒剤供給、情報インフラ整備、産学連携、社会連携（博物館）  
実習を主催、データベース作成、インフラの整備・維持・管理
- ・教育・研究の下支えにおける貢献を評価して欲しい
- ・中期目標・中期計画に記載する工夫

## 1. 大学・研究科・研究所のミッションとの整合性-2

- 研究所の存在意義と学部教育が調和するか？
- 学部教育への積極的な参加を望む部局
- 学部教育に消極的な部局(少数意見)
  - 国際的な最先端の研究が第一
  - ポストク育成に重点をおきたい
  - 全国共同利用において学内外の教育に関与
- しかし、大学の研究所・センターとして教育への責任には共通認識

## 2. 自学自習をサポートする教育を学部と協力して

- 大学院生の獲得など、損得勘定は別
- 学生本位で、学生の立場に立って
- 学生の多様なニーズに応える
- 研究科・センターの独自性や多様な人材を活かした教育
- 長期的な視野で、人材育成につなげたい

## 3. 研究所・センターが学部・研究科教育に参画するために必要な学内協力

- 教育負担の公平化
  - 特定の教員に負担が集中していることは正
  - 講義・演習・実験・課題研究指導担当のデータベース
- 大学院協力講座として教育に参画する保証
- 教育研究基盤経費の速やかな移算
- 組織として教育への関与が見え、正当に評価される中期目標への記載

## 大学院重点化後の教育組織としての附置研の位置づけ

- 「21世紀における京都大学のあり方について—中間報告—(平成6年2月)」において、現状と将来展望を総括し、研究推進組織としての研究所・センターについて「特定の研究課題に対応する研究を使命としてきた研究所・センターが、学部の大学院重点化によって、研究科への関与の方法が問われている。」として、問題提起をしているが、具体的な対応については検討されていない。
- 学部の専門教育に関して大学院基幹講座に所属する教員が兼担するとして、独立研究科の教員にも関連学部の学部教育を兼担できる制度の確立を示しているが、「協力講座として」大学院教育を担当している研究所・センターの教員の位置づけは明記されていない。

## 4. 制度的な仕組み

- したがって、それぞれの特性に応じて研究所・センターの教育組織としての役割・機能を規程して、明確に位置づけるべきである。
- 学部教育について、必要に応じて大学院教育も含め、総合的な観点から京大の教育理念を反映するような教育のあり方を全学的に考えていくことが重要
- 10年先の京大の教育の枠組みを考えるための全学的WGを提案

## 分科会4: 京都大学における英語教育の現状と課題

グローバル化社会における英語教育のあり方を探る

## 分科会4

- 場所: 405会議室
- 担当者:  
佐治 英郎  
銚井 修一
- 参加メンバー:  
29名  
スタッフ2名

## オリエンテーション(丸山理事)

- 英語教育の変化は、全学教育シンプの最大の成果の一つ
- 全国的に高い評価、ただし学内では認知されず
- これを前提に学部・大学院教育を考えてほしい

## 経緯と状況の説明

- 佐治教授より目的・経緯・状況の説明
- 目的: 意見をまとめることではなく、現在英語教育で何をどのように教えているか、またそれを学部・大学院教育、研究といかに結びつけるか
- 経緯: 10年前における英語教育の問題
  - a) 再履修者(2600名)とそれに伴う大人数のクラス  
: 授業内容の改善と大人数教育対応法が必要
  - b) 対応策: CALLシステム
    - ・教材、モチベーション、勉強時間と達成度との対応
    - ・現在1200名程度の再履修者
    - ・再履修者以外、初習外国語への適用

## 英語教育の問題

- 10年前の英語教育の問題点と対応策について: 水光教授
- 再履修者とクラスサイズ
- 英語担当教師の資質の評価
- カリキュラム改革

## 再履修者の多さとクラスサイズの拡大

- 10年前までは80-100名のクラスが普通、非常勤の数は70名程度(7割)
- 自律型CALLシステムの導入
  - ・クラスサイズと学習効果との間に明確な相関は無し、教える側の負担大
  - ・場所・時間を定めようとするため問題、教室ですることは不自然
  - ・場所・時間に制約されない自律型CALL授業・CD-ROM教材・いつでもどこでも
  - ・1600名程度の学生を8クラスに、TAが補助、1学期に4回の試験
  - ・勉強時間と習熟度は強い相関
  - ・8割程度の学生が満足(H6年度の外国語への満足3割・不満足3割)
- CALLシステム導入の効果
  - ・再履修者の減少
  - ・クラスサイズの減少: 少人数の対面式クラスの実現
  - ・少ない専任教員による対応(2900名の学生に対して21名の専任教員)
  - ・学生の満足度増加
  - ・教師の教えることについての満足度も増加
  - ・非常勤依存率の大幅減

## 英語担当教師の資格

- 誰が担当すべきか
  - ・従来は英米文学者が担当。英語学者は殆どいず
  - ・英文学者にとって英語教育は雑用
  - ・英語教育学を専門とする教員の採用が必要
  - ・英文学・英語言語学・英語教育学の適切なミックスがベスト
- 英語教育学の専門家の養成
  - ・日本における専門家の不足
  - ・人間環境学研究所「外国語教育論講座」の創設

## カリキュラム改革

- 旧来のカリキュラム: あって無きがごとし
  - ・一般目的の英語と専門目的の英語。一般目的の英語は無目的の英語に
  - ・難易度・目的などに統一性無し
  - ・目的が規定されていない京大の英語
  - ・文学部の授業と全学共通英語との違いが分からないシラバス
- 学術研究に資する英語教育
  - ・大学の英語は大学教育の基本理念を実現・具現するためのものであるべき→京大は学術研究を目指す→学術研究に資する教育→全学教育はそれに資するものでなければならない
  - ・英検は不可
  - ・非常勤講師の採用: 自分で学術論文を書いたことのない人物は駄目
- カリキュラム改革が最重要
- カリキュラムをシラバスが反映できているか: 現状では47%程度
- 新カリキュラムの開始: H18年度



## 新カリキュラムに対する(学部からの)質問、意見

- 一般学術目的の英語と特定学術目的の英語の関係
  - ・現状では両者の関連無し
  - ・両者のマッチングが今後の課題
- 入試の英語で英訳をやめて英作を採用
  - ・口語的な表現はできるが、専門内容の英訳は弱い
  - ・昔に比して文法が弱いのはなぜか→学習指導要領により中高の英語で文法をきっちり教えず、全体を大まかに捉えれば良いという教育に変わったため
  - ・緻密に文章を読めない→学術に資する英語を進めてほしい

## 専門教育と学術英語教育

- 4回生セミ
  - ・特定の専門的な英語は要らない。文法の複雑な英語が読めなくなっている。一般的な英語をきっちり教えて欲しい。
  - ・数学などの基礎的な専門用語は学んだほうが良いのではないか
- CALLシステム
  - ・反復練習を目的とするなら学術目的である必要は無い→現状のCALLは学術目的ではない。専門にとらわれると一部の学生にしか使えなくなる

## 英語と日本語

- 英語教育学というのはどのようなことをする学なのか
- 学術目的の英語については疑問。簡単な専門英語だけでは寂しい。専門では教えない英語、英語圏の人々の気持ちがかかる教育を
- 学問に目的が必要か→教養と技能を結びつけるところに意味がある。これまでの教養を否定するのではなく包含しようとしている。
- 論理構成が英語と日本語で違う。それが分かれば異文化理解にもなり本当の学術的な英語になるのではないか
- 日本語訳は本当の英語になっているのか。英語を書かせるのが重要ではないか。
- 英語が真に必要なようになるのは学部卒業後
  - ・学部との協力が必要
  - ・3、4回生でいかにつないでいくかメンテが重要

## 発音・会話

- 日常会話のような英語
  - ・完全には無視はできない。それは各個人に任せるべきか。
  - ・発音に特化した科目は設けていないが、発音を教えることを含め総合的教育をすればよい。
  - ・会話学校に学生がいくことを否定していない。
  - ・現状でも発音・会話も入っているが、趣旨を明確にするためリーディング、ライティングに重点を置いた。
- 英語と日本語の論理の違いに対しては、入試で和風の問題を英訳させている

## ツール・スキルとしての英語

- ツール・スキルとの関係
  - ・理系はツールとしての面も大きい。
  - ・文学部:分野により違う
  - ・法学:分野により異なる。きっちり翻訳できるようにすべき

## 分科会討論Ⅱ

- セッションⅠで提出された問題、英語教育の範囲の設定、資源の問題などを認識した上で、専門分野での英語教育の考え方、つながりについて検討

## 外国語の必要性

- 外国語の重要性
  - ・技術・学問を輸入するための技術としての外国語
  - ・英語による入学試験:他科目と強い相関
  - ・海外の高い技術を吸収するための外国語の意義は低下
  - ・コミュニケーションの手段としての英語の重要性がますます高くなっている
  - ・文化を学ぶ、外国語を理解するための第二、第三外国語の重要性をどう考えるか
- コミュニケーション、プレゼン
  - ・日本人は自分の考えを表現する能力が弱い
  - ・英語でチームメイトとコミュニケーションして協働することの重要性
  - ・プレゼンの訓練、スキルの重要性
  - ・アメリカの教育と比べるとはいいかがか。国際語としての英語とアメリカ人の英語では違うのではないか

## スキルの必要性

- アメリカのハウツーもの教育
  - ・アメリカ人でもスピーチは怖い
  - ・ハウツーものを排除すべきか
- ライティングセンター
  - ・図書館にメインのセンターを設置
  - ・TAにおいて一般学生の相談相手・添削
  - ・学部生の能力が高まる
- スキルが大事であること

## 学部におけるモチベーション

- 語学はモチベーションが重要。ただ基礎力が無いとどうにもならない。学部の勉強が重要
- 連続して教育を維持することが必要。そのためにはモチベーションが必要
- 3、4回生における英語力の低下
  - ・客観的に調べたのか
  - ・もともとそんなに高いのか
  - ・これからの学生は英語をしゃべれなければいけないというのは不遜な態度ではないか

## 専門英語の担当教官

- 専門に関する英語の授業をするとすれば、海外で育った人がするのは良いのか、ネイティブが教えるのが良いのか、英語教育に経験がないものが教えてよいのか
- 学部で英語を教える教師に対するトレーニングはどのようにしたら良いのか
- 英語の教え方を学ぶことより、英語を使って専門に関して何かをする場を提供するのがよい。language based approachより contents based approachが良いのではないのか。全学で分担するのが良い。
- 来日外国人とのセミナー、外国人留学生の存在
- 総人では人数が多いが、専門英語は少人数でできるのでcontents based approachが良い。
- 部局の壁を越えて単位に関係なく教育する場を提供できれば良い

## 教養教育側と専門との情報伝達

- 今回の英語教育の改善が学生にどの程度伝わっているのか
  - ・入学時ガイダンスで趣旨を伝達
  - ・専門側が学生に伝えることが重要
- 教養側の変革・モチベーションをどのように伝えるのか、いつ誰がどのように与えるのか
- 各学部で教育を担当している教員とのコミュニケーションの場が必要。それにより、ニーズの把握、より有効な教育ができるのだろう

## まとめと提案

- 新しい英語教育カリキュラム
  - ・各学部への紹介
  - ・学部での専門英語について検討（専門英語を教育する教官のスキル:FD）
  - ・双方向の作用を期待(情報交換などを含む)
- 学術研究に資する英語という考え方
  - ・学部・大学院にも適用したらよいのではないか
  - ライティングセンターの設置など

第5分科会

学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題  
——世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る——

多言語による京大式教育体制確立  
十一年計画について

担当者  
横山 俊夫(国際交流推進機構長)  
森 純一(国際交流センター長)

議事

・ 主旨説明

多言語による京大式教育体制確立十一年計画について

・ 話題提供

- 1) 多言語国際教育とアジア研究 藤井 正人 先生 (人文科学研究科)
- 2) 医学における多言語教育 平出 敦 先生 (医学研究科)
- 3) 遠隔講義と多言語講義の可能性 中村 裕一 先生 (学術情報メディアセンター)
- 4) KUINEPの現状と意義 森 純一 先生 (国際交流センター)
- 5) KUINEP講義の授業評価 河合 淳子 先生 (国際交流センター)
- 6) KUINEP講義の経験と問題点 吉田 哲 先生 (工学研究科)
- 7) チャレンジとしての英語講義 齋藤 直子 先生 (教育学研究科)

・ 自由討論

分野を問わず  
多言語による国際教育が必要

○たとえば、理、工、医、経済

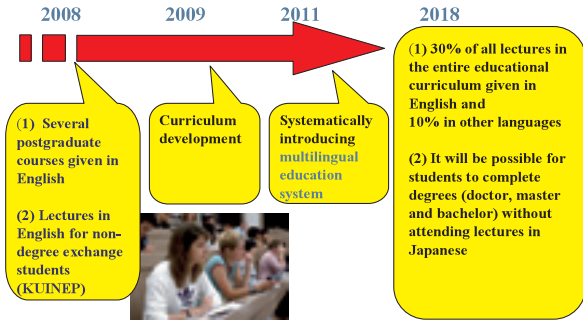
○古典研究、歴史研究ではどうか

さまざまな文化や言語を背景とする研究成果のせめぎ合いによって、初めてその分野の、人類社会にとっての価値が創出される。



Ten-year plan to promote multilingual education

<総長 07. 8. 22 演説>



多言語による京大式教育体制確立  
十一年計画

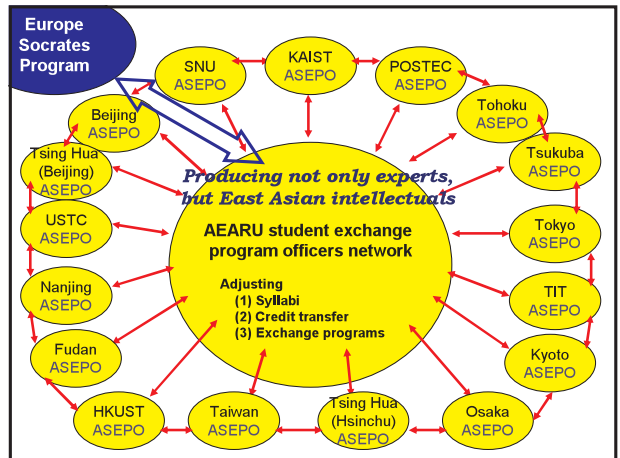
2008~2011

- ・ 大学院諸専攻の多言語教育化
- ・ 多言語科目による学部教育プログラム試行

2012~2018

- ・ 多言語科目による学部教育プログラム完全実施
- ・ 全教科30%を英語化、10%を英語以外の外国語で

<京都大学学内だけで完結しない体制で>



京都大学教育国際化の理念

- ◆ たんに専門家を養成するだけでなく、
- ◆ 地球社会の構成員となるにふさわしい、東アジアの文化に根ざした知識人を育てる

主要な論点

1. 「多言語教育化」の意義
  2. 具体的取り組みの現状
  3. 今後の課題
    - ・ 今からでも始めたいこと
    - ・ 3年後を目ざして仕込みたいこと
    - ・ 長期にわたって仕上げたいこと
- 京都大学学内だけで完結しない体制で

## 1. 「多言語教育化」の意義

### ■ ハブ的存在としての京都大学

ある国のことを学びにその国以外の外国へ行くことにより相対化して対象を見ることができる。→京都大学はアジア研究の層が厚い。それを生かして、京都大学でアジアのことを学べ、世界への情報発信が可能。

### ■ 対象となる言語vs媒介となる言語

学ぶ対象となる言語は多ければ多いほどいい。媒介としての言語は現状は英語。理想は後者も多言語となることにより一層豊かな思考が可能となる。

## 1. 「多言語教育化」の意義

### ■ 母語と他(多)言語による重層的思考を

他(多)言語で普段の自分の世界を体験しなおすことにより知識や考え方を深めていくことができる。→教育の早い段階で系統だてられる必要がある。発信能力のある人材育成。

### ■ 文化的背景の異なる人々に対するサービスとそれを担う人材の育成

文化的背景の違いが医療へのアクセスを難しくするケースがある。言語の問題ではなくHealth Literacyの問題。→それを理解し、様々な人に対応できる人材育成が必要。医学のみならず、留学生、外国人研究者受け入れの基本的問題ともいえる。

## 1. 「多言語教育化」の意義

### ■ 必ずしも「東アジア」に地域を限定する必要はない。世界に開かれた京都大学がよい。

### ■ 対象に応じた多言語教育化は必要か？

誰を教育するか、どんな目的で教育するのか？  
例えばKUINEPは、(1)日本人学生に向けた英語講義の訓練(2)日本人学生に向けた外国人留学生との交流の場(3)教員に向けた英語講義の訓練(4)外国人留学生に向けた講義をすべて一プログラムで実現しようとしている。

## 2. 具体的取り組みの現状

### ■ 遠隔講義の蓄積

TIDE(1999~)

3大学連携(清華大、マラヤ大、京大)による地球環境科学教育

ハイブリッド e-learning

キャンパス間講義 週30コマ程度実施中

国際遠隔講義 週4コマ程度実施中

## 2. 具体的取り組みの現状(その2)

### ■ 医学における多言語教育

外国人に模擬患者になってもらって対応の練習  
リスク管理、ホスピタリティ

### ■ KUINEP (Kyoto University International Education Program)の蓄積

平成9年10月開始

KUINEP学生 受け入れ年間40-45名、

京大生 受講者 年間500名

現在の提供科目数 年間21科目

京大生の協定校への留学 年間29~39名程度

## 3. 今後の課題

- ・今からでも始めたいこと
- ・3年後を目ざして仕込みたいこと
- ・長期にわたって仕上げたいこと

その前に・・・念頭に置くべき問題



その前に・・・念頭に置くべき問題

- KUINEPの改善
- 留学生の財政サポートの問題
- 留学生の住居、健康
- 日本人学生の英語力、教員の英語力は大丈夫か

## 3. 今後の課題

- ・今からでも始めたいこと
- ・3年後を目ざして仕込みたいこと
- ・長期にわたって仕上げたいこと

<京都大学学内だけで完結しない体制で>



## 今からでも始めたいこと

- KUINEPの改善
  - (i)担当科目をボランティア扱いで教員負担とするのは絶対駄目
  - (ii)KUINEP学生の科目履修の柔軟性を高める(学部を超えた履修など)
  - (iii)京大生のKUINEP科目履修制限を撤廃する(現状は2単位までという学部が多い)
- e-learningを活用した多言語化教育の普及。
- 「授業に力を入れる」文化をつくる…授業の良さによって教員が評価される体制
- 日本人学生と留学生が交流する場、仕掛けを作る…ディスカッション、共同プレゼンテーション、グループ活動など
- KCJS(京都アメリカ大学コンソーシアム)との連携の強化

## 長期的に

- KUINEPは「多言語による京大式教育体制 確立十年計画」と発展的に融合できる。

(i)各教員が現在各部局で提供している授業を、英語などに変えて実施する。

**すなわちKUINEPの成功とは、KUINEPを特別な存在するのではなく、京大全体の授業の中に入り込ませ、発展的に解消することである。**

## (2) 全体討議・まとめ

北村 2日間にわたるシンポジウムで、議論でかなりお疲れだと思うんですけども、ここはこのシンポジウムの最後の総まとめの一番肝心なところです。最後まで、がんばっていきましょう。

多様なご報告がなされましたので、このまま焦点を絞らないまま議論をしても発散してしまいそうです。そこで、丸山理事と西村理事に、5つの分科会の報告をまとめていただこうと思います。最初に、丸山理事から5分から10分程度でおまとめいただきますようお願いいたします。

丸山 おっしゃるとおりでございまして、実際にまとめをしていただいた方も、正直まとめきれないという発言が大部分であったと思いますので、私がそれをまたまとめるなんてことはほとんど不可能ですが、感想を述べさせていただきたいと思います。

私は主に2の分科会2つと3のところについての感想を述べさせていただきたいと思います。まず、2のところですが、これは1にも共通することですが、私の最初の思いでは、少なくとも2のほう、要するに理系では、最初に私がお話ししたような意味で、自学自習といったような京都大学の教育理念を維持するには、学生の気質、学力等で相当問題が起こっているのではないかということを示しました。それに対する認識が、多様という表現もありますが、私が思っているより皆さんのほうが楽観的だと思います。実際に私自身は、ほぼ2年間ぐらい教養教育に対応する機構の機構長を務めていて、いろんな意味で学生と接触しました。それからもう1つは、私自身は助手になってすぐから、ほとんど毎年1回生に対する数学の講義をやってまいりました。それでずっと経年的に見ています。さらに、これは私が数学を専門にしているおかげといえますか、それに派生するものですが、入学試験の出題、採点にほとんど毎年かわってきています。入学試験の答案を採点しているときに、私が30年ほど前にやった時代と現在では、明らかに問題の質も変わっているのももちろんですが、それだけではなくて、答案の質が相当変わってきています。その事実は、昨日冒頭に申し上げましたけれども、2年ほど前に2006年問題という基調講演をさせていただいたんですが、そのときにはいろいろ問題があるのではっきりとは申し上げられなかったんですが、西田吾郎さんがデータとして用意してくれた、入学試験における点数とか最低点の推移を分析したデータを私は持ってまして、それから見ても明らかに学生の質といった意味では大きな違いがある。

そのときに、初等・中等教育における理科、数学等の教育内容を詳細に調べて、いろんな人のご意見も伺いました。そのときにかなり意図的に、その中に総合学習とか探究科目といったものが設けられている意味について申し上げました。今回の中教審等が総合学習を減らせといったものを出していますが、私から見れば、授業時間数を減らしているとかいうことについては、ゆとり教育という意味で問題があるとは思いますが、総合学習、あるいは探究の理念を読みますと、それを経てきた学生さんは、自学自習といったような面から見ても、理想的な学生を育てるといのが理念だと、私は思います。我々から見た

ら、あれが本当に理想的に行われれば、我々にとっては非常にありがたい学生さんが来るのではないかと  
思うほどの、高い理念に裏付けられているんです。しかし問題は何かと言うと、総合学習の時間を使って  
まったく別のことがやられたり、あるいは初等・中等教育の現場で、本当に総合学習の理念を実現できる  
だけの実力を持った教員がそれほどいるわけじゃないという実態から見て、入ってくる学生さんが、むしろ  
逆の方向に流れているという事実があるということ、2年ほど前に申し上げたんです。その危機感から  
見て、自学自習が可能かということ提起したつもりだったわけです。

当然ですが、皆さんの認識は多様であるし、むしろ楽観的である。その事実は、多分皆さんが、私から  
見ればですが、現場で実際に3回生、4回生という学生さんを指導されてるし、実際には先生方がやって  
おられる内容について、やりたいと、こういうことを勉強したいとある程度モチベーションを持った学生  
さんを受け入れておられる。そういう意味でそれほど劣化しているんじゃない、それなりの意欲はあるん  
ではないかという感想を持たれているのではないかと、私は思います。

しかし、私はそういうことよりもっと広く、京都大学の学生として、これだけのものをつかみ取って社  
会に出て行っていただきたいという観点から見た場合に、全体的な意味でのモチベーション、あるいは知  
的好奇心といったものの欠如があり、自学自習が成り立たなくなるような、危機的状況になりつつあるの  
ではないかという危機感を持っているわけであります。

ただ、皆さんの議論の報告を聞かせていただいて非常に心強く思っていることは、やはり京都大学の理  
念として、自学自習は何とか維持すべきだということが、ほぼ大勢であったように感じました。そのため  
の方策等についても、具体的なものがいくつか挙げられていますが、これについて可能であるか、あるい  
はその効果については専門家と、具体的に言えば、まず入り口である全学共通教育の現場とどの程度の  
ことができるか。これは第3分科会にもかかわることですが、教育資源の問題もありまして、一朝一夕に  
対応できるものではないかもしれませんが、何らかの工夫をできないかと思えます。

結論といたしましては、自学自習というのは京都大学の理念として維持すべきである。それに対して外  
圧的な意味で問題があるならば、むしろ私たちが、例えば私は評価担当の理事ではございますが、私等が  
外圧を押し返すような努力をすべきである。がんばれというエールを送ってもらったものと、私は感じて  
います。微力ではありますが、その点はがんばりたいと思います。

もう1つ、研究所の教員の教育問題でございますが、これは昨年から実際議論をしていただいています。  
川井先生の報告を伺って、とにかく私たちが目的とした、それぞれのミッションが非常に多様な研究  
所の方々が集まっていたいて、最初はかなりいろんなご意見があったようですが、結果的には、やはり  
教育に積極的にかかわるべきであろうということについては、大体の共通認識をもらった。あるいは今  
日、入り口で配っていただきました平竹先生のこの文章を読ませていただいても、こういうふうなお考え

を持っていただけると本当にありがたい話だと、私は思います。

ただ、研究所側の要望、あるいは当然の要求ということで考えますと、むしろ学部・研究科のほうでございしますが、これが対立するものであってはならないわけですが、やはりそのところを含めて、もうそろそろ全学的な意味で、先ほど川井先生のご報告にワーキンググループというようなことも出てきましたが、これについて、どこまでやっていただけるか、やるべきかということについて、全学的な意味での検討を進めるべきであろうと思います。研究所の方々も、相当程度やれることはやるべきだ、あるいは積極的にやるべきだというようなご意見もかなり強いわけです。それに対して、そういう場の提供、あるいは本当にそれをカウントして我々の教育課程を組んでいく。

これは昨年も、私、申し上げました。ある学部長さんが、別のことを検討している場所ですが、研究所の方々も本当に教育に参加するということであるならば、それについては学部のカリキュラムそのものをもういっぺん組み直して、それを読み込んで何とか教育課程を組んでみるということを考えようじゃないかという具体的な提案もされているわけです。そういうことを考えて、全学的な意味でのそういうような検討をなるべく早く始めるべきではないかというのが私の感想です。以上です。

**北村** ありがとうございます。それでは、西村理事から、主に第1分科会と第5分科会について。

**西村** 丸山理事に続いて私がやるのは少し変な感じがしておりますが、特に白状しておきたいことがあります。丸山理事は教育全体に関して全体が見える理事です。このシンポジウムは11回やっているのですが、私は今回が3回目で、しかも3年連続で来ていて、その前のことはまったく知りません。全学の教育ということに関しては、丸山理事をはじめ何人かの先生方が長くかかわっておられて、私はそうではないので、全然わかっておりません。わかっておりませんが、逆に私は今回初めて参加された方と気持ちを共有したいことがあって、それはこのへんにロビイストみたいな人がいて、(笑) 僕らが「こうやないか」と言ったら、「それは違う」と言っていっぱい怒られるという図式からまだ脱してきていません。3年ぐらいで初心忘るべからずで、何にもわかってないけど、発言したいということでお許しいただきたいと思えます。

率直に言って、丸山理事の気持ちがだんだんわかってきたというのは、大学という組織はなんとアホな組織かということでありまして、(笑) 例えば私たちは国の省庁の縦割りを批判します。外務省と文科省の間が全然うまくいっていないとか、最近、経産省が工学研究科と一緒に人材育成プログラムをつくらうんですが、文科省はすごく冷めているというような話に大学もいっぱいかかわっていて、私たちは省庁の批判をします。批判したいことは山々あるんですが、大学という組織もよく考えたらまったく一緒に、部局間の関係というのはあまりにもひどい。そして私はそれを3年前までまったく認識していませんでした。



本論に入りますが、経済学をやっているので、やや不穏当な表現になりますが、大学というところは、いかに壮大な無駄から成っているかという思いを、今回のシンポジウムで新たにしました。そう言うと、大学というのはそういうところだという反論が必ずあるんですね。だけど、ええ加減にしろよという気持ちも若干あります。

さきほどの英語教育の改善について、皆さんはどのようにお思いになったでしょう。かなり多数の方は知りませんでした。実は経済学部が今度、英語教育をちゃんとやるというプロポーザルを出したんですが、先ほどのご説明にあった水光先生のCALLシステムについても何にもわかっていなかったという経過があります。それは広げようとしなかったほうの責任もあるし、それを知らうとしなかった部局の責任ももちろんあるわけです。あるわけですが、同じ京都大学の中でそういう変革が起きているということに関する情報が、あまりにもちゃんと円滑に流れていない。こういう壮大な無駄はそろそろやめたほうがいいんじゃないかという感じがしました。

私は国際交流担当でございますので、国際交流の推進ということ考えた場合も、さきほどのお話のように、部局のKUINEPに対する理解の貧しさということがあります。つまり英語教育をした場合に、正規の教員の負担の1つとして認めるという、こんな単純なことがどうしてできないかというのがあります。ところが、実際問題、先ほどの省庁の利害対立と同じような図式がそういうことに関してありまして、部局内で、例えば国際交流に熱心な人と、そうじゃない人とのコミュニケーションがあまりうまくいってないんですね。英語で講義をするとしたら、なんか物好きな人っていうイメージがあって、なかなか円滑にいかない。

そしてもう1つ、最後の第5分科会に関して提起された問題は、本当はこういう場でもっと徹底的に討論されるべきではなかったかと思っております。大きな流れとして、理科系のほうには国際化というのは即英語化というか、英語1言語という発想があります。文科系のほうにはむしろ多言語という発想があります。今回の第5分科会は、私も準備にかかわりましたので、存じ上げているんですが、理科系の先生方にも多言語ということをぜひ理解していただきたい。文化というのはそういう多言語の理解の上に立って、例えば工学研究科が、国語の試験をされるという発想の背景と共通の認識ですが、そういう発想があります。

ただ、プラクティカルに問題を考えるときは、おそらく10年後、うまくいって30%ぐらいの英語講義ということが実際問題だと思います。このあたりは、いろんな部局をまたがって、そういう議論をこれから詰めていく必要があるという印象を持ちました。

結論ですが、私はちょうど3回目なんですが、皆さん、いかがでしょう。初めて来た人は、「何やねん、これは。こんなん2度と出たくない」と思われると思います。嫌やけど3回ぐらい出ていると、「やっぱり

これは大事か」という気になりますので、どうか来年、再来年と2、3回がんばって我慢していただくといいのではないかという印象を持ちました。

つまり今回、学生に対する自学自習のあり方を議論したわけではありますが、私たち教員は、あまりにも教育に関して自学自習ばかりやってきたのではないかという印象はあります。つまり私たちは教育法に関して、それはモチベーションを上げることを含めてですが、もうちょっと情報交換をして、自学自習だけではなくて、相互学習をする必要がある。分科会で、例えば法学研究科でも自学自習が可能となるのは、学生同士がお互いの勉強を教え合うということをやからだというお話を伺いました。私たち教員も、研究はやっておられるんですが、失礼な言い方で恐縮ですが、教育に関してももうちょっと広い範囲に視野を広げたほうが、私個人としては、おそらく自分の研究内容も高まるという気がしておりますが、それはちょっと置いておいて、教育に関してのコミュニケーションをもう少し盛んにして、自学自習を超えたところの教育法の質の向上を図るのがよいかという印象を持ちました。以上でございます。

**北村** ありがとうございます。

では、総合討論を始めましょう。今まとめていただいても、まだかなり大きそうな気がするんですね。1、2はやや同じ方向を向いているかという気がしますし、3以降はシステムのことで、さらに3と4、5はちょっと違って、3は研究科と研究所の関係、4、5は国際的なものですね。少しずつ分けていきたいと思います。

1、2のほうは自学自習につきまして、ある意味で経営を担っておられる方から、「おれらは危機感があるんだけど、これじゃ危ないと思っているんだけど、大丈夫かい」という問い掛けに対しまして、多様なご意見があったけれども、「大丈夫だよ」という信頼のあるお答えをいただいたと、2人の理事がまとめられたような気がします。これは組織としては非常に健全でして、経営は危ないと思っている、現場は大丈夫だから任せてくれと言っている。

もう1つ問題点があって、内圧と外圧という指摘がありました。内圧のほうは、現場の先生方はよく学生さんを見ておられるので、あまりぶれはないだろうと思います。少し学力についていろんな面があるけれども、なにか工夫をすればカバーできるんじゃないかというご意見だったんですね。

ところが、外圧について。中期目標・中期計画、次期まで考えて、あるいは今の暫定評価がかかっている次の予算を目の中に入れてという議論は、やっぱりなかなかしにくくて、できなかったというふうを受け取るんですね。予算というのはもちろん人件費もかかりますから、定員もかわるわけですね。

そこで、それについて触れられているのは、昨日、磯先生が評価の実行委員長の観点から、意見を述べられたことです。私がコーヒーを飲みたかったのもありますが、途中でさえぎってしまいました。この外圧からの対処というのは、今回のシンポジウムの大きな目標の1つとして、内圧のほうはかなり議論が

進みましたので、外圧の観点を少し意見を述べていただいて、もし議論が起これば、それについて深めたいと思います。磯先生、何か昨日のところをもう少し掘り下げて言ってくださいませ。もう少しダイレクトに、オブラートに包まずに、いつもの調子でお願いいたします。(笑)

磯 実は昨日、北村先生がコーヒーを飲みたかったというより、私が刃傷沙汰に及ぶところ、松の廊下で、「殿、殿中でござる」と後ろから抑えられたぐらいのことではと思っているのですが。これは実行委員会でもご説明申し上げたことで、これをまず理解していただかないと話が始まらないと思うことがあります。

それは昨日、北村先生が第Ⅰ期中期計画のタイムテーブルということで説明された、昨日の北村先生の問題提起資料で言えば、第1ページ目の6つ目の囲いにあるタイムテーブルですけれども、このことの重要性をまずわかっていただかないと、話は進まないのではないかと思います。

と申しますのは、今、漫然と第Ⅰ期中期計画があって、第Ⅱ期中期計画があるとお考えの方も多いと思います。つまり先生方が各部局、あるいは教育の現場でどのようなお立場かによって、第Ⅰ期中期計画・中期目標のかかわり方の程度がいろいろ違うと思うんですけれども、京大全体の評価を取りまとめる立場からして、私が一番危機感を感じていることがあって、まず一番の危機感は、なぜ第Ⅰ期中期に、できそうもないような目標と計画を立ててくれたんだということです。私は本当は過去に戻ってこれを立てた責任追及をしたい。そういう方はたいがい名誉教授になって、もうおられなくなっているのに、残された我々がなんでこんなことをしなければならないのか。

だから、私の今の思いを次につなげたくはないので、第Ⅱ期中期目標・中期計画というのは、もう少し大学全体で将来のことを考えて、低いレベルで実現可能なことを書くのではなくて、やはり夢のあることを書きながら、そこへ向かっての具体的な施策ということをもう少し検討してから書くべきじゃないか。

それがまず重要ということで、じゃ、それはいつすべきかということなんですけれども、今ここに総長、理事がおられるところで大変恐縮なんですけれども、現総長の任期は来年の9月の終わりまでです。そうすると、逆算して考えれば、来年の4月、5月のあたりには総長選挙があるわけでしょう。そうすると、4月、5月から尾池先生がご退職になるまでの間が、新旧の執行部の引き継ぎ期間なわけですけれども、この段階のところ、すでに次の中期目標・中期計画についてのすり合わせができていないと間に合わないタイムテーブルになっているわけです。

新総長が10月1日に着任されたら、そこから具体的に次期中期計画を立案するところへ行って、そしてその次の年の概算要求と次期中期計画は、当然リンクするわけですから、概算要求を通常6月、7月には出してしまうことを考えますと、新総長が決まってから次の4月までの間に、次期中期計画と中期目標

はほぼ立案・策定されていなければならない。

この日程から逆算をして、現在、各学部は教育・研究について十分お考えでしょうかということが、私が一番問題提起したいことであって、ここのステップのところでも中途半端な対応をしてしまうと、またあれも書こう、これも書こうというようなことが出てきて、そして各部局から出てきたものを予定調和のように全部合わせてしまうと、今のようなええ加減な中期目標・中期計画ができて、それでまた次の中期目標・中期計画も評価するときは、だれがこんなん書いたんやとかいう話になって対処ができなくなる。まずこういう事態を十分ご理解いただきたい。それが第1番目です。

昨日申し上げて、松の廊下で引っ掛かったことは何かと言うと、教員の方々はこういうことを通して、中期目標・中期計画について取り組まなければならないということは、何らかの形で知っていくわけですが、教職員といったときの職員の方はどうかということについて、私は非常に疑問がある。

職員についての研修というのは、昔で言うところの人事部、現在で言えば職員課なんだろうけれども、そこが企画をしているわけですが、私の知る限り、職員の方に対して、評価についての組織的なガイダンス、研修は1度も行われていない。評価の仕事をしているために、私、事務局へよく行くわけですが、企画部の中で話をしているときには非常に話が通じるんですが、他の部へ行ったときには、いまだに国立大学の時代の、いいところも悪いところもありますけれども、旧態依然の発想でものが動いている。新しい法人化された大学になっているということの意識がまったくない人が、本部の事務局の中に単数ではなくて複数いる。

私が最近一番ひどいと思ったのは、人事部系統の事務なんですけれども、本来、研修等の企画をするべきところが、今、何の研修を企画して、何を職員の中へ浸透させていかなければいけないことかまったくわかっていない。私は事務職員を批判してくれと言っているのではないんです。こういうことをまず教員の方が十分理解していただいて、そしてともに歩んでいくという話に変えてほしい。

私も含めてなんですけれども、教員の方々は、教員が上にあって職員が下にあると思っているときがある。それは違うわけですね。新しい法人化した京都大学においては、教職員がそれぞれの職能を全うすることによって、大学運営をしていきたいと思います。教員には教員のミッションがあると同時に、職員には職員のミッションがあって、それに上下があるわけではないわけです。

ところが、こう言っている私だって、時々何となく上から下に言うものの言い方をしますし、逆に職員の方からすると、「先生が言ってるんやからそれで済む」というような形で済ましてしまって、上下関係に対する批判もあるけれども、その中の心地よさで何となくやっつけてしまっているところがあるけれども、このような気分を変えていって、教員は教員のミッションを果たし、事務は事務のミッションを果たし、それが協調しながら大学運営をしていくというほうへ持っていかなければいけないけれども、そうなってい

ない。そこが昨日、私が申し上げようとしたところで、一番問題です。

個別の事務に対して、人事部はこんなにけしからんとか、環境部はこんなにけしからんとか、枚挙のいとまがないほど私はたくさん知ってますけれども、今、それをここで挙げることではないんですが、意識改革を教員も事務もしていかなければならない。

私は常に事務に言うから嫌がられるんですけども、教務以外の事務は後方支援部隊です。後方支援部隊というのはサポートのプロフェッショナルである。我々が教育・研究を主体にやっていくために、それを支えるプロフェッショナルとしてやっていただく必要があるわけけれども、そのプロ意識がない方が多い。

それが私が言う事務には事務のミッションがあつて、教員には教員のミッションがあつて、それが協調して進んでいこうという事になっていなくて、京大の職員像の中には、はっきりそれぞれのミッションを自覚して、協調してやりましょうと言ってるけれども、そのミッションをまず理解していないし、協調関係もできていない。これを変えないと次の中期計画にはいきません。

今度は教員のレベルで言えば、昨日申し上げましたように、各部局が各部局のミッションばかりを言って譲らないということをやってしまうと、京都大学の全体の調和が取れないので、評価という意味では非常に困る。

一番何が困るかと言いますと、現在の中期目標と中期計画の書き方の一番の問題点は、無色透明で書いてあるんです。こういうことをやります、こういうことをやりますと。実はその裏側には「どの部局が」があつたんですけども、文科省に出す段階で、どの部局がとは書かなかつたので、世間一般から見れば、京都大学がこういうことをやりますというのが二百八十何項目並んでいるわけです。

要するにこれが喧嘩、怒鳴り合いの原因になるわけですけども、だれが書いたんやという話ですけども、学内版というのがあつて、学内版を見たときには、その学内版がどこの部局がやるかということがあつたわけですけども、あれは学内版であつて、外へ出てないわけです。外へ出ているものからしたら、「どの部局が」がありませんから、例えば「病院が」とか書いてあれば、ああ、これは医学部と病院ががらばつてくれたらいいんだとか、「外国語教育が」というんだつたらある程度わかりますが、まったく無色透明で、研究についてこういうふうにするとか、教育についてこういうふうにするといった場合、世間一般の皆さんは、これは理学部の話ですね、これは文学部の話ですねというふうに理解していただかないから、京都大学全体としてやりなさいとやってるんだなと思われて評価をされると大変困る。

大変困るけれども、現に困った状態で、私がいつも「だれが書いたんや」、「だれが言うたんや」、「前の責任者呼んでこい」とかいろいろ言うのは、どこの部局も自分たちの部局がこういうことをしなければならぬという自覚がないままに、自己点検・評価が来ますので、各部局の自己点検・評価をまとめて、全

体のものを書こうとすると、当該の目標について反対側のことをやっている部局がたくさんあるとか、あるいはその取り組みがばらばらということがあって書けない。

書けないと、それはどうなるかと言うと、書けなければ京都大学として現在の中期目標・中期計画を十分遂行してないという評価を受けますから、次期の運営費交付金の削減になると。

お金を取るために研究をやっているわけでもなくて、お金を取るために教育をやっているわけでもないから、あまり品のない、つまり「競争的な教育資金を取るために我々はがんばりましょう」とか、「競争的な研究資金を取るためにがんばりましょう」は違うんですね。本来は我々の研究があって、それを進展させるために競争的な資金を取っているのであって、我々が持っている教育の理念があるから、それを実現するために競争的資金を取ろうだけれども、最近の議論は、先にお金を取りましょう。そのために何かしましょう。

京都大学の教員といえども地に落ちるような話がたくさんあって、学生に対して自学自習とか言ってるけれども、本当は我々が、従来、帝国大学の時代からここに至るまで、諸先輩の先生方が築き上げてきた京都大学の学風というものを継承した議論をしているのかということ、自分自身も疑問があります。つまり評価の委員長として、こういうことをやってください、ああいうことをやってくださいということ、私は各部局の先生方にお願いますけれども、そのいくつかの中には、自分で言いながらも、京都大学の教員にもとるようなお願いをしているのは事実なんですね。

この矛盾した気持ちをずっと抱えているわけですがけれども、先ほど北村先生がこれからどうやってまとめていこうかと言われましたけれども、私は今日のこの話はまとめる必要はないと思ってます。まとめる必要はなくて、いろんな部局の先生がいろんなことをおっしゃったことを踏まえて、各部局で議論をして、次期中期計画の策定をしていただく。

そのときに、いろんな部局でいろんな意見があるということを理解していただいて、それが最終的には京都大学として調和して出していかなければならないということが理解されていれば、私は個々個別の問題について何かをまとめる必要はないと思うのですけれども、評価の外圧という意味ではこういうことです。

じゃ、外圧に対しては、内圧という内部抗争みたいなものはありますけれども、傾向と対策のような対応を取っているわけです。本来、外の価値基準に従うのが大学なのか、新しい価値基準を提示するのが大学なのか。この近年の議論は、外から来る価値基準について我々はどう対応していくかと。どう対応していくかというのは、どうお金を取っていくかばかりの議論になっていると思うのですけれども、きれいな事を言って食っていけないのは困るのですけれども、教育再生会議も含めて、外のものに対して、京都大学の教員が、我々が正しいと思うものは何であるかということを示しているかと言うと、何も提示して

いない。

今回のシンポジウムの課題といたしますか、最初に配られたこのような問題がありますという、本学の執行部が書かれていることは、私は個別の問題としてはわかるわけですが、そこに特化してしまったり、それは我々は競争的資金、あるいは運営費交付金を取るために対応しようという話になってしまっても、それは話が違うんじゃないか。結果的には取りたいわけですが、それは手段と目的があって、手段が目的化されてはおかしいわけで、目的があってその手段があるけれども、この近年の議論は手段の目的化というか、手段のほうの話になっている。だから、むしろ、大学としてどうあるべきかということ発信することが、評価に対応していくことではないのかと思いますので、そんなふうと考えていただければと思います。

**北村** ありがとうございます。

特定の方ばかりがしゃべるといけませんので、ご意見あれば、いただきたいと思います。

**谷（農学研究科）** 今の磯先生のお話、非常によくわかるわけで、あまりそういうことに携わったことがなくて、あまり言うのもどうかと思いますけれども、自由にとということでございますので、申しますが、やはりこういう外圧ということに関しては、高度成長というのが終わって、税金に依存するということを厳しく問われるということがあると思います。手前味噌で恐縮ですが、グローバルCOEにおいて、文理融合ということで議論しております。理系的な物質の循環という自然科学的なものと、地域の問題ということとを、どうやって融合して解決していくのかということが大きな課題になっています。そういう積極的な議論をしてゆくのが大学であるのに、外圧をどうしてかわして立ち向かうかに気を遣わないといけない現状になっています。

やっぱり、リストラが求められてしまってるわけですね。そのリストラということを外圧として受け止めた場合に、どうやって、今、新しい価値基準を出すかということが、議論の本質でないといけないと思います。その意味で非常に感銘いたしました。

**北村** 丸山理事もその外圧に対しては、中からの意見を基に、一生懸命がんばって説得するとおっしゃってられたと思うんですね。中のことを外に説得する、外圧に抗するという事は大切なことで、特に、京都大学のような使命をもった大学は大切なことですが、どう対抗して、どう外部を説得するかという具体策がなかなか難しい。

京都大学の自学自習という理念を外に対してどうわかってもらうか。決してお金を取りにいくだけが最終目的ではないと話された、磯先生のご意見はそのとおりだと思います。

大事なことは、外からくることに対して、その基準に従って評価するだけではなく、大学は新しい知恵をもってこういうふうな評価の仕方、進む方向性があるよというのであれば、それを主張していかなければ

ばならない。それがなかなか難しいというのが大きなポイントではないかと思います。

特に、私も評価というものに数年前からかかわるようになって、前の名誉教授の先生を責める気持ちにはならない。文科省から出てきている評価の体系自体が、Ⅰ期の場合はかなりいい加減です。走りながら考えた結果になっており、最初のときにはこんなことは考えてなかったんじゃないかというようなことが、次々出てくる。逆な言い方をしますと、トライアルをやっているような気持になることもある。もう少し言うと、「じゃあ、Ⅱ期は」というと、Ⅰ期の実績を考えながらやるということになりますので、たぶん官庁側もそうでしょうけれども、いい加減な中期目標・中期計画じゃなくて、先ほど磯先生からも指摘された実質的なものを出さなければいけないでしょう。

284項目もあるようなものでいいのか。特徴はどうやってつくるんだ。できるのか、できないのかというのは、2サイクル目こそ問われる。システムもできあがってきてしまうというわけですね。そのへんの大切などころもありますし、あるいは事務のところも、業務運営のところはかなり大きな部分を占めてます。評価で、昨日と今日は、教育が主です所以说いませんでしたけれども、財務はじめ事務的などころがたくさんあります。

それも含めての評価ですので、決してここの議論だけで決まるわけではないので、これからは総力戦、大学という全体が組織として問われているわけですから、当然職員の方々にもがんばっていただくかなくてはならない。昨日、今日の名簿を見ますと、職員担当の理事はじめ、部・課から来られている方がいらっしゃらないというようなやり方で、こういうふうなテーマで進めてもいいのかどうかというのは、私も大きな疑問をもちながらやってます。

業務関係のことに関しましては、総長のご指導によりまして、丸山先生ご担当で職員側のグループのプロジェクトチームをつくって対処しようかというようなお話も聞いております。企画部の黒川部長も来られていますので、そのへんのところでコメントをいただけたらと思いますが。丸山先生かと思いましたが、丸山先生よりは、やはり、実際面にたっておられる方からコメントをいただきたいと思います。

**黒川（企画部長）** 磯先生のおっしゃる、事務職員の意識について、私が大学の庶務課長で出ました際に、当時の局長から言われたのは、やっぱり、磯先生のおっしゃったことで、大学の事務局の職員というのは、そのときそのときのミッションを遂行する。そのときの課題をやる。ただ、そのために、例えば創設期の大学であれば、先生と組まなければできない。これは、オーケストラのパートを持つという意識を持てるんですね。

以前、奈良先端科学技術大学院大学におりましたので、その例で申し上げますと、ここに京大の事務系の方がいらっしゃるので、申しわけない表現になるかもしれませんが、阪大の職員と京大の職員と明らかに色が違いました。阪大の先生たちはいい意味で「儲かりまっか、一緒にやろうよ」、「僕らが夢を描くか



ら、君らは形にしてくれ。法、規則に照らして、形にしてくれ」。たぶん、そこに集約されるんだと思います。

今の評価の事務に関しましても、教育研究を片翼で支えている。大学を船に例えるのは乱暴かもしれませんが、ボイラーに石炭を焚いてどンドン油を送り込むということを考えると、財務はそこをよく理解してないといけないのですが、蛇口の締め方、開け方の加減というのは、国立大学の時代には何かうまく機能した部分も、今はなぜか縦割りになってしっくりいっていない。ここが、私が6月に来てからすごく違和感を感じる部分です。やっぱりここは、しっかり中期目標とか計画とか、次が大事なんだということをよく理解していかなきゃいけないのではないかなと思います。

その評価のことも、当初のI期の目標・計画の立て方、それから暫定評価が出て、それが運営費交付金に反映されるということになってくると、総力戦でみんな、意識をもたないといけないのではないかと。

ただ、そのことのために評価疲れしてはいけないので、大学として進むべき方向、「京大はこの道を行くんや」というのを、はっきり外に見えるようにしないと。私、外から見ていたときに、東大とか阪大の位置づけ、それから彼らの情報発信の仕方に比べて、「ちょっと京大は弱いのではないか」と思いました。「今度、京大にいくんですよ」と言ったときに、はっきりそのように言われた方がたくさんいらっしゃいました。

昨日の議論を聞いていて、まだ一本筋が通って元気なところもあるし、そういう意味では安心はしたのですけれども、やっぱり、これから京大がいかにあるべきかということをもっと押し出していくべきではないかと思います。

事務のプロジェクトチームにつきましては、昨日少し話も出しておりますので、帰ってすぐに具体案を出して、調整に入りたいと思います。プロジェクトチームの目的は、毎年出てくる評価業務の多さ、それから7年後の機関別認証評価に対応する人間を育てていかなければならないということです。集めて研修するというより、現時点でのミッション遂行のためにキーパーソンを押さえておくことと、評価に対するノウハウを積んでいくということです。大変重要な課題だと思っておりますので、いろんな部局の先生方にもご支援をいただきたいと思います。ありがとうございました。

**北村** ありがとうございます。

昨日もデータベースのことは飛ばしてしまいましたが、教育の支援をしていただくことがとても大切だと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

**磯** 今、黒川さんがおっしゃったこととも、先ほど北村先生がおっしゃったことともリンクするんですけども、私が言ったことの延長ということで、京大が外へ何かを出していくというときに、例えば京大の基本理念というのがあるわけです。基本理念は、これは学内で制定していることですから、あれを見ます

と大変立派なことが書いてある。大変立派なことが書いてあるけれども、じゃあ、それを京大が積極的に社会へアピールしているか。認証評価に、「各大学が目標を設定していますか」とあり、それには挙げました。「それを社会に周知する努力をしていますか」という項目があったとき、私は回答に困ったんですね。つまり、立派なことは書いてあるけれども、せいぜいホームページにあげている程度であって、それを外へ出していない。「それに沿って、教育していますか」ということは、各部局は、各部局の目標についてどうかは書いてあるけれども、京都大学の理念についてどうであるかというのは、書いていない。

私が今申し上げたいのは何かというと、京都大学から価値基準を外に出していくにはどうしたらいいか。それは、情報発信とともに厳しい自己点検・評価だと思うんです。つまり、今何となくできていますよというのではなくて、こういうことを我々は外へ向かって発信したい。ここは努力してこれだけでできているけど、できていないことについては、これはできていないと。できていないことの原因は、我々に問題があるのか、社会の環境に問題があるのか、そういうところまで踏み込んで自己点検・評価をしたものを出さないといけない。しかし、失礼ながら、各部局のつくっておられる自己点検・評価報告書を、役目柄拝見させていただきますと、多くの部局では、いまだにデータ集のようにこんなことやってますという事実が書いてあるだけで、それについての評価が何も書かれていない。そういう状況で、京都大学が外へ向かって価値基準を発信しようと言っても、それは説得力がないわけですね。

「京都大学はこういう理念でいい教育をやっています」というんだったら、その成果として、こんないい学生が出てますということをアピールしないといけない。文系の分科会では、「学習能力も知的水準も意欲も十分です」と言っていましたが、あれは嘘だと思うんですよね。嘘なんだけれども、本当に高い人もいるし、そうでない人もいるということ、現実を踏まえて、それを我々はどう対応しているかというのを、きちっと自己点検・評価をし、学生に対する評価もし、あるいは教員のファカルティ・ディベロップメントもし、その中で京都大学はこういうことをやってるんだということをアピールする。

ファカルティ・ディベロップメントも自己点検・評価も外からきたと思うから、腹立たしい限りで、こんなもん、何とかしたろうとか思うわけですけども、そうではなくて、我々の主張を社会に通していくための手段としてのファカルティ・ディベロップメントであったり、自己点検・評価であったりというふうに捉えて、京都大学が日本をシビライズするぐらいのつもりで、価値基準の発信の一つのツールとして考えて取り組んでいただくと、また切口が違うのではないかと思います。現在は、自己点検・評価をしなさいという外圧、ファカルティ・ディベロップメントをしなさいという外圧、それに対するものだから、傾向と対策でやろうとしてるものが強過ぎて、そのために我々が外へ向かって胸を張って発信できなくなっているのではないかというのが、私がこの1年2年作業させていただいての印象です。

北村 第1分科会の先生、こんな狼どうでしょうかね。(笑)

第3分科会も中期目標・中期計画と関係があるところがありますし、学部の先生と研究所の先生方のご意見の違いもあるでしょう。あるいは研究所の先生方からご提案がありまして、単に講義だけではなくカリキュラムも含めて、研究所とセンターからもう一步踏み込んで参加させてくれというふうなご提案にも受け取れました。そのへんのところを受けまして、学部の先生方、いかがでしょうか。

あるいは、研究所の先生方、いろんなことをご議論いただきましたけれども、それについて補足していただいたり、私の真意はこうだったというようなことでも結構でございます。ございませんか。

いつもご意見を言うだけそうな北村先生、いかがでしょうか。研究所の研究科・学部との交わりという部分には、いろんなご意見をお持ちのように伺っておりますけれども。

**北村雅夫（理学研究科）** 突然指名されまして、どういう発言をしていいか、よくわかりませんが、我々のところは、例えば、理学研究科の場合は協力講座ということで、たくさんの先生方に、大学院教育に参加していただいています。

実態をいいますと、例えば、基幹講座の教員が約 300弱、280名ぐらい。協力講座の教員が 300名ぐらいです。実際に、1学年 300人ぐらい修士の学生がおりますが、基幹講座で 200名ぐらい。協力講座で 100名ぐらい。実は、大きな問題がありまして、外圧の一つの大きなのは充足率というもので、充足率は基幹講座はいいんですが、協力講座がかなり悪いという現実であります。

そうしますと、協力していただいているわけですが、そのために充足率が悪いという評価を受けると、今度、基幹講座だけのペナルティーになるんですね。そういう問題もありまして、かなりナイーブな問題も抱えております。

本日欠席しておりますが、理学研究科は加藤先生が来る予定だったんですが、現在、理学研究科でもその問題を検討しております。できれば協力講座との協力関係をもう少し、より発展させたいと思っております。

学部の教育に関しましてはかなり問題がありまして、実はいろんなところで発言してますので、ご存じの方がいるかもしれませんが、大学院重点化をしまして、大学院手当を皆さんもらってるわけですが、そのまま継続しております。ですから、学部を担当するというのは、全部業務付加になっておりまして、学部の授業をしたり、学部の入学試験、入学試験も最近手当をくれなくなりましたので、すべて業務付加ということで、学部に関しては学部長手当以外は全くないというわけです。

学部教育をどう責任取るかというのは、実は、従来学部の教員であったという人たちが基幹講座ということで責任をもってやってるというわけです。それが現状ですね。ですから、大学院を重点化したときに、学部教育をどうするのかというのは、文科省自身が考えなかったもので、大学としては教育、今話題の中心になっている学部教育というのは、大学として、どう責任を取っていくのかというシステムの問題も

検討しなおさないといけないと思っております。

それから、理学部は学部教育にあまり研究所の先生方、参加していただいております。これは工学研究科とかなり違っております。実は、いくつかの理由がありまして、先ほどカリキュラムという話もありましたが、例えば理学研究科の場合、学部の教育のために、少なくとも従来の教室がありまして、生物学、植物、動物とか数学とか化学とか全部あるわけです。一応、理学部なら理学部としまして、理学の学問分野全体をカバーできるような教育システムをつくっているというわけです。

研究所の場合は、研究のミッションがありますので、例えば、化学なら化学に特化した、あるいは数学に特化したとか、そのバランスが、我々が考えている理学のバランスとはかなり違っていているわけです。ですから、ある科目にだけ特別に100人ぐらい協力の先生が来られても、全体のバランスが取れないということもあります。

そういう意味で、あくまでも全体の、理学部なら理学部の教育の理念を遂行するための配置というものがありますので、完全にある部門の先生方が大量にこられて、協力していただくということがいたずらに混乱を招くということも、現実にあったことも確かなんです。そういう意味では、今後また、検討させていただきたいんですが、そういう意味で、研究所のミッションと学部のミッションとはかなり違っていているということだけは申し上げたいと思います。

**北村** ただ、研究所のミッションに教育が入ってくると、ざっくりとって、教育研究という意味で、学部と近づいてくるわけですね。しかし、その中でどうやって特徴あるミッションをつくられていくのか。今までだったら研究オリエンテッドで、学部の先生方で議論になっているようなお金の話や面積の話は関係ないとのこともあるでしょうけど、そういうことに対して敏感になられている先生方もいらっしゃるわけですね。

ミッションが近づいてくるということは、大学の中で、バルクできたお金をどう分けていくか、あるいは持っている施設をどう分けていくかまで、つながっていくような深い問題だと思うんですね。

それを急に換えようということを深くここで議論する場だと言っているわけではなくて、そういうようなところまで根が繋がっているということを言いたいわけで、ミッションを変えていくというのはかなり重要な問題なんですね。共同利用ではない研究所、センターを、外圧に対する対抗力がないよ、小さくなってきているよということだけで変えられるわけではなくて、大学の根本的のところにつながっていると私は思っていて、そういう意味では、ここで教育を学部はどう考えられているか、研究所からの教育への貢献をどう考えられているかというのは、根本的のところだと思うんですね。

今日は、川井先生のほうから分科会で研究所側からのご提案をいろいろいただいたと思うんですね。それを、大学の根にかかわっているんだというレベルで、研究科、学部の先生方もお考えいただきたいし、

そういう時間もいると考えています。そういういいご提案があったような気がして、ここでもし何かそういう議論が進めば、ご意見なり、先の事を考えるためにお聞きしたいと思っております。ご意見がございましたら、どうぞ。

丸山先生、いかがですか。いつもと似ずお静かですが。昨日の夜が効いてますでしょうか。

**丸山** 難しいですねえ。昨年、この議論が、最初のときにあまりうまくいかなかったと、私、評価したんですが、その根底には、やはり正直に、先ほど言わせていただいた平竹先生の文章の中に出てくるわけですが、要するに大学院生を確保するためという類いのことではだめなんだと、おっしゃっているということは、そういうことを考えてということが非常に多いことは事実であるということでしょう。裏返すとそういうことになりますね。昨年のこのシンポジウムで、実は最初のときに、私はそこにいたんですが、研究所、センターの方と思いますが、本音をいえばそうなんだとおっしゃっているわけですね。

あるいは、ある研究所ですと、教育といっても自分たちのミッションからいったら、後継者を育てるといったような意味での教育しか興味もないし、それだけが目的である。ことそれに対して、学部側からみれば、大事な大事な、育ててきた学生を、横からすつと持ってかれちゃうという感覚を持ちちゃうわけです。

今、北村先生がおっしゃったように、本当は、そのミッションとかかわってきて、お金の問題とか何とかいう場合、全部かかわってることですから、現実には皆さんの議論の中で、ある種喧嘩みたいになってしまうのは、はっきり言ったら、それぞれ思惑があって魂胆があって意見が出てくるからうまくいかない。

もう1つは、お互いに情報をよくわかってないということがあります。どういうことかという、例えば、今、北村先生ははっきりお金のことをおっしゃいましたので、私が知っていることを申し上げますと、研究所の方々は、実際自分たちはある意味で冷たくあしらわれていると思ってらっしゃる方が、私の耳にも聞こえてきます。だけど、資源という意味でいきますと、これ事実ですが、お金と、さっきちらちら北村さんがおっしゃったのは面積、施設についても、研究所というのは、学部・研究科に比べて猛烈に優遇されているんですよ。その事実は、研究所の方も多分知らないと思うんですよ。それを認識してほしい。研究科、学部側の方々、少なくとも執行部は、相当知っているんです。研究所側が何だかんだとおっしゃると、「実はね」ということを言っても、そのことを実は研究所の方々が認識されてない。

例えば、基準面積でいいますと、教員当たり基準面積、実際言いますと、研究所というのは学部の2倍ですか。3倍ですか。それから予算でも、施設費といったような、施設じゃないな、何だったかな、特別なお金が実際ついている。そんなこともありまして、最近総長が、学部長さんたちのご不満がかなり高いということで、まずいということをお考えになって、4回、総長と学部長さんたちの懇談会のようなこと

をやらしていただきました。私に、取りしきりをやれと言われたので、私が皆さんにお願いして集まってもらって、総長とやったんですが、その中の、これは私は成果だと思ってますが、財務部に、どこの部局にどういうお金がいつているという、過去3年間ぐらいの経緯を込めた表をつくってもらいました。これは学部長さんたちの要求でやりました。今週の火曜日の部局長会議ですべての部局に配布いたしました。それをご覧になっていただいたら、状況は非常によくわかると思います。それぞれの部局長さんに尋ねれば、秘密ではありませんから、見せてもらえると思いますから、わかりますが、そういう資源配分にも実は結構、いろんな意味で誤解もあるし、「これはないよね」といったような感覚もある。

で、最後に言いますと、今、北村（雅夫）先生がおっしゃった、じゃあ、学部教育やってて、それがまあ、はっきり言ったら付加業務みたいになっている。私は、教員の組織を考えるということ、昨年、これは法律が変わりましたから、やったんですが、その中でこのところを少し改めようと思って、少なくとも助教の人たちについて学部でどういう教育をしてるかということ、を勘案しながら、大学院手当というものの配分を考えようかなということ、を提案しましたけれども、これは、研究所群の方から猛烈な反発を受けて、はっきり言って、潰されました。それは、研究所群の方々に言わせれば、自分たちは学部教育をやりたいといっても、やらせてもらえないじゃないか。ある意味で、学部教育の決定権を握っている学部側に優遇するようなことは何事だという本音があるということ、はわかってます。

しかし、私は、何とか研究所の方々も、学部教育に相当程度参加していただきたいですが、そういうことを全部込めて、皆さんの教育負担をある程度勘案しながらやりたいと思ってます。皆さんのところに、今、アンケート調査が私の名前で行っているのはご存じだと思いますし、ちゃんと答えていただきたいんですが、全教員に対して、実際の教育負担がどんなものであるかという、正直なデータを出してくださいとお願いしています。まだ出してられない方は、すぐにでも出してください。大事なことは、回収率なんです。回収率を上げて、本当の実態をつかみたい。その上で、教育負担というものをもう一ぺん考え直したい。それは、研究所の方々も含めてそういうことでありますので、最後です、よろしくお願いします。

**北村** ありがとうございます。

根の深い問題で、時間があれば、もっともっといろんなことを考えていきたいんですけども、まず、情報を共有するというのが一番大切なことで、お互いにどう思ってるか、誤解がかなりあるというのも事実でして、それを把握するということからでないと、こういう根本的な問題は、次に進めないと思います。こういうご意見があったことを、持って帰ってくださいませ。ここにいられている方は数が限られますので、ぜひ持って帰って、研究所あるいは各研究科、学部でお話をしてくださいませ。

第4、第5分科会のほうに本当は移っていきたくんですけど、だんだん、だんだん時間がなくなってきて、もう今でも時間オーバーしてるんで、第5分科会のほうはいかがでしょうか。手が挙がりました。ど

うぞ。

**平竹（化学研究所）** 化学研究所の平竹です。

先ほどから図らずも私のささやかな私見が、皆さんのお手元に配られておりまして、いろいろコメントしていただきましてありがとうございます。

丸山先生のおっしゃった院生獲得に絡む利害ですね。これ、非常に根深い問題だと思います。私も研究所におりますので、身にしみて感じてきたことでもあります。かつては、そういうことに対して非常に不満も抱いておりましたし、私自身が何とかそれを改善しようという形で、学部の先生とお話合いを持ったということもあります。

ただし、そこで感じたことは、いつまでもそういうふうな考え方で我々研究所の人間が学部の先生に問いかけても、それは対立の溝を深めるばかりである。それは間違いないことですね。

私は、同時に、ポケット・ゼミを始めまして、学生の生の声を聞く機会、接する機会に恵まれました。そういうことをずっと経験してきますと、最終的にはやはり、この対立の根にあるのは何かといいますと、京大の学生さんという限られたパイを奪い合ってるからなんですね。

私は、むしろ、そうじゃない。京大の学生さんなんかもう必要ないんだ。日本中に優秀な学生さん、たくさんおられますから、研究所あるいはセンターの先生方も、日本全国からいい学生さんをリクルートしてくればいいんだ。現実問題、私の研究室の学生さん、ほとんど京大の学生さんおられません。ほとんどが他大学からこられた学生さんばかりです。それでいいんです。その中で、充実した大学院教育をちゃんと我々がやればいいと思っております。

そういうふう考えたたん、肩の荷が下りまして、すーっと楽になりました。そうしますと、不思議なことに学部の先生方とのコミュニケーションも、非常にうまくいくようになりました。逆にいいますと、学部の先生もあまり構えられない、構えられないで本音で話ができる。そういうことかなと理解します。

私が、これを達観と呼んでいいかわかりませんが、こういう考え方に至ったものは誰から教えてもらったかといいますと、ポケット・ゼミの学生です。学生の生の声です。生の声を聞くことによって、私は何が大事かということを、さまざまな思惑や外部の要因を全部除けて本質を見ることができたような気がいたします。

そういう意味で学生さんの声は宝の山ではないかなと。ですから、常に教育を考えると、学生さんを見据えて、学生さんが何を欲しているかということを見ないといけないなという原点に立ち戻ったような、そういう思いがいたします。ありがとうございます。

**北村** ありがとうございます。

ご意見ありましたら、お手をお挙げいただきたいと思います。

**松重（副学長）** 松重と申します。国際的な産学連携やイノベーションの担当をしています。

私の任務は、いかに大学の研究成果を社会につなげるか、社会貢献の実務なのですが、今回ずっと参加して教育のことを考えると、イノベーションという言葉は通常、技術革新だけを対象とするとならえ方があると思うんですけど、教育についても当てはまるし、大学のシステムについてもそうだと思います。

そういった中で、一番最初の自学自習の分科会で、学生が何をやればよいか、どうすればよいかという議論があったかと思います。これは、教育の大学のやり方についても全く同じようなことではないかなと。大学の教育というのは、今まで小・中・高の教育を受けて、大学から社会に出すわけですから、ある面、今、社会から求められているのはどういう人材を送り出すかが重要になります。それは基礎教育もあるでしょうし、まさに何をやればよいか、どうすればよいか、そうしたことがある程度できる学生を京大から出すというのが、一番、京大に求められているような人材像ではないかな。そうすると、どういう教育のあり方が必要かということになると思います。

また、長期計画の中で考えますと、やはりこれも一種の戦略といえますか、企画が必要だと思います。磯先生が言われたように、誰が企画したかというのはあるんですけども、こういう企画をするときには、単に企画のステージに留まるのではなく、実際に実務の担当ないしは責任までもたないといけない。企画の担当であれば、いいことばかり書くんですけども、現実に即するという視点、またそういうふうな体制づくりも本当はこの1年間でつくっていかないといけないかなと思います。

そういう中で、教育の中のイノベーションというのは、結局、教育の質も変わってきている、現状も変わっている、学生も変わっている、それらをちゃんと分析して、ある程度それに対応し、革新していくことが、基本だと思います。京大には、そういうポリシーといえますか、憲章もありますので、それに向けて内実を豊潤化するといえますか、具体化するというのが非常に重要だと思います。もちろん、研究所の立場、学部の立場もあると思います。

実は、私、評価に関して、経済産業省系の構成員が2千名、3千名という産総研という大きな研究所の評価委員をやっております。ここでは、評価のあり方自体が、この数年間で変わっている。評価というのは、ある面の基準を元にするんですけども、ちゃんとした方針、方向性が明確であれば、少々細かいところに問題や欠点があっても、非常に高い評価点を得るんです。だから、項目に合わせての対症療法じゃなくて、あるべきものをちゃんと示せば十分高い評価は得られるんじゃないかなと思います。教育の原点というのは、大学の一つの大きな重要だと思いますので。そういうふうなのを、今回のシンポジウムを契機に、いろんな意見を反映するような仕組みを早急につくっていかないといけないのではないかなと思います。



北村 ありがとうございます。

私のタイムコントロールが悪くて、かなり長引いてしまいました。ぼちぼち、締めに入らなくてはいけないんですけど、第4、第5分科会のところ、ちょっとご意見をいただく時間がありませんでした。

西村理事のほうからもう少し補足していただいて、そのへんのところのご意見としたいと思います。

西村 本当は横山機構長にお願いするほうが、上手な表現だと思うんですが、多言語による京大式教育体制確立10か年計画、それから英語教育の改善、こういう一連の国際化について申し上げたいと思います。

先ほどから、次期中期計画に向けてということでお話がありましたが、実は、このプランに関しては、この後、紆余曲折はあると思いますが、かなり自信を持っております。国際交流センターの先生方の全面的協力を得て、森先生が一生懸命やってくださいました。部局から出ている国際交流委員会の先生方皆さんのご協力、それをまとめる機構長の横山さん、そして私が微力ながら国際交流担当理事として、それぞれみんな、本当は少しずつ思惑が違います。小異を捨てて、京大が本当に国際化するにはどうしたらいいかという議論を、少なくとも私たち少数の間では、ここ最近、かなりインテンシブにやってきました。

実はその成果が、今回の分科会でございます。もちろん、これから部局に赴いて、この内容をご説明し、修正、さっき申しましたように、英語に偏るか、もうちょっと多言語にするか、そういった調整は必要と思っておりますが、今回、こういう分科会を設けてほしいというのも、私たちの意向で実現した内容でございます。

おそらく、国際化に向けていろんな課題、例えば、昨日のパーティでも聞いたのは、KUINEPを重視するより、部局のいろんなこれからの国際化のプロジェクトをもっと考えてほしいというご意見もありました。これから、KUINEPの位置づけ、それ以外の部局の中での国際化を、機構がどのように協力するかという課題もありますが、私がぜひ申し上げたいのは、繰り返しになりますが、学生が孤立化しているという話は何回か出ましたが、教員も孤立化しているんじゃないかという感じがしております。

率直に言って、私と横山さんと森さんは、したいことが微妙に違います。だけど、3人が手を携えてやらないと、この国際化はできないという自負と自信をもって進めていきたいと思っております。総長がかわっても、次期中期計画にはこの案が何かの形で残るようにしたいと考えておりますので、どうか皆さんよろしく申し上げます。横山さん、補足やってください。

横山（副学長） 補足ではなくて、ちょっと磯さんのおっしゃったことについて。京都大学の基本理念、英語でMission Statementと言っておりますけれども、これを活かした運用があまりないというお話をなさいましたけれども、法人化に伴って設置された機構は、部局を横断する組織でありまして、その活動に関しても、京都大学の基本理念というのは大いに有難くて、特に、前文にあります「地球社会の調和ある

共存に貢献する」というのが楽しい。それには起草委員会の注がついておりまして、地球社会というのは人間だけじゃなくて、サルも花も石も川も山も空もみな入っていると。こういうすごいことを謳っている大学というのは、ちょっと世界に稀れでして、私たち、国際会議にいて京都大学を説明するときに、これを必ず言うのです。すると、はじめはね、“Oh brave!”とか“Eccentric!”とか言われることが多かったんですけども（笑）、世界中どこの大学を見ましても、excellenceを目指すとか、ナンバーワンを目指すとか、単一の尺度で背くらべして勝つわいと、およそ知識人が自ら語るような言葉ではないんです。

私は、最近、京都大学について、この地球社会を想う理念は、さきほどから出ている、いろいろなところで工夫せよとか、何か部局を超えて展開をといた議論が出るたびに、ぜひ引用されると、自動的に京都大学らしい流れが出てくるという感触を得ております。たとえば、第7回から第10回までの京都大学国際シンポジウムは、この理念に添うことで、分野を越えた対話が深まりました。ぜひ、よろしく願いたいします。

**北村** ありがとうございます。それでは、大幅に時間が過ぎてしまいましたけれども、全体討論をこれでお開きにさせていただきたいと思います。

これから総長に総評をいただきたいと思いますので、全体を見渡していただきまして、よろしく願いたいします。

**尾池** どうも、皆さん、ご苦労さまでした。このシンポジウムは何も結論を出さないとか、まとめることもないとかいうところから始まって、最後に総評をやれと。シナリオのどこにそんなん書いてあったか知らんですけども、なっておりますが。

私、昨夜も11時前まで議論をいろいろ聞かせていただいて、丸山先生に「もういい加減で寝ろ」言われたんですけども、それぐらい熱中した話の中に入れさせていただきまして、本当に幸せだったと思います。

このシンポジウムの目的なんです、スケジュールによるとお昼ごはんの時間になってるから早くやめなきゃいけないんで、長話にならんように、司会の方がぎりぎりまで引き伸ばされるんだと思うんですけども、短時間で済ませるつもりではありますが、本当の気持ちを言いますと、昨日、最初に、講演をさせていただいたときの百三十何枚のスライドを、実は、ここでもう一ぺん見せたいんです。そこに書いてあったことが、皆さんの議論の中に、あちらこちらに点在して出てきたという気持ちで。やっぱり、顔突き合わせて議論をするということが、いかに大事かと。松沢哲郎さんがいつも言うんですけども、「ホモサピエンスだから、やっぱり、顔を見てしゃべらなきゃ」と言って、よく来られますけれども。書類でやるとか、メールでやるじゃなくて、顔を見ながら議論をすると理解が深まっていく。これがこのシンポジウムの一番大きな目的なんです。

平竹さんがさっき言われましたけれども、ポケゼミをやって何がよかったかって、学生の顔を見ながら、学生と話してて教えられるんだということをおっしゃったんですが、まさにそれでありまして、こうやって200人ぐらいの教職員、教員の方たちが集まって話をしていると、それなりに理解が深まっていく。

このことを11回ずっとやってきまして、今日、例えば、具体的には西村理事が「3回目になってやっとわかってきた」と。あれ、よかったですね。やっとわかってくれた。これで、国際のほうはだいぶいけるなあと思いましたけれども、そういうふうに、3回目になると理解が深まる。皆さんも、また3回我慢して出なさいというお話でしたけれども、ぜひ、そうして行ってほしいと思います。

個別の事はあんまり申し上げないつもりなんですけど、いくつか取り上げますと、評価のことがありました。私の昨日のスライドには、「評価」と書いてその横に、「改善と説明のために」とこういう字を入れてあったはずでございます。評価というのは、自分が改善をするためにやるんだ、これが第一の目的ですね。二番目は、説明のためにやるんだ。世間の人に知ってもらうためにやる。そして、京都大学というのはこういうものだ、ということを知ってもらうために、今度、大々的に評価を受けようというふうにしておりますから、この評価を通じて京都大学をわかってもらうというのが目的なんですね。

そして、自分たちが改善する第Ⅱ期の目標に向かってという話でしたけれども、第Ⅱ期の目標では、もっとちゃんと考えたい目標が各部局から積み上げて出てくるということを期待しているわけでありませぬ。

野依さんが大学法人評価委員会の座長として、私は、それは非常によく覚えているんですが、野依さんがとんでもないことを言ったと、部局長会議で申し上げたと思うんですが、評価委員会の最初の人に、評価委員会もこれから試行錯誤を重ねていかないとわかりませぬと。評価基準が何もないままに法人評価が始まったわけですね。法人法が導入されました。そのことを私は言ったわけですが、野依さんが、何もわからずに、法人の評価委員会の座長に座ったのがそもそもの第Ⅰ期の問題点の出発でありまして、そこから始まってますから、何をしてるかわからんわけです。

その中で、磯さんも言われたように、各部局が、部局単位で研究と教育の向上度の評価をやるということが、最近になって導入されてきたわけですね。そんなことははじめに言ってくれりゃ、そのつもりで目標書いてるわけですけども、最初の目標は皆さんご存じのように、まあ、どっかでやれば京都大学として、目標にしていっていいでしょうということで始まっているのに、部局単位で教育と研究の向上度の、しかも水準の評価を導入してきたわけですね。目標に照らし合わせて達成度を評価するといって始まった法人の仕組みが、第Ⅰ期の中で、いつのまにか部局を単位にして水準を評価し、向上度を評価するというふうになってきた。これが、そもそもの大変な変化でありまして、それに耐えていかなきゃいけないというのが、今、京都大学のジレンマであるわけですが、皆さん、ご苦労さまでございますが、これやらないと第

Ⅱ期にならないと、こういうことなんですね。

その原理がわかっていただくということが、今、一番のポイントであろうと思うわけであります。その中で、広報のこと、私、申し上げましたけれども、広報もそうですし、これは外向けに説明する機能、それからこの評価というものをきちんとやっていくということを、実務家を養成して、大学にそれを確保していくということが、これからの一番の課題であります。実務家をもって、教員でもない、職員でもない、とにかく評価の専門家というものを置いて、育てていく。そういうことによって、これから改善と説明のための評価というのを、きちんと京都大学としてやっていくということが一番大事なことであろうと思うわけであります。

外圧云々とかいろんな話ありましたけれども、そんなものは大したことはないわけで、京都大学の中身はずいぶんしっかりしているんだということは、2日間議論を通じて、皆さんしっかりわかったと思えますから、それを自信を持って外へ見せていくということが必要だろうと思えます。

その中身の一つが、「自学自習」というキーワードでずっと語られたと、2日間議論されたと思うのですが。自学自習というのは、いうなれば、大学教育の当たり前のことをいっているだけでありまして、京都大学の特徴とかそんなこと言わなくても、大学というのはそういうもんなんです。それがまず基本でありまして、京都大学の自学自習というのは、ちょっと違うんだと、ほかの大学でやるべき自学自習と。

不思議なことに、「自由の学風」という言葉が、2日間の議論の中でほとんどどなたも言われなかったというの、これ、不思議なんですけれども。ほんとは自由の学風という看板を京都大学はいただいているんです。それが自学自習の京都大学の学風の特徴なんですけれども、河合隼雄先生の追悼会にこの前行って、追悼の言葉で申し上げたことは、河合隼雄先生が、自学自習というんじゃなくて、自由の学風という言葉ですけれども、自分が学生のとときに、そんな言葉、京大で聞いたことなかったと。だけど、自由にいろんなことをやらしてもらって、先生は批判だけした。批判だけはしっかりされた。私もそうだったという話をしたことあるんですが。とにかくどうぞ自由におやりください。だけど口は出さず、批判はしまっせというのが、京都大学の教育であるわけですね。

これは自由の学風であるということだったわけでありまして、そういう中で、**education** とか **teaching & learning** とか、いろんなことを言いますし、勉強だとか学習だとか教育だとか、いろんな言葉使いますけれども、それぞれ意味が違って、今まで、「勉強、勉強」って言われた高校生が卒業して入ってきて、「さあ、学習をきなさい」と、こう言われるわけですから。

勉強というのは、勉め、強いるので、「あんた、もうちょっと勉強きなさい」と値切るときに言う言葉ですね。教育というのは、教え、育てる、これも他動詞の言葉でありまして、学習になって初めて自動詞になるのね、学び、習う。これが **educate** の本来の意味で、**education** というのは自分もってる能力を引き出

すという言葉に使われたはずであります。それを明治政府が翻訳するときに間違っ、て、教育育てるにしたから教育、教育とうるさいんですけれども、本来の educationを京都大学はやるんだということで、私は、通していけばいいと思っておりますから。

昨日もいろんなところで議論を聞いていて、自学自習というのは「やりなさい」ではすまないから、入ってきたら、まず第1回の講義に皆さん集めて、「自学自習学というのを講義するか」と。それから、生協を通じて、自学自習セットというのをつくって売るかなあと。(笑) これ、ずっと昨日から考えてたんですけど、今日、ずっと議論聞いててわかったんですが、CALLシステム、まさにそれですね。自学自習セットをつくった。あれが、一つのいい形だと思うんです、自学自習の。本当の意味の自学自習、そうじゃないわけですから、よくおわかりのように。でも、そのツールとしてCALLシステムみたいなものがいっぱいできて、そして自学自習をやる。

ただ、非常に大事なことは、今、学生たちが孤独だという話が、ちらっとさっき出ました。学生、孤独になっている。これは、世の中の変化で、IT技術の進歩が関係していると思うんですが、どうしていいかわからなくなったというときに、自学自習、悩んで悩んで自学自習に私たちのときはたどり着いたわけですけど、そのとき、周りに何にもなかったから、「自分で調べなさい」言われたら、図書館へ行って一生懸命本を開けて調べた。今は、キーワード入れるとWikipediaとかいっぱい出てきて、すぐ出てきますんで、自学自習に至らんわけですね。「あっ、わかった」で終わるわけです。そのことを知って、昔の自学自習のことをいくら言っただって、これはわからんわけで、いろんなものが発達した世の中の中で、21世紀の自学自習というと、京都大学としてはさらに磨き上げて、私たちもそれを身につけて、学生に伝えていかなきゃいけないだろうというのが、昨日から私の思っていることでございます。

自学自習学というのが、やっぱり必要だろうとだんだん思いました。それを完成しておいて、京都大学に入ってくる学生はこれなんだよということを、早く見せておくということが、たぶん、大事なんだろうと思います。

基本理念の話を、横山先生が出されましたけど、昨日、私、最後に「基本理念をもう一ぺん読んでください」と出しました。意図がありまして、議論の中で、あんまり出てきませんでしたけれども、自学自習、ずっとキーワード、皆さん使われましたが、基本理念、もう一ぺん読みなおしてみてください。

その前に一言あるんです。「対話を根幹とする自学自習」なんですね。対話を根幹とする自由の学風、自学自習の伝統をしっかり守ってと書いてあるんです。「対話を根幹とする」というほうを強調してください、これから。今日の成果として、これが大事。自学自習はもういいじゃないですか、当たり前のことだから。京都大学は「対話を根幹とする自学自習」と、こう、フルセットで言うてほしいんですね。そして、対話を根幹とする、要するに話をするんだと、学生の顔を見て、話をして、そして伝えていくとい

う、そういう学習が本来の自由の学風に通じるものだということで、この基本理念に書いてある「対話を根幹とする」という言葉に丸をして、そっちのほうを強調するというのを、これから皆さんでぜひやってほしいと思うんです。

国際語としての英語とか、自国語を大事にとか、いろいろ申しあげましたけれども、これはもう西村先生が「3回目のシンポジウムでようわかった」とおっしゃったので、これ、任しといたら、次の総長までやるそうですから、それでいいだろうと思います。10年後だと。ここがミソなんですね。10年後やったら、私、いないからと思って、みんな、安心してしまいうんですね。そうすると、いつのまにかできあがっていくという仕掛けですから。3年後というと、たぶん皆さん猛反対したり、出てきたと思うんですけど、今日の議論の中で10年後と言ったのは大成功で、誰も反対なんて言わない。「10年後やったら、誰かやるやろう」みたいな話で決まっていくわけですね。

これは、京都大学みたいなうるさい部局のいっぱいあるところでは、運営するコツでありまして（笑）、2年後、3年後と言うたら、絶対通らんもの、10年後と言うと通るという、これ、おもしろい仕組みでありますけれども、ぜひ、10年後には30%の英語教育の講義、そして多言語。多言語というのは、ようしゃべることやないんですよ、たくさん言語を使う。（笑）そういうことを1つの基本方針にして、これからまた、部局に議論を広げていってくださるということですから、本当にうれしいと思います。

1つだけ、私は最後にお願いしたいのは、対話を根幹とする、もう一言翻訳すれば、学生に対して親切な先生、親切な教員・職員であってほしいと、これが昨日からずっと議論を通じて感じたことでありまして、それさえあれば、いろんなことが乗り切っていけると、自由の学風もやっていけると思います。

本当に2日間、お昼ごはんに20分食い込みましたけれども、本当にご苦勞様でした。しっかりお昼ごはんを食べていただいて、バスに乗ってお帰りいただければ、来週からまた自由の学風、自学自習の世界に邁進していただけるんじゃないかと思います。本当にありがとうございました。

**北村** どうも、ありがとうございました。長い時間、どうもご苦勞様でございました。

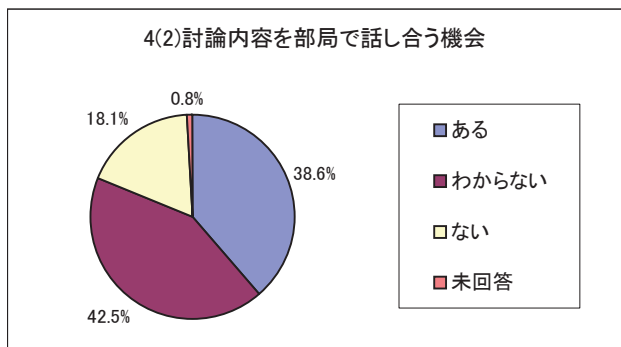
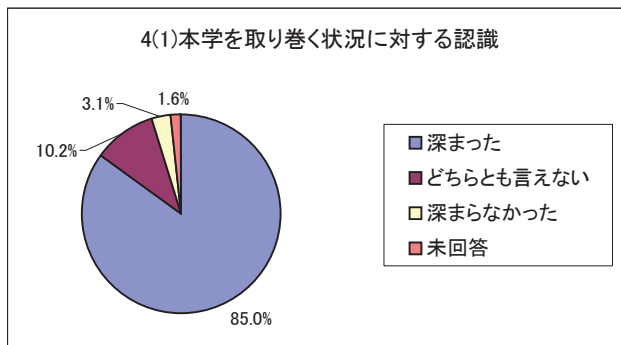
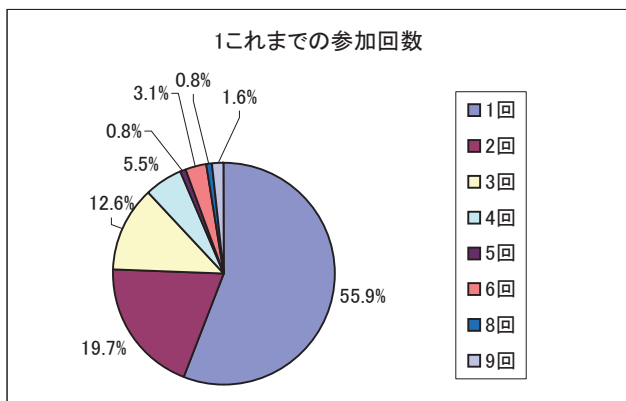
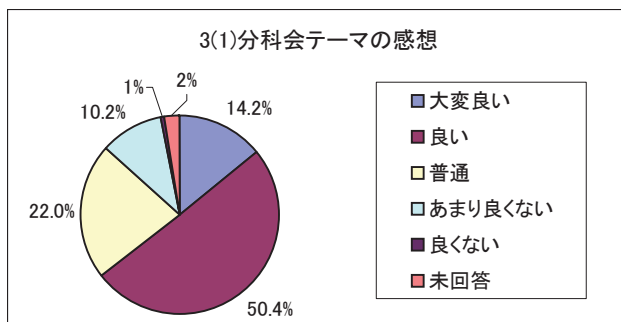
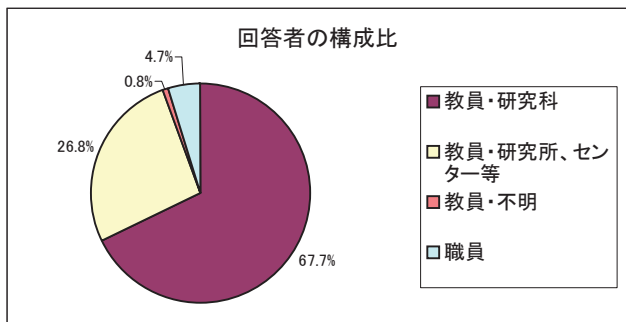
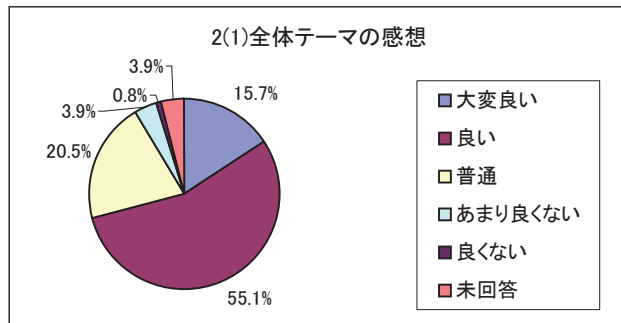
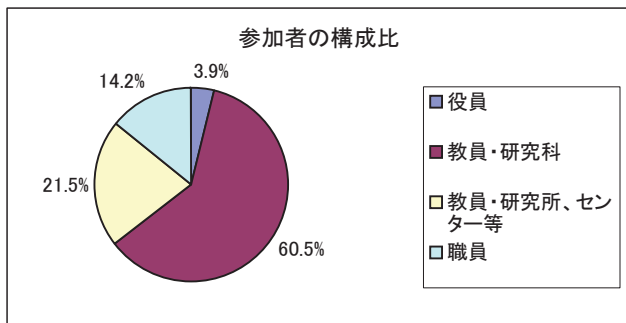
これでお開きにさせていただきたいと思います。

## 7. アンケート結果について

今後の改善に資するため、参加者全員にアンケート(内容は次ページ参照)を実施した。

○参加人数 233名(教員200名、事務職員33名)

○アンケート回答数 127名(スタッフ等を除くアンケート対象者215名、回収率59.1%)



## 第11回京都大学全学教育シンポジウム(H19.9.6-7)に関するアンケート

今後のシンポジウムの在り方を検討し、更に充実させていくために例年アンケート調査を行っております。ご厚意のご意見・ご感想をお聞かせ願いたく、ご協力方よろしくお願ひいたします。

なお、ご提出は、会議場メインホール出口(9/7閉会後)または復路バスでスタッフにお渡しいただくか、後日(9/14まで)教育推進部共通教育推進課(内線：9346)あてにご送付願ひます。

選択式の回答の場合には、該当部分の□に○をつけて下さい。

- 教員  研究科  
□ 職員  研究所・センター等

1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。(これまでに今回を含め、11回開催されています。)

\_\_\_\_\_回目

2. 全体会議についてお尋ねします。

- (1) 今回の全体テーマ(京都大学における教育の将来像を問うー第二期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察するー)についてどう思われますか。  
□ 大変良い □ 良い □ 普通 □ あまり良くない □ 良くない

(2) 全体会議についての感想をお聞かせ下さい。

[ \_\_\_\_\_ ]

3. 分科会についてお尋ねします。

- (1) 今回の5つのテーマ設定についてどう思われますか。  
□ 大変良い □ 良い □ 普通 □ あまり良くない □ 良くない
- (2) どの分科会に参加されましたか。  
□ 第1分科会 □ 第2分科会(2-1・2-2を含む) □ 第3分科会  
□ 第4分科会 □ 第5分科会

(3) 参加された分科会についての感想をお聞かせ下さい。

[ \_\_\_\_\_ ]

裏面に続く

4. シンポジウム全体についてお尋ねします。

- (1) シンポジウムに参加されて、本学を取り巻く状況についての認識は深まりましたか。  
□ 深まった □ どちらとも言えない □ 深まらなかった

理由

[ \_\_\_\_\_ ]

(2) 今回の討論内容をあなたの部局で話合う機会がありますか。

- ある □ わからない □ ない

「ある」と答えられた方にお尋ねします。それほどのような機会ですか。

[ \_\_\_\_\_ ]

(3) シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

また、来年の討議テーマについてもご提案があればお書き下さい。

[ \_\_\_\_\_ ]

ご協力ありがとうございました。



整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
1	「問題提起」の部分は文書であらかじめ通知しておけばよい。その分の時間を分科会にまわすべきである。	Iでは、各人が自己紹介をかねて見解を述べるという形がとられた。それぞれの正直な考えが聞けた点では良かったが、あまりにもバラバラで、議論に持っていくのが大変。IIは尻切れトンボにおわった。これもチェアマンの方であらかじめ話題を参加者に提示しておき、それに答えるという形にした方がよかった。	理系の人々のお考えをじかに聞く機会が持てたことが収穫。		焦点となった「自学自習」についてはそれぞれのとらえ方、学問の性格によるちがいもあって、結局具体的な話にはならなかった。その一方でもっとも具体的な「国際教育プログラム」の話がそれらに押されて「小出し」の形に終わってしまったことが気になる。そのため、この問題について全体で論じられることがなかった。30%+10%という数字がいかにして可能になるのかということについて各人がイメージを持つこともできなかったであろう。来年はこの問題について重点的にとりあげるべきだと思う。
2	自分の知らない多くの情報を得ることができ、大変有意義であった。	国際交流センターの方々を中心に、多大な努力をしておられる現状がわかったが、一方、現在の方向性に各部署の考え方があまり反映されていないのが気になった。	多くの教員の参加により、日ごろ知りえない情報を共有できたから。	専攻教授会等	国際交流プログラムについては、各部署の考え方も盛り込める工夫が必要であり、本シンポジウムでも継続的に討議すべきテーマである。
3	個人的には非常に興味深かった。	多学、他分野の状況も知ることができ、大いに参考になった。	京大に来て1.5年なので、初めて知る情報が非常に多かった。	一部の内容は既に話合っているものもある。教授懇談会等では話題として提案したい。	参加要請が1ヶ月前で、予定のやりくりで苦労した。もっと早く通知できないだろうか？「外部評価」対応の議論が多かったが、そもそも大学教育では何を評価すべきかというところからの提案について議論しては？毎年は無理であるが、再度参加したい。
4		活発な意見交換ができてよかったですと思います。	「問題提起」、「経済財政改革の基本方針2007 抜粋」などの資料はとくに参考になりました。		2日目の全体討論・まとめでは、各分科会の報告の時間配分を平等にした方がよいと思います。それでないと、一番最後の分科会の報告が時間切れで中途半端になり、不公平です。
5	実際に全体討論がなされる時間がほとんどなかったのが残念だ。	問いの設定の仕方がそもそも理学的発想なので、文科系の教員は現状に問題を感じていないというように見える応答になってしまった。しかし問題を感じていないわけではない。	多くの情報を得ることができた。		
6	教育に関する執行部の生の声が聞け、それに対する様々な意見も聞け、大変良かった。	テーマが学部教育を対象としており、研究所・センターにおける教育のあり方が十分議論できなかった。	特に外国語による教育について理解できた。	教授会とスタッフ会議	「研究所・センターにおける教育の実態と今後」実態のデータを整理して、それを参考にして討論。教育の方法の具体論についても議論することがよいと思います。
7	問題点がよくわかった。	京大の英語教育が改善されているのがよくわかった。ご努力に敬意を表す。	皆さん個人的にお話になり、それなりに深刻な状況が伝わってきたと思う。	いろいろな会議で話題にしたい。	自由時間が少なく、物理的にしぼりつけられている感があり、大変苦痛だった。相部屋も勘弁してほしい。英語以外の言語の教育の実情と問題点を知りたい。わかりきった概論を長々と話す(傾向のある)人はスピーカーにならないでほしい。
8					
9	外的環境の厳しさを認識する機会となると同時に、教員の中にあくまで京大の昔ながらのやり方を通そうとする人が少ないことを知る機会となった。	様々な先生方が苦勞されていることがわかり、勉強になりました。国際的な活躍ができる学生の育成のために、語学というツールが重要であると同時に母国語でしっかりと深い知識を醸成することが重要であると再認識しました。	世界の中で京大がどうあるべきかを考えさせられました。	会う人ごとに伝えます。	様々な研究科の先生方と交流する貴重な機会となりました。各々の持ち場で努力を続けている方々の姿に触れ、励まされました。
10	全学教育の課題について意識と情報を共有する機会として有益であったと思われる。	英語教育の現状と問題点が明らかになった一方で、各部署間での英語教育のニーズ(容易にはまとめがたい)多様性も浮彫りになったように思う。	全学一部局間ないし部署相互の間に見解や利益の相違についての情報は割合に共有されたように思われる。	教授会及び各種関連委員会	
11	やや冗長であるが、まあこんなもの？	問題提起内容と参加者の意識に少しズレがあったが、それはそれでよかった。(現場教員の意見が執行部に伝われば、それはそれで成功という意味)	全学の教員が(一部でも)集まること自体に意味がある。		全学の教員が(一部でも)集まること自体に意味がある。来年のテーマについて、これは来年にならないと分からないかも知れない。
12		分野によって自学自習の意味が大変異なっていることがわかった。			中期目標との関連が分科会での議論では薄いような気がした。
13	問題意識を持つことは大切だと思いますが、危機感をあおられる事には対象が違うのではないかと思います。研究室に配属される学生には、これぐらいになって欲しいとの私としての目標があり、それを学生の現状がどうかと比較し、接します。現状認識で悲観しても何も生み出しません。		外圧に対する認識が深まった。		学生の意欲に対する認識を変えないといけないのではない。抽象的なことに向かう意欲は低下というか、向かない。目の前に具体的な形があるものに対しては、強い意欲と興味を持つと思う。そこからより、抽象的なことに興味を持ち、とりくめるよう、学生に「接する」ことが重要と私は思います。学生のポテンシャルに期待しています。外圧に対する方策についてはよく分かりません。足元をしっかりと、学生と接することが私にできることだと再認識しました。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
14	全体会議での第1分科会の結論として、「自学自習」はうまくいっている、と楽観的に評価していることが議論の前提になっていたように思われますが、1.昔ながらの「自学自習型」学生は現在の京大にでも一定数存在している。2.「中間層」「ボトムライン」「マス」な多数の学生は向学心を持ちながら、自分の頭で問題を発見する仕方がわからず孤独を抱えている。彼らに対して「自学自習」の理念を通じてどのように教育するか、「昔」とは諸状況が違うなかでどうしたらいいか。Ex.クラス別自主ゼミ、ポケゼミの拡充、院生TAの活用などが検討されました。				
15	京大の研究のみならず、教育も文科省に首根っこをおさえられて、ある方向に向けさせられていることがよく認識できた。	研究所・センターの現場の生の声が聞けた。	このシンポの討論を総括しきれていない		
16	重要なことです。	理系全体が見えて大変有意義であった。	大変深まった。	現在は無い。今後そういう場をつくっていきたい。	今は大事な時期ですので年2回でも3回でも開催する価値はあります。参加します。
17					
18	1,2は具体的な結論が見えにくかった。	昨年の資料を参照したが、論点に大きな進展が見られなかったように感じた。			学部教育・大学院教育を明確に区別して、それぞれの理念・方針を検討する必要がある。※区別というのは別々という意味ではなく、ステージ毎に柔軟に対応するという意味。
19					フリー討論がもっとはずむように、おつまみを質、量とももっと改善していただきたい。
20		意見を反映できるようにしていただきたい。		教員会議	
21	将来像について全学的に意見交換を行う機会があることは当然のことではないかと思う、という意味です。	着任後2年程なので(?)、名称は知っているものの実態を知らない事項が多くありました。KUINEPの実情や、遠隔講義の実施状況、留学生サポートの現状がわかるだけでも大変有益でした。今後にいきたいと思えます。皆さん同じ点を本音に持っていると思っただけは、「テクニクのブラッシュアップ」と「(思考)力の成長」は別であるということだと思えます。それが意識されていけば、色々な取組みに安心して参加できるということではなかったかと思いました。	着任後年数の短い者にとっては、新たに知り得た事項が複数あるので有益でした。着任後年数の問題ではないかもしれませんが、日常複雑な情報の流れの中で上手く重要な情報にアクセスできているか不明であることの自覚もない状況でありましたので、啓発を戴いたことは有益だと思います。	「部局で」ということについては「あまりない」ような印象ですが、専攻の入試委員をしていた際には、入試委員会では、話題になりました。	
22		未来志向の議論で有意義		国際交流センターがKUINEPの実施責任部局	「多言語講義30%10ヵ年計画」
23	あまりに文科省の指導に従順で、工夫が感じられない。もっと戦略的に方策をとったものを会議で示してほしい。せっかくの時間をもっと有効に使いたい。	活発な議論があった。前向きで認識がかわるようなことも多くあった。が、しよせんセンター研究所内には届かない。このくり(第3分科会、センター研究所のみ)はむだだと思う。	これまでの知識と大きくかわらない。せっかく集まったのだからこの程度のこと前提として話をしてもよいと思う。		京大として本気で生き残りを考えているのか?どんな学生を育てていくのかを話し合うべきではないか。
24	教育に対する問題意識を共有できたと思います。	研究所・センターが学部教育にかかわりを持つための制度的な欠点が残っていると思います。	情報・状況の共有化が持つことができました。		研究所・センターの社会貢献について討議を深める場を作って頂たく存じます。
25		京大に何十年もいて、自学自習を至上と信じている先生が、もう少し評価等に対して柔軟になることが必要だと思う。	教員の現場の様子を知ることができてよかった。現場の先生が現状は大丈夫と思っていることが意外だった。	多分ないと思うが、外圧にどう対応するかといったことへの危機感を共有する機会があればよいと思う。	磯先生の言うように、評価についてや運営費交付金のしくみについて、全職員についての研修を行うべきだと思う。少なくとも資料を配布するか。現場で教員が行っているところを事務職員が知りえていない部分も多いので、少なくとも知る努力は必要だと思う。これだけいろいろな先生方の話を聞く機会は今までなかったのも、いい経験になった。職員が参加することにも意味があると思う。
26	総長が生でお話されているのを拝見する機会は普段ないので、なんとなく人となりの雰囲気くらいは感じられてよかったです。	違う分野の先生方が集まって、それぞれのミクロレベルの話を通じて1つのテーマについて論じ合う機会があるのは、とてもよい事だと思った。と同時に、このシンポジウムの報告内容が、今後大学の方針にどの程度フィードバックされていくのかが気になった。	先生方が、実体験に基づく現状や、ご自身のお考えをお話されていたから。		職員がはっきりぱっきりかやの外なの少し気になりました。やっぱりそんなもんなんでしょか、...

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
27	先生方の御指摘の通り、一事務職員として京都大学の事情についてあまりにも認識が不足していることが分かりました。こういった機会を得て、大学が直面している問題に対する姿勢が見ることができて勉強になりました。	CALLについては知らない成り立ちの部分が聞けて参考になりました。また、英語というものの多角的側面について新鮮な視点で見ることができるようになりました。	深まった部分もあるが、体系的な理解ができていないため断片的な知識によって逆に混乱した気もする。教員と職員の意識がある程度まとまることは非常に困難なことと思えた。		京都大学は改めて複雑な組織や意識や個性によって形成されているのだと感じました。
28	京都大学に対する“外圧”について認識を深めることができた。	学生の能力や意欲についての認識が深まるとともに、部局を超えた共通性を確認できたのは有意義であったが、しかし、具体的な方策として決定的なものが見いだせないもどかしさが残った。	理事をはじめとする管理部門、経営側の考えをじかに聞くことができたから		2日目に配付された平竹先生のレポートは感動的であり、非常に参考になったが、しかしながら学部1年生から、博士課程の院生、さらにはPDまで、16年間におよぶあるいは10年間をこえる長い教育課程を通じて教育に従事する研究科の教員としては、1単位あたりの授業にはそれほど労力を投入できないうらみがある。
29	課題について認識できたのは良かった。しかし、外圧に対して京都大学の方針が定まっていなことが不満である。		外圧、内圧、多様な考え、いろいろなことについて理解できた。	教授会	
30		文系教員がトップ層の学生のみ発言している。逆にいえば、京大ミッション(自分のミッション)を自己の学問を継承してける研究者養成において多くの中間層の教育への感度が低い。	さまざまな考え方や教育の情報がえられたこと。京大が全体としておかれている状況について、理解が深まったこと。		大学の国際化、留学生の受け入れ、教育、送り出し、京大生を外に送り出す方法、こうしたテーマをしっかりとみずえた議論。
31	総長が学外に向けて発信されている大学のアウトラインがわかりやすかった。	各教職員が自身の置かれている立場に関して、日頃の思いを話すにはよい機会であった。学生に対する教育を考える場としては、テーマの焦点をしぼった方がよいように感じた。		大学の置かれている状況、部局の置かれている状況に関し、要点については、機会を作って伝えたい。会話ないしは要点レポート。	企画・準備ありがとうございました。全学的な状況を知る機会として、貴重な場と感じました。
32	現状と課題について広い視野での説明があり、理解が深まったが、焦点が浮かび上がらなかったテーマもあった。	部局により課題や問題意識、外部情勢等が異なるので共通するテーマに絞って議論する必要がある。	“国際化”の実質的意味、大学院予算定員について、研究所の課題、3-3制の具体化などについての詳細情報が得られた。	専攻の教員会議、教務委員会など	理学学部低学年の基礎科目教育について
33	学部・大学院教育と両方をキーワードとされているが、両者を並べることに無理があるのではないかと。両者の関係そのものが問われる現状で、あまりにも広いテーマになってしまっており、議論が難しくなっていると考えます。	テーマは“自学自習を根幹とし”であるが、理念では、“対話を根幹とし、自学自習を促す”とある。とすると“対話”をいかに実現し、それを自学自習にいかにつなげるかという視点に立たなければならぬことになる。この“対話”あるいは学生の対話力向上に関するアイデアがあまり聞かれなかった。	評価を受ける側と中期目標を設計する側の論理は理解できるが、そこに京都大学らしさが感じられない。		
34	短時間ではあったが、情報の共有、危機感の共有ができた。	討論Ⅰの内容に時間がかり過ぎて、討論Ⅱでの自由討論に時間をさけなかったのが残念だが、様々な立場での意見交換ができて有意義であった。	全体概要から分科会での教育現場についての詳細な討論まで、様々な立場での状況を知ることができた。	正式な会合ではないが、若手での話し合いをもつ予定です。また、時期中期計画策定WGのメンバーであるので、今回の討論内容を紹介し、教育面での中期計画の策定を行いたいと思います。	自らの大学教育に対する認識が変わったと思う。より多くの教員にこのようなシンポジウムに参加して頂きたいと思う。より良い教育を行うために様々な工夫をされている教員の方のお話が聞けて、たいへん参考になった。
35	大学としての方針を示す提案が必要であると思われる。過去のシンポが果たした役割(京都大学をこの様に変えた)の整理した報告が期待される。	議論の前提(境界条件)についての認識がバラバラである。もう少し、事前に議論の骨格を示す文書等が配布されてもよいのではないかと？あまりにRigidな課題設定は有害ですが・・・。	例年がない、実質的な情報共有の場であったと思います。特に全体討議。	部局の教育制度重要報告。	大学としての基本方針(案)を提示し、それに対する意見と討論を求める形態でのセッション(分科会)が企画されても良いのではないかと。「問題点の認識や情報の共有」が目的であることに異議はないが、シンポジウムでの討論が如何に具体的な対策に結びつける(つけられる)かの道筋を示す必要があると思われる。大学としてのイニシアティブが極めて見えにくい状況が続いている。※部局の中期目標・計画をベースに大学の目標・計画がどのような手順でとりまとめられるのか、情報を共有する必要があるようです。
36		議論は大して深まらなかった。	事情が知らされていないかった。		若い教員に積極的に参加させる必要がある。現状認識の機会が余りにも少ない。学部自治と云う名の下に、余りにも自治が強過ぎる。合理的な議論が可能な場を確保する必要がある。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
37	異なる分野から次期中計の策定を考える上で参考になった。評価の話はもう少し要領よく話して欲しい。多くの参加者は当惑したのではないか。	様々な部局の先生から多様な経験(e-learning、アジア・アフリカ研究)など聞くことができ、京大の戦略をもう一度検討することができた。	自己の担当分野のみならず、幅広い学内の方のお話を伺えて非常に参考となった。	教員会議、留学生担当教員連絡会など。	本年と異なる視点で高等教育の国際化と京都大学のポリシーについて話し合ってみたい。
38		参加人数が多すぎる。自己紹介だけで時間が過ぎ討論まで進まない。			
39	1日目・丁寧なお話だったが、初めて聞く話も多く少し難しかった。 2日目・後半の分科会報告者が時間配分を守らないことが気になった。そのため、まとめetcの部分も時間が不足し、司会者があやまっていたのが気の毒だった。	様々な学部・研究科の実情etc.を聞いて勉強になった。	京大の現状etc.について大所高所からの意見・説明が聞けたこと。	掛ではある。課には原議書を回す。	知らない話をたくさん聞いて、とても勉強になった。他部局の人と知り合いになれたこともよかった。事務職員のミッションということを忘れずに仕事をしていきたいと思った。
40	京大をとりまく全体状況についての理解が深められた。	同じ「自学自習」という用語について、きわめて多様な理解があることが痛感された。			より質素な施設での開催を考慮すべきではなからうか。
41	テーマについて知識がなかったのが役に立った。	活発で良かったです。	他学部の方々の考え方がわかった。このような機会はあまりないので。		日帰りで良いのではないかな？
42	教育負担に関する全学的問題を、本音の部分から知ることができてよかった。	難しい問題であるが、課題はよく共有できたし、国際交流の担当中核部に一般教職員の意見は伝わったのではないかと考える。		部局の教育ワークショップ(毎年年末に開催される)	来年の討議テーマ:「課題トピック」を提示したらいかがでしょうか。→1年間の間に学部のFD等で意見を収集することができる。(医学部の場合は、12月29日に年1回、教育集中討議を教授会で実施しているの、とり扱うことができます。現状ですと、全学FD→学部の人々の意識の乖離が大きいかと思います。)
43	「理念・ミッション」等、ミッションという言葉が頻出することに違和感を覚えました。キリスト教の宣教=未開・暗愚の啓蒙という含意を思い浮かべてしまうからだと思います。日本語で使命/責務/...等に言い換えられないのかなあ、と思いました。	多くの参加者の方々の教育に関与したいという強い希望・熱意・責任感をひしひしと感じました。この先、研究所と研究科の境や区別がだんだんあいまいになってゆくのだろうか、と思いました。両者ともに、教育と研究の責務を持ち、比重の置き方が多少違うという程度の差になるのかなあ。ならばその路線をもっと積極的、過激に進めて、全員が研究科所属・教育担当を本務とし、サバティカル制度を充実して、5年教育を頑張ったら、2年間の研究専念期間として研究を本務とするとか。それが液状化現象をもたらして、グチャグチャ不安定になるのか、教育・研究の両面における生産的なダイナミズムを生み出すかは正直に言って半々、危惧と希望が相半ばしています。	研究所の個別具体的な問題、状況については知っていましたが、京大の教育の全体については、初めて概要を聞きましたから。	所長に概要の報告をしますが、その後の取扱いについては不明です。	ホテルが立派、食事が豪勢でびっくり。圧倒されました。教育の改善に関して、執行部が、それだけの金をかけて何とかしようとしているのだろうかと思いました。その費用分の効果、成果があったのか、(どれくらい)全体としては分かりませんが、個人的には、他の部局の様子や教育の現状が分かったので、良かったな、丸一日缶詰になった甲斐があったと思いました。とりわけ平竹先生の熱弁に感銘を受けました。ポケゼミがそれほど教員の側にとって得るところが大きいならば、来年のテーマとして、全教員によるポケゼミの開講義務化(4~5年に1回)という挑発的なテーマを取り上げたら良いのでは。
44	大変役に立ちました。大学教育に理解がずいぶん深まった。	他研究所・センターの現状が、問題についての理解が深まって良かった。			霊長類研究所から毎年1名のみ(系会議の世話人)が代表で参加することになっているが、来年から2~3人でも参加できる様になったら良いと思います。私自身にとって、大変参考になりましたので、より多くの他の所員にも参加の機会があたえられたらな...と思うようになりました。リピーターになりたいです。
45		面白かったが、人数を絞った方がもっと面白くなるだろう。マイクが必要ないサイズ・知識を共有するための時間が必要			淡路でやる必要はない。研究科長(部局長)、今回のテーマであれば自己点検・評価委員長が出席すべきだ。Power Pointで示すだけでは後に残らない。レクリエーションの時間が必要。「時間がおしてますので...」が多すぎる。時間をたっぷりとか、やることを減らすべきだ。2人部屋ではなく、もっと多人数の部屋にした方がよい。テーマ:・授業のノウハウ—こんな授業やってます— ・学生と教員—つかずはなれず— ・伝説の授業—語りつがれる名講義— ・学問とお勉強—何がどうちがう?何が同じ?— ・自学自習を学習する—自学自習能力の獲得—
46					
47	京都大学の置かれている現状(外圧等)が理解でき、今後の方向を真剣に考える必要がわかった。	いろいろな立場の意見を聞くことができ、参考になった。	大学を評価する側の構造がわかった。	(教授間ではあるのかもしれない)	教官側の意見は聞けたが、学生側(学生の実態、本音)の考えを聞ける場が必要ではないか。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
48	京大の教育について、ほぼ全部局から教員が集まり、全体を見渡せる機会は他にはない。部局間の先生方の考え方の違い、共通した悩み、執行部の考え方、京大をとりまく政治的な動きなど、多面的に京大の教育の現状を知り、客観的に問題点を知る大変よい機会となった。	京大にこれほど多くの研究所とセンターがあり、それぞれの置かれている状況も様々であることにまず驚いた。当初、学部との先生方と切り離して研究所・センターの教員のみで議論する分科会の構成に違和感をもっていたが、実際に討論してみると、結果的に無用な対立を生まず、本音で好きなことを言える形態はかえってよかったのではないかと思っている。	全体会議についての感想で述べたとおり。	まずは、所長との個人的な話し合いが必要。報告を兼ねていくつかの提案は可能。	こうした全学的なシンポジウムは次期執行部にも引き継いでいただきたい。「内圧」のみならず「外圧」という客観的な事実についても現状認識する場が必要。メールや配付物などでこのような生々しい情報を伝えるのは不可能。来年の討議テーマ候補 ・研究所・センターの教育組織としての役割・機能を規定する全学的WGの立ち上げ。 ・自学自習の京大教育を真に実現するための具体的な方策 →1回生に対する導入教育の充実(⇒自学自習の理念と方法をしっかり伝える。初期教育が決定的に重要との認識) ・自学自習のサイクルをまわすための支援(boost up force) ・自学自習のサイクルを回し続けるための支援(house-keeping force) ・「自学自習の京大教育」の価値を内外に知らしめ、具体的な評価に結びつける工夫、方策、政治的援助。 →HPでの情報発信(例:学生の生の声を多数掲載する。自由記述) ・数字にはあられもない教育の価値を具体的にどう説明するのか?(企画部長黒川氏のコメントは非常に重要。) ・自学自習の価値に目覚めた学生を中等教育界に派遣。中高生に京大生が語りかける。(=真の意味の高大連携。社会貢献)
49	プレゼンテーションによる方向付けと情報共有が良かった。	大きなテーマであり、プレゼンターも多く、現状の問題点などを知ることはよくできた。一方で、実現への方策や課題の解決策の具体的な掘り下げには時間が足りなかった。	各方面、分野の方々の考えや、現状を知ることができた。	meeting	分科会報告の時間が足りない状況だった。(各発表者の消化不良)
50		生の声が聴くことができて有意義であった。		部内ミーティングで。	
51	京都大学全体のなかでの研究所・センターの問題についてよい勉強になった。	・多様な研究所が存在し、多様な問題を抱えていることが良く理解できた。 ・研究科と研究所教員の関係は、研究科の都合で決められており、研究科によって全く異なる。		教授会	全体討論の発言者がかたよっている?
52	限られた時間の中でorganizationがよくできていた。	背景知識にばらつきがあり、議論が深まらなかった。	理事等の要人から鳥瞰図が得られた。	教員会議	・人数に比して時間が足りない。 ・セッション間・後の時間の有効利用 テーマ ・卒業要件の見直し-単位をとりまく云々は今年も出た ・卒業生のQuality Control
53	多くの部局の多様性が見えてよかったと思う。	分科会ではもう少し具体的なアイデアなどが話し合えればよかったと思う。やや抽象的であった。	大学に所属して1年半であるため、大学全体のことに関する認識が深まった。	講座での会議など。	
54	1人で長々とマクシタテル人物が対話の機会を減らしたのは残念。しかし、全体としては、以前の集会よりはるかによくなった。	理念の高さに導かれた具体的かつユニークな課題の提示をめぐって、建設的な意見交換が展開したことに感動した。		教授会をはじめ、将来の企画にかかわる集会で。	・規模を縮小して年2回 ・テーマをもう少し明確にして、執行部が指名する人々を全学的にうまく集める。もちろん、自発参加者も拒まずに。 ・事務職の中で、京大への思いが強い人にも継続的に参加してもらおう。(短期異動、無難志向の強い人は避ける。)
55	京大のおかれている現状にdebriefingしていただけて参考になった。	京大の教育の根幹について、しっかりと考えることができた。また、教育の方略について他学部の先生方のご意見から参考になる内容が得られた。	普段は送られてくる資料に目を通すだけで、しっかりと考察することがなかった。また、他の部局の教職員から意見を聞くことも大きかった。	教育関係の委員会(例:カリキュラム委員会)	・非常に重要なシンポジウムであった。しかし、キーパーソンである学科長、副学科長、研究所長などが全員参加していないのはおかしいと思う。 ・学生・院生・外部者の代表を参加させるのはどうか。 ・相部屋は夜の作業、就寝に大変気をつかう。せめて、一定の自己負担もOKなので、個室の選択肢が欲しい。 ・分科会が1グループ30数名は多い。10名くらいがいいのでは。 ・もっと教務・学生支援室などの職員も参加すればいい。
56	議論が拡散気味であった。致し方ないだろうが。	各自が予備知識、準備なく出席し、(初めての参加者も多く)単なる感想のレベルにとどまっていたのは残念であった。	中期計画の方針の変更などよく分かった。		「自由の学風」といわゆる「部局自治」について考える必要がある。
57	「外圧」の状況について良く分かった。総長には、もっと京大の将来像について明確なビジョンを示してほしい。	理系教育に関するさまざまな立場からの率直な意見が聞けて参考になった。	現状認識など、部局ごとの温度差が大きいことがわかった。		シンポジウムそのものについては有意義だと思うが、お金と時間を余計に使っていると感じる。時計台ホール等を利用するのでは十分ではないか。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
58	京大の現状と対策がよくわかったが、全体的に危機意識が希薄だったように思う。また、京大を内部からでなく外部一般に京大をどう魅力的に演出していく視点が欠けているように思う。自由の学風、自学自習ではアピールに欠ける。	多言語教育環境、KUINEPの充実化の方向で全学的理解を得ようと努力されている事は理解できたが、教育の活性化と具体的にどう結びつくのかがよくわからなかった。	第2次中期計画・中期目標の作成スケジュールなど。	研究科会議で報告し、本学とそれとをとりまく状況についての認識を深め、今後の部局対応を考える。	大変有意義であったが、アレンジがゆき届きすぎて、自由な意見が出にくい雰囲気はあったと思う。個別の学内委員会ではないので、具体的な京大の施策を決める場ではないが、制度的制限にとらわれずに、もっと自由な発想の展開が必要と思われる。
59		英語教育に余り関心がない方がおられたのが意外。一度も発言されなかった方がおられたのが残念。	すでに知っていたことがほとんど。	関心を共有する先生方と話し合う予定。	2日間の時間をもっと一杯使ってもよいのではないかな。
60		話が散りすぎていたように思われます。	今までがあまりにも無知ゆえ		意識の向上には成功しているように思われます。しかし同じことが、お金を使わずもって短時間で出来るのではないのでしょうか。
61	無責任な言いばなしに終始してないだけでも意義があると思います。	認識の一致と不一致点があきらかとなった点、問題点が絞れてきた点は成果で、全学共通教育でなく全学教育という括りでの最初の分科会としてよかったと思います。			
62	発言が長すぎる質問者は中断するべき。要点を述べて欲しい(5分以上は非常識)	中期目標のような外形的な議論と自学自習のように、講義の枠を越えたものとはもともと議論がかみあわないと思う。外形的なものは、本質にあわせて事務的に調整すべきもの。先に、外形的なものがあるのはおかしい。	中期目標・計画についてよく知ることができたため。		「教員の講義能力を向上させる研修会を作り、自主的に参加するようにすること」について教員の講義能力の向上について(自己研鑽的に)強制ではなく
63		各所属の間の認識の差を痛感した。			教員の意識を変革する意味で有意義と考えます。ただ、意思決定プロセスが見えないことが多く、大きなギャップを感じる。
64	「第二期中期目標策定」という具体的目標の割りに、分科会での議論がもっと包括的な内容ばかりで、実際的な内容は乏しかった。	個々には実際の授業でも使えそうなテクニックの話はあり、大変参考になったが、結論的には現状追認で終わり、新しいものは出なかった。			中期目標の策定というような、数年程度のスパンに関わる内容の討議には、こういった大人数での集まりは役に立たないと思う。
65	特になし	自己紹介が長すぎた。		教授会など	ある講演者について。へらへらと笑いながらしやべるのはよくない。こちらはまじめに考えているのだから、不謹慎である。非常にふゆかいであった。注意して欲しい。
66	“外圧”のきびしさを痛感した。	研究所・センターごとに様々な事情があることを知った。			
67	現在の京大の教育が抱える問題点やそれに対する対応、改善の試み等、全体像を把握することができて有意義だった。	1,2回生向けの英語教育が大きく改善されていることを分科会で初めて知った。たいへん興味深い内容の分科会だった。	中期目標について、言葉では聞いたことがあったが、内容については何も知らなかった。その具体的な内容や大学としての考え方等を知ることができ、認識が深まったと思う。		
68		自学自習で話し合っただけで何が得られるのか疑問(個々のケースによりすぎると思います。)4-2、3-3については論点がはっきりしてよい。			「朝までテレビ」のような感じを受けます。知識を共有するため、いくつかの話題に手をあげさせて統計をとってもよいのではないかと思います。
69	北村隆行先生の説明は適格で、たいへんわかりやすかったです。	研究所・センターのかかえている問題点を洗い出すのには大変有効であったと思います。			本シンポジウムは毎年一部の教員が参加するだけであるが、もっと多数の教員に現在の大学が置かれている状況を理解してもらうような機会があればいいのだが・・・
70	時間を考えると仕方ないことかもしれませんが、全体テーマの具体像を描くに至るまでのイメージがもてなかったように思います。	他のセンター・研究所の現状を知ることができたのは収穫だったと思います。	教育現場の現状に対する問題意識は持っていますし、今回関連する発見もあったと思いますが、中期目標・中期計画にどのように反映させていけるのかについて明確なイメージを持ってに至らなかったように思います。	教員ミーティング	・「他大学の現状との比較からの本学の現状把握と将来構想」→学内の情報共有ももちろん必要ですが、他大学との比較の上での議論もあってよいと思います。 ・会場は学内でよいと思います。(経費・往復の時間のオーバーヘッド制限のため) ・音声によるコミュニケーションは多重化できません。多数の意見を場て共有するために別のチャンネルでのコミュニケーション手段が用意されてもよいのではないかと思います。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
71	多種多様な意見が出されているが、それを収束させる方向に進んでいないように感じとれた。	各部署の現状について情報収集できたことが良かった。	今まで知らない状況について多少は認識できたと思える。		
72	中期目標計画や大学評価などの外部圧力に対し、「京大らしさ」を維持していくことの必要性について理解できた。	学生の質が低下したというより、変化したと考えるべきなのかなと感じた。その変化に対応できるような教育を行う必要があると感じた。具体的な方策もいくつか出されたので、今後の教育の参考になった。	自学自習という理念の維持のためには、それを教員がうまくサポートしなければならないこと、また全学的に取り組まなくてはならないことが理解できた。また、英語教育に関する大きな変革があることを知ることができた。		
73	評価の問題が重要で、急を要することはわかるが、実際の分科会のテーマとのリンクを考えると、評価・中期目標・計画の問題点に時間を割きすぎたのではないのか。	全体的に多様な議論が出て、興味深かったが、10年後に授業の30%英語化、10%英語以外外国語化の具体的な実現行程に関する議論が少なかった。	中期目標・計画の現状等についての認識、教員の教育に関する考え方等の理解が深まった。	研究科教授会、国際交流委員会	
74		さまざまな立場、観点からの見方、考え方を知ることができて良かった。		専攻長会議、教授会等	
75		発言が特定の人に片寄っている。分科会に先立ち、あらかじめ参加者の意見をまとめておけば、議長も多くの意見を吸い上げることができると思う。	「評価」についてひととりの説明を聞くことができた。		エリート教育について
76	研究科・研究所・センター間のみならず分野間で認識がかなり異なると感じた。		様々な研究科他の人の意見・現状が聞けて、又初めて聞く内容もあり、よい面が多かった。情報が共有できるのがよいのではないかな？		
77	ある分野の研究も人の成長曲線と類似の過程を辿るのは避けられないであろう。すなわち、萌芽期には未だ成果は外に見えず、また成熟期は殆どの成果は出尽くして、体系化は進むが新たな研究成果は減る。成果が花々しく見える時期は両者の間の急成長期である。しかし、知の創造・継承の上で萌芽期・成熟期も非常に重要なものは明らかである。大学はいたずらに外圧に同期して揺られるだけでなく、これらの時期を確りケアしてゆく上での京大としての見識が求められよう。	教育の議論は表向きでも、要は研究のための学生確保の話である。研究所、研究科を問わず、学生が確保できなければ研究が出来ないのは明らかなのであるから、お互いに譲り合うべきである。現状は、最高学府といわれる割には、低レベルの争いが多い。	本学を取り巻く状況と言うより、本学内の良く言えば「多様」、別の言い方ではまとまりのない状況が認識できた。理系の自分から見ると文系の先生方の議論はお公家さんの話のように聞こえるが、多分それが「文化」の源泉なのである。大学全体として共通の目標・理念を共有することは永遠に不可能であろうが、今回のシンポジウムのような機会は互いの違いを理解・受容する上で有効であろう。		教育は本質的に強制性を持つべきだと考える。大半の学生にとって多くの学問分野への興味は自発的に起きるのではなく、単位を取るための必死の学習の中で発見される。如何に授業を工夫しても、本質的に難しいものはやさしく理解できるようにはならない。京大卒業生としてブランドを付けて社会に出たいのなら、それだけの努力は必要なのだから、甘やかし過ぎてはいけない。
78	第Ⅱ期中期目標・計画について討論する分科会をつくって、そこから報告をあげてもらってもよかったのではないのでしょうか。	提起と討論は非常に良かった。そこで得られた方向性についての合意も高く評価できるが、その実施にはさまざまな困難が予想される。		専攻長会議、教授会	外圧についての議論がなされましたが、現在の日本全体のシステム及び教育システムがどのように変容しているのかを分析・討論した上で、京大がどのようにその中で自己規定し、展開していくべきなのか、大きな戦略を論じるような部分もあっていいように思います。テーマに「大学院教育」が入っていますが、全学共通科目と学部教育が主で、大学院はあまり論じられていないようでした。
79	中期計画に関する危機感など、全体的な問題提起は意義が大いにあったが、テーマが多く、議論が散漫になる傾向がある。	面白い企画である。今後、全学を巻き込むための工夫をして欲しい。		教員会議、その他のワーキンググループ	

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
80	各学部において、多様な考え方があることがわかった。ただ、外部は、京大としてみていて、その多様性は理解していない。我々は多様性を発信する必要があるのではないか。外圧に対する抵抗にもならないか。	各学部の状況が理解できた。		但し、公的な場ではないので、その意味では「ない」と答えるべきかも知れない。	むしろ、京大として外部への発信方法が具体的にあるべきではないか。
81	何か短い議定のようなものをかかげて、部局へ問いかける。或はwebなどで外部へ発信する形はとれないだろうか？	先行して話題や背景について説明が用意されており、わかり易かった。話し合いについては、個々の自問自答に終始している気味はある。しかし、テーマに深くかかわる方々が情報の発信や自省を試みる機会としては成功していると感じました。KUINEPを一般科目へ浸透させるアイデアは実現して欲しいと思います。	日常、接する機会がない。		分科会5では、研究者レベルの留学ネットワークの改善や運営、学内外への周知、広報についてより話し合っていたらはどうでしょう。
82	大きな争点や課題のない中で、端境期であるように感じました。あらしの前の静けさでないことを祈ります。	自学自習という理念と次期中期目標の設定という当面の課題の間の距離が大きくて、学部、共通教育における自学自習というように絞り込んだ方がよかったですと思います。			
83	文科省、あるいは総務省から何を要求されているか、どのような対応をしなければいけないかを明確にすることができました。ただ、やはり外圧をただ受け入れ対応を行うのではなく、京大の対応として抵抗すべきところはするという対応は重要だと思いました。	外圧の中で、みなさんが研究科を超えて「自学自習」という京大の哲学をやはりベースとして大切にしたいという考えを持っていることに安心できました。	普段、このような機会があまりに少ない為、そもそも自身の認識不足の状態が改善されたと言えます。		シンポジウム自体は有意義であったと思います。ただ、なぜ、淡路島まで来て行わなければならないかがわかりません。かかるコストを考えると時計台で年数回開催し、参加されていない先生方にも参加できる機会を増やしてあげるのが良いのではないかと思います。
84	問題提示は今おかれている大学の立場が理解できた。	学部(分野)の教育内容、体制のちがいで、話の方向性がむずかしい！！	中期目標を議論していて現状を知ることができました。		1日目の夕食後の分科会討論Ⅱは、夕食後のこともあり、活発にはなりにくかった。討論Ⅰの時間を長くすることで、Ⅱはあくす時間配分の方が良いと思う。
85	現状に関する問題認識を適切に指摘されており、非常にわかりやすかった。	率直に現状認識を各先生の経験をもとに述べあう機会を得て、有意義だったと思います。司会の先生のとりまとめも見事でした。	本学の根本的な問題についての議論を聞くことが出来、有意義であった。		
86					
87	研究科、独立研究科、研究所・センターの各々を大学としてどう捉えているのか、それによって大学の特色をいかに出そうとしているのかと言ったBasicな議論が出来ていない。	研究所と研究科の関係を大学が、大学としてどう考えているのか、現執行部の意見表明があっても良かったと思われる。	ある程度は既知にしていたことであるが、別の視点からの意見が聞けたことは良かった。	研究所内会議での報告時に関連した議論を予定している。	
88	研究所に所属していることもあり、教育についてこのように議論することはほとんどなく非常に新鮮でした。認識不足の部分も多々あり、改めて考えさせられることが多くありました。	他の研究所がどのように学部教育にかかわっているか、ほとんど知らなかったのが、大変勉強になりました。特に私の周辺には研究優先で学部教育には消極的な意見の人が多くいて、教えたいのに教えさせてもらえないという事実があることに驚かされました。	くり返しになりますが、これまで研究所及びせいぜい関係学部の状況以外はほとんど知りませんでした。全学的な状況、考え等に触れ、認識を新たにしたいところが多くありました。	所員会議(月1回全所員の参加による。)	研究所がどのように教育に関わっていくかは、非常に難しく重要な問題であると思います。制度上の問題も含めて今後も引き続き議論して行って欲しいと思います。
89	京都大学の教育とか、大学運営といった意識を持ったり議論することはなかったので、何もかも「へえ～」という感じでした。中期目標は何なのか具体的には理解できておりません。	現場のいろいろの経験や工夫がきけて刺激になりましたし、教育者という社会的立場にあり、責任を感じました。			教育シンポジウムというより、大学運営側の問題(外圧への対処)をどうしたらよいかという、といかけのシンポジウムであったという印象が強く残りました。
90	いろいろな部局の方々の本音を聞くことができたのは幸いだった。	英語教育の改善が成功したという話に終始したという印象を受けた。	外圧と内圧というキーワードによって、京都大学を取り囲む厳しい状況がよく理解できたと思う。		・今年初めて参加したが、部局を代表する資格もなく、ただ聞くだけだった。むしろ教員全体が参加するようにはすべきではないか。(ちょうど健康診断のように。) ・文系と理系(文系では文と法、経)との違いが大きすぎて議論がかみ合わない印象を持った。工夫ができるものであれば工夫してみるべきではないか。



整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
91	自学自習(京大に固有の教育法)に関する議論が広く展開された点、英語教育が軌道に乗った点、教育に関する部局間の連携が悪い点、教育シンポジウムの意義(成果や効果)などが印象に残った。	討論はやや低調だった。研究指導に従事している方が多かったのだと思う。教育(自学自習)に関する問題点は共通に議論したが、解決法を得るには遠かった。		学事会議(総人)と研究科会議(人環)で、機会を作って、問題点を手短かに紹介している。	・教育における卒論(4年生)の意味と活用 ・学部教育と大学院教育 ・TAの活用法
92	教育に関する新しい問題を取りあえず表面的にオリエンテーション的に認知した。その一方で各先生方の意見を(自らの知識、経験不足から)十分に肌で感じることが出来なかった点は、今後の自分の教育に関する意識を高めるモチベーションとして残ると思うし、また、そのようにしたい。	学生教育に係る様々な問題(自らが気付いていた点、全く認知していなかった点も含めて)を把握できるよい機会でした。その一方で各部局での違い、感じ方、今後の異なった希望の方向性を大学全体として調整して全体方針としてまとめていくことが非常に難しい作業であることを認識した。	第1回目の参加なのでその入り口をかいま見ることができた。自分の意識改善にも役立つと思うので、若い先生方を中心にこのようなシンポジウムを開き、しっかり教員を教育すべきではないのかと思った。		
93	良く準備された内容で、取り巻く状況把握に役立った。	部局横断の様々な意見を聞くことができ、今後の参考になった。		関連専攻内設置の教務ワーキンググループにおいて。	
94	文科系における問題意識、英語教育における問題意識などの話が聞けて、大変参考になった。それらの分科会とも交流する機会があればもっと良かったと思う。	外圧に対するアクションとしての方便も重要である一方で、外圧にホンロウされず、京大の自学自習を保ちつつも時代に適応した方策を考えて変化させていく意識、意欲を持つ良い機会になりました。	広く他研究分野教員の意見・見解、また、外圧に直接対応している方々の現状認識を直接伺うことができた。		理系分野では、全国的な大学院化によって全国での大学院定数が増加し、定員数を充足する必要から、大学院学生のレベル低下が進行している。院生獲得とレベル維持をどう両立させるかが、今後の研究レベルを維持・発展させる上で不可欠と思う。その様なテーマはあり得るでしょうか？
95	基本認識の共有には、資料の事前配付を増やして議論の時間を増やしては？	特に。(2(2)に同じ。)	全学共通での英語教育の成果について。自学自習、中位レベルへの対応について。	学生ケアの場面で担当教員と。	・前ページ記載事項 ・大学評価側人員も招待しては？
96	方向が理解できた。戻ってグループで改革を考えたい。	英語教育が変わっていることを忙しながら知らなかった。	大学の置かれている状況が理解できた。	学科またはグループ関係で今回の情報を伝え、対応を討議したい。	分科会に出席してはじめて討論内容に気がついた。参加前にある程度考えておく、予習できればもっと充実した討論ができた。
97		英語教育の改善に大いに期待します。	外圧に関して、大学の中身では耐えられようと思うので、より微細な点検への討議が必要と思いました。	教務委、専攻教授会、研究室etc.	
98	何とも「京大の理念・理想」と「文科省の指導」をどうするか。生き残る。この発想がおかしい。	分科会で出された基本的争点(大学内の差別、時間的要素(遠隔地)、それぞれの部局のミッションと教育内容の総合的課題など)を資料として準備し、関係者を含む分科会とする。	学部・研究科と研究所・センターの教員の中に依然として差別的関係が根強く残っていることに暗然たる思いである。(協力講座の地位)。この改善なくして教育の全学的統合はありえないのではないか。		参加者に対してアンケートを実施し、議論に必要な資料は事前に取得すべきと思う。
99	時間が短すぎて、徹底討論、質問ができない。2日間丸々にしましょう。報告・プレゼンを途中で切るのも残念。時間制約があるなら、本当に参加したい人のみの参加でよいのでは？	「英語教育が改善された」という結論について、討論の結果について部局に報告を上げたところ、現実と違うのでは？という意見が部局内から返された。＝納得してもらえていない。現場の感想と全く食いちがっている。	多数の先生方と話す機会ができて本当に良かった。頭の中が整理され、さらにモチベーションが高まった。	委員会を利用して何とか話すつもりです。教務委員会、全学共通教育委員会、国際交流委員会。	・尾池総長のプレゼンに感銘を受けた。「教育」の原点を感じました！(「芸術学部の創設」というのがあり、時間の都合でご説明はなかったですが、私もかねがね考えているテーマであり、学部と言わないまでも、教養科目としての学際科目、芸術科目の充実の可能性について話し合わせていただきたい。) ・来年は、事前に参加者から「討論したいテーマ」を募集して参考にしよう？ ・国際交流について、大いに疑問・聞きたかった質問が残りました。→このテーマだけの会議を設けてください。(第4と第5部会を分けてほしくなかったです！両方出たかったです！) ・「中期計画」「評価」などの運営的な問題(外圧問題)と、「教育」そのもののあり方の問題(内圧問題)とを分けて行い、後でそれをすり合わせる形式にしたらどうか？(焦点がボヤける)(事務の問題をここで言ってもしかたない)
100	形式的でない率直な意見を聞けて、大変参考となった。大学を取り巻く環境について、理解が深まった。	他学科の先生方が、当方と比較して、英語教育に対してどういった意見の相違をもたれているのか、理解することができた。また、CALL等、英語教育の新しい取り組みを、理念と共に知ることができ、大変勉強になった。	大学評価の詳細と現状の深さについて理解が深まった。教員として、教育について考える良い機会になった。	教室会議等で今回得られた知識を報告し、議論したい。	
101	話題が拡散してまとまりに少し欠けていた。でも、学内の重要な問題点がわかり参考になった。	KUINEPの問題点について何度も議論されてきたが何も解決されていない。執行部の決断を待ちたい。	学部教育との関連において、研究所への予算配分、面積など知らない話が聞けた。	(部局長レベルでしてほしい)	学部教育(全共科目)のあり方に絞って、共通のテーマで議論できる分科会を設けてほしい。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
102			他部局の先生方とface to face で意見交換できたから。		
103		活発な議論があり、今後の教育の参考になった。	特に、評価に関する全体像がよくわかった。		
104	官学の関係にしばられており、広く民間(企業)からの視点(大学の役割、大学への期待)が抜け落ちている。	活発な議論が行ってよかった。英語教育の現状に対する認識が深まった。			シンポジウムの外部評価を行ってはどうか。大学内にとどまらず、広く社会の意見を聞くことが重要ではないか。
105	多少なりとも京大らしさをアピールする雰囲気が出てきた感がある。このような流れの共有は大切だと思う。	進行がスムーズでいいディスカッションだった。また、まとめ(全体会での報告)もよかった。			
106	時宜に合った良いテーマ設定で議論されたと思います。	いろいろ思いましたが、学部の先生の生の声が聞けてよかったです。			
107		前半の事例報告で具体的な話が聞けてよかった。その反面、30%英語化をどのように実現するかについての議論時間が短かったと思う。	CALLシステムについて初めて知った。前回参加したとき(4年前?)と比べて、現状認識が楽観的な印象があった。教員側の自己防衛本能によるものか?		
108					
109	学部の教育にタッチしていない(できない)教員にとっては、あまり有意義とはいえないかもしれない。	・学部教育も大事だが、少しは大学院教育の話もすべきだった。 ・独立研究科と学部を担当する研究科との相反する利害がクリアになった。	京大出身でなくて、学部教育にタッチしていないと、初めて聞く話ばかりだった。		教育専任教員の任用について。
110		文系の就職(院生)について、どこでも危機的であるはずなのに、ほとんどそういった話が出なかった。個々の問題なのかかもしれないが、共通の問題であり、なんらかの手を打つことを考えたい。文系は決して牧歌的などではない。	理系と文系の認識に断絶がある。「院生の自学自習」など文系には当然である。文系の危機は大学院生の就職が絶望的で、淘汰寸前であることである。数千万の実験が必要な理系とは異なり、年間百万ほどの奨学金であっても文系の院生を救済することはできる。優秀で業績があっても行くすべのない文系の院生に目を向けて、大学として守っていただきたい。	教授会にて報告。	
111	京都大学が抱えている問題がわかり、今後どのような対策をとらなければならないか、前向きに検討されたことがよかった。	KUINEPの現状について知らなかったもので、知るよい機会になった。学部教育を充実させるためには、教員の質の向上が不可欠なため、若手教員の留学研修制度などを充実させてもらいたい。	他学部の先生と交流できるよい機会になりました。		もう少しフリータイムを設けてほしい。フリータイムがないならば、わざわざ淡路島まで来ることがない。時計台ホールで行うので充分であると思います。
112	分かりやすく、よかったです。	他学部の状況や考えをきけて参考になりました。19:30~の討議はやめて、15:00~18:00まで討議、その後夕食、その後フリーディスカッションという流れがよいと思いました。			パスの駐車場所に三ノ宮、大阪も加えてほしいです。淡路の観光もできるよう、時間的余裕がもう少しあるといいと思いました。2日目の朝の受付は8:30スタートでいいと思いました。
113	外から要求される評価基準だけでなく、京大独自の評価基準(例えば、自学自習に関して)を大学として作る必要があると感じました。	人数を半分に割って、ディスカッションを活発にした方がよいと感じた。全員で現状を話してゆくことも必要だが、40人は多すぎて、2時間45分を費やしてしまった。	とくに同部屋の人との交流や食事の時の会話から本音が伺えた。	パーソナルなレベルで。	・指導教員がセンター・研究所の先生の場合、どのように感じているかなどの意見を吸い上げる。学生をこの会議に入れてください! 大きな発展、思いもよらぬ発展、展開が期待されます。学生の本音を教員は聞く必要があると思います。 ・気軽な服装でお越し下さいとアナウンスしたのだから、司会の方も軽装でやって頂けるとうれしい! ・高校の教師、予備校の教師にも来て頂いて、京都大学が他大学に比べてどのように見えるのかについて語って頂くのも良いと思う。入試で京大を受けさせるよりも、阪大、東大というのが常識になっている学部もある。これまで内部教員だけで行われていた会議に、外部の方々が参加することで発展を見る。
114	少し発散気味か、楽観論が多いのが気になる。	英語と英語教育に関する理解と認識のブレが大きいように感じる。	英語教育の改善の取組がよく認識できた。		
115					財務と教育―標準運営金交付金はどのように教育に使われているか。

整理番号	2-(2)全体会議についての感想	3-(3)参加した分科会についての感想	4-(1)認識が深まったかどうか	4-(2)話し合う機会	4-(3)自由意見
116		自学自習ができていける／できなくなっている。いずれにせよもし調査などがあるならばそれを資料として示してもらわないと、結局参加者各人の極めて個人的な印象論に終始してしまい、議論が深まらない。	「外圧」が厳しいという側面は理解できたが、内部の教育状況は各学部や学科などによりかなり性格が異なるようであり、文系だけでもひとくくりにして認識するのは困難である。		中期目標をとりあげるのであれば、その中で具体的に議論のテーマとする項目を実際に書いた人に登場してもらって、前回の中期目標を書いた時点で何をねらい、根拠として目標設定をしたのか、ということをもっと説明してもらいたい。いきなりこういうことが書かれてあって、うまくいっていない、という所から議論を始めるのは、あまりにも責任転嫁的であり、むなし。
117	現在の問題が分かり有益であった。	英語教育の改善の方向が分かって有益であった。		学部教務委員会、専攻の教務委員会など。	
118	ポイントを絞りにくくならず、印象が定まらない。	問題点が明確でなく、焦点の定まらない議論になった。	中期計画・評価等の外的要因で教育・研究が歪められていく構造がわかった。		部屋は狭くてもよいのでシングルにしてほしい。
119	11回目ということですが、これまでの議論の積み重ねを感じることができなかった。			フリーディスカッションであるにしても、教授会における討議内容の紹介や研究科教務委員会におけるディスカッション、というようなシステムをルール化するべき。これだけの金と時間と人を使って、その成果を伝える方策がないのはもったいない。	全体会議の各分科会報告で、私が分科会で発言した内容が「学生の現状に対する楽観論」として紹介されていた。私が言いたかったことは「学生の現状は深刻だ」(しかし、問題は、学生にのみあらわれているものではなく、教育、大学のシステム、社会のありようetc.の総合的な結果としてあらわれているもの)「かかる視点にたつことによってこそ、いろいろな領域でいろいろな手がうちうる」(これを「学生の現状への絶望」という論点にしぼってしまうのは、過度の単純化であり、危機感のカラマワリでしかない)ということ。ゆえに決して「学生の現状を楽観しているわけではない」。一討議、視野が単純すぎるのではないかと、むしろここにこそ深刻さを感じた。議論のしかたが問題の複雑さに対応できていない。
120	始めて聞くことが多く参考になった。	司会のまとめ方や議論の進め方がよかった。	様々な角度からの意見や感想が参考になった。		泊りがけの形式に参加するまでは疑問があったが、実際に参加してみるとなかなか良いと感じた。
121		京大での英語教育の状況がよくわかってよかった。			
122	危機状況は伝わりました。周知の面もありましたが。	自学自習に関する従来の議論のメニューがやはり出揃ったと思われました。処方箋の議論をもう少し深めることもできたのではないかと思います。	外圧のメニューの情報を得た。		
123	問題点が良く理解できた。	教育に重点があるため、研究所が置かれている特殊な問題点の議論が少ないと思った。	日常の研究や業務に追われて知らないことが多かったが、今回のシンポに参加してよく理解できた。	ほとんど話し合う機会がなかった。個々の教授と話し合うときに時々話題に上がる程度。	大学院で応用研究、出口が重視される圧力下で、基礎学力をつけさせる教育。
124		院生や研究員や若い助教がどれだけ研究所の先生が研究「だけ」をしたいがために雑用を押しつけられていることを踏まえられていない議論に不満を感じた。	結局何もかわりそうにないから。	所員会議	
125	発表、報告する先生は時間を守るべき。	所属分野の考え方や文化が異なり、戸惑いが大きかった。			時計台記念館を使えば、一日で十分時間が足りる。二日間もかける必要はない。
126	方向性は理解できる。	外圧論については情報不足であったが、内部のスタンスのぶれが大きいことも問題であることが分かる。共通認識の再確認ができたことは良かった。	学内の認識の差と手法の乱れ(差異)が目立った。	教授会、教室会議等	京大のあるべき姿が国の方向と異なることが、教員として認識不足であった。自学自習は現場では成立していないことがわからない状況について憂慮します。「教育評価のあり方」をテーマとして取り入れて頂きたい。
127	現状は話し合われたが、目標はほぼ無視。	目的を持たず自分のことばかり述べる発言が多く、進歩はないに等しい。	時代に対して危機感を持つ一人として、それを感じていない、よって対策も考えない同僚の数に驚き、絶望せぬばかり。外圧についての議論は皆無。	来週の教員会議に報告	(何々に対して)「どう対応するか」という問題に答えるようセッションの目的と指導を定められたらよいが… 或いは、2・3の選択案を討議する? 今回のセッションはデータを出し合うことに終わった感じでしたが、前もって、データと課題を提示して、皆の知恵を引き出したいものです。

8. 参加者名簿(分科会別)

第1分科会(1階 レセプションホールA)

所属	職名	氏名	備考
	理事	東山 結久	
	理事	西村 周三	担当者
人間・環境学研究科	准教授	河崎 靖	
人間・環境学研究科	教授	道旗 泰三	
人間・環境学研究科	教授	松浦 茂	
人間・環境学研究科	教授	稲垣 直樹	
人間・環境学研究科	教授	山田 誠	
人間・環境学研究科	准教授	道坂 昭廣	
人間・環境学研究科	准教授	浅野 耕太	
文学研究科	教授	氣多 雅子	
文学研究科	教授	永井 和	
文学研究科	教授	水谷 雅彦	
文学研究科	准教授	大槻 信	
文学研究科	准教授	中砂 明德	
文学研究科	准教授	松村 朋彦	
教育学研究科	教授	矢野 智司	
教育学研究科	教授	辻本 雅史	担当者
法学研究科	教授	松岡 久和	
法学研究科	教授	山本 克己	
法学研究科	教授	唐渡 晃弘	
法学研究科	准教授	堀江 慎司	
法学研究科	准教授	愛知 靖之	
法学研究科	准教授	高谷 知佳	
経済学研究科	教授	今久保 幸生	
経済学研究科	教授	小島 専孝	
経済学研究科	准教授	坂出 健	
経済学研究科	准教授	島本 哲朗	
アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	足立 明	
公共政策連携研究部	教授	小野 紀明	
高等教育研究開発推進センター	教授	高橋 由典	
高等教育研究開発推進センター	教授	吉田 純	
高等教育研究開発推進センター	准教授	清上 慎一	
企画部企画課	専門職員	眞経 芳春	
人間・環境学研究科	主任	山田 祐司	
教育推進部教務企画課	課長	彦坂 伸一	
教育推進部共通教育推進課		佐々木 正富	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		太田 真弓	スタッフ

35名(＋スタッフ2名)

第2-1分科会(3階 301会議室)

所属	職名	氏名	備考
	副学長	松重 和美	
	教授	堀 智孝	
人間・環境学研究科	准教授	藤原 直樹	
人間・環境学研究科	教授	上 正明	
理学研究科	准教授	藤井 道彦	
理学研究科	准教授	大鍛治 隆司	
理学研究科	教授	北村 雅夫	
理学研究科	准教授	三宅 亮	
理学研究科	准教授	石岡 圭一	
理学研究科	教授	中西 一郎	
理学研究科	講師	加納 太一	
医学研究科	教授	小池 薫	
医学研究科	准教授	山崎 新	
医学研究科	准教授	星野 明子	
医学研究科	助教	建内 宏重	
薬学研究科	教授	加藤 博章	
工学研究科	教授	林 康裕	
工学研究科	講師	王子田 彰夫	
工学研究科	教授	田中 文彦	
工学研究科	教授	木村 俊作	
工学研究科	教授	河野 広隆	
工学研究科	准教授	山田 忠史	
工学研究科	教授	引原 隆士	
農学研究科	教授	植田 和光	
農学研究科	教授	井鷲 裕司	
農学研究科	准教授	保川 清	
農学研究科	助教	海道 真典	
エネルギー科学研究科	教授	前川 孝	
情報学研究科	教授	富田 真治	
情報学研究科	教授	中村 佳正	
情報学研究科	教授	磯 祐介	担当者
生命科学研究所	教授	松田 道行	
総務部事務改革推進室	室長	山本 淳司	
企画部企画課	一般職員	山川 美恵	
理学研究科	一般職員	中野 秋子	
教育推進部共通教育推進課		嶋村 智	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		松吉 由佳	スタッフ

35名(＋スタッフ2名)

第2-2分科会(3階 311会議室)

所属	職名	氏名	備考
	副学長	西本 清一	
人間・環境学研究科	教授	宇敷 重廣	
人間・環境学研究科	教授	内本 喜晴	
理学研究科	教授	有賀 哲也	
理学研究科	教授	竹藤 清乃理	
理学研究科	准教授	板東 俊和	
理学研究科	准教授	曾田 貞滋	
理学研究科	准教授	吉田 秀郎	
理学研究科	准教授	土井 知子	
医学研究科	准教授	福永 理己郎	
医学研究科	講師	森本 剛	
医学研究科	准教授	大塚 研一	
医学研究科	助教	松林 潤	
薬学研究科	准教授	杉本 幸彦	
薬学研究科	准教授	中野 実	
工学研究科	教授	田中 一義	担当者
工学研究科	准教授	江原 正博	
工学研究科	教授	森澤 真輔	
工学研究科	教授	中部 主敬	
工学研究科	准教授	田崎 誠司	
工学研究科	教授	吉田 英生	
工学研究科	教授	粟倉 泰弘	
工学研究科	准教授	菊地 隆司	
農学研究科	教授	伏木 亨	担当者
農学研究科	教授	野田 公夫	
農学研究科	助教	木下 政人	
農学研究科	助教	大石 風人	
情報学研究科	教授	守屋 和幸	
情報学研究科	教授	吉川 正俊	
情報学研究科	教授	山本 章博	
地球環境学	教授	前 一廣	
高等教育研究開発推進センター	教授	大塚 雄作	
企画部	部長	黒川 文朗	
理学研究科	一般職員	福田 美紀	
教育推進部	部長	里見 朋香	
教育推進部共通教育推進課		藤井 芳克	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		佐賀 祐次郎	スタッフ

35名(＋スタッフ2名)

第3分科会(地下1階 イベントホール)

所属	職名	氏名	備考
化学研究所	教授	宗林 由樹	担当者
化学研究所	准教授	平竹 潤	
人文科学研究科	教授	岡村 秀典	
人文科学研究科	准教授	田辺 明生	
再生医学研究所	教授	岩田 博夫	
再生医学研究所	准教授	玄 丞侑	
エネルギー理工学研究所	教授	水内 亨	
エネルギー理工学研究所	准教授	大垣 英明	
生存圏研究所	教授	川井 秀一	担当者
生存圏研究所	教授	塩谷 雅人	
防災研究所	教授	千木良 雅弘	
防災研究所	教授	田中 峰義	
基礎物理学研究所	准教授	國友 浩	
ウイルス研究所	教授	生田 宏一	
ウイルス研究所	教授	秋山 芳展	
経済研究所	助教	木村 拓也	
数理解析研究所	教授	岡本 久	
数理解析研究所	准教授	中山 昇	
原子炉実験所	教授	丸橋 晃	
原子炉実験所	助教	高宮 幸一	
霊長類研究所	准教授	Huffman, Michael Alan	
東南アジア研究所	教授	清水 展	
学術情報メディアセンター	助教	江原 康生	
放射線生物研究センター	教授	高田 稔	
生態学研究センター	准教授	奥田 昇	
地域研究統合情報センター	准教授	山本 博之	
放射性同位元素総合センター	教授	川本 卓男	
環境保全センター	准教授	中川 浩行	
高等教育研究開発推進センター	教授	小田 伸午	
高等教育研究開発推進センター	教授	山本 行男	
高等教育研究開発推進センター	准教授	日置 尋久	
総合博物館	教授	中坊 徹次	
産官学連携センター	教授	木村 亮	
低温物質科学研究センター	准教授	伊藤 忠直	
フィールド科学教育研究センター	准教授	徳地 直子	
こころの未来研究センター	教授	Becker, Carl Bradley	
カウンセリングセンター	准教授	村上 嘉津子	
企画部企画課	主任	奥村 東	
施設環境部施設企画課	専門員	奥林 誠	
教育推進部共通教育推進課		香海 和彦	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		橋本 志穂	スタッフ

39名(＋スタッフ2名)

第4分科会(4階 405会議室)

所属	職名	氏名	備考
人間・環境学研究所	教授	水野 尚之	
人間・環境学研究所	講師	藤田 糸子	
文学研究科	教授	吉田 豊	
教育学研究科	准教授	金子 勉	
法学研究科	准教授	島田 幸典	
経済学研究科	講師	稲葉 久子	
理学研究科	教授	齋藤 裕	
理学研究科	講師	井上 敬	
理学研究科	講師	鈴木 在乃	
医学研究科	教授	河野 憲二	
医学研究科	助教	鈴木 麻楊	
薬学研究科	教授	佐治 英郎	担当者
薬学研究科	准教授	大野 浩章	
工学研究科	教授	鈴木 修一	担当者
工学研究科	准教授	茨木 創一	
工学研究科	准教授	花崎 秀史	
工学研究科	准教授	中村 武恒	
農学研究科	教授	谷 誠	
農学研究科	教授	阪井 康能	
農学研究科	教授	梅田 幹雄	
農学研究科	講師	中崎 鉄也	
エネルギー科学研究科	教授	八尾 健	
情報学研究科	教授	山本 裕	
情報学研究科	教授	熊本 博光	
生命科学研究所	准教授	白石 英秋	
高等教育研究開発推進センター	教授	水光 雅則	
理学研究科	一般職員	相徳 裕子	
工学研究科	一般職員	朝山 伸介	
教育推進部共通教育推進課		江崎 文俊	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		原 彰子	スタッフ

28名(＋スタッフ2名)

第5分科会(2階 レセプションホールB)

所属	職名	氏名	備考
	副学長	横山 俊夫	担当者
文学研究科	教授	佐々木 徹	
教育学研究科	准教授	齋藤 智	
教育学研究科	准教授	齋藤 直子	
法学研究科	教授	木南 敦	
理学研究科	教授	熊谷 隆	
医学研究科	教授	平出 敦	
医学研究科	准教授	渡邊 直樹	
医学研究科	准教授	庫本 高志	
医学研究科	助教	澄川 真珠子	
薬学研究科	教授	高倉 喜信	
薬学研究科	准教授	西川 元也	
工学研究科	准教授	吉田 哲	
工学研究科	教授	田村 武	
工学研究科	准教授	神吉 紀世子	
工学研究科	教授	川崎 昌博	
工学研究科	准教授	山本 量一	
工学研究科	教授	木本 恒暢	
農学研究科	教授	縄田 栄治	
農学研究科	准教授	神崎 護	
農学研究科	講師	沈 金虎	
エネルギー科学研究科	教授	福中 康博	
アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	荒木 茂	
アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	小杉 泰	
生命科学研究所	教授	竹安 邦夫	
生命科学研究所	准教授	竹松 弘	
地球環境学堂	准教授	森 晶寿	
地球環境学堂	准教授	小畑 史子	
地球環境学堂	准教授	シヨウ ラジブ	
人文科学研究科	教授	藤井 正人	
学術情報メディアセンター	教授	美濃 彦彦	
学術情報メディアセンター	教授	中村 裕一	
国際交流センター	教授	森 純一	担当者
国際交流センター	教授	村瀬 哲司	
国際交流センター	准教授	青谷 正妥	
国際交流センター	准教授	河合 淳子	
国際交流センター	准教授	河上 志貴子	
国際部留学生課	専門員	為野 裕規	
工学研究科教務課	一般職員	飛田 絢子	
教育推進部共通教育推進課		中久保 隆雄	スタッフ
教育推進部共通教育推進課		多田 伸哉	スタッフ

39名(＋スタッフ2名)

分科会所属なし

所属	職名	氏名	備考
	総長	尾池 和夫	
	理事	丸山 正樹	
	監事	原 潔	
	副学長	北村 隆行	
秘書・広報室	専門員	石田 忍	総長秘書
秘書・広報室	専門職員	中植 由里子	広報担当
秘書・広報室	一般職員	林 達也	広報担当
財務部		辻本 和夫	運転手
教育推進部共通教育推進課	課長	岡田 和男	
教育推進部共通教育推進課		沖田 義孝	スタッフ

9名(＋スタッフ1名)

分科会別人数

分科会	教員	事務職員	合計	スタッフ
第1分科会	32	3	35	2
第2-1分科会	32	3	35	2
第2-2分科会	32	3	35	2
第3分科会	37	2	39	2
第4分科会	26	2	28	2
第5分科会	37	2	39	2
その他	4	5	9	1
合計	200	20	220	13

(参考)

## 部局・役職別参加者数

部局等名	役員等	教授	准教授	講師	助教	事務職員等	合計
総長	1						1
理事・副学長	3						3
監事	1						1
副学長	4						4
文学研究科		5	3				8
教育学研究科		2	3				5
法学研究科		4	4				8
経済学研究科		2	2	1			5
理学研究科		7	8	3		3	21
医学研究科		3	6	1	4		14
薬学研究科		3	4				7
工学研究科		14	10	1		2	27
農学研究科		8	2	2	3		15
人間・環境学研究科		8	4	1		1	14
エネルギー科学研究科		3					3
アジア・アフリカ地域研究研究科		3					3
情報学研究科		8					8
生命科学研究科		2	2				4
地球環境学堂		1	3				4
公共政策連携研究部		1					1
化学研究所		1	1				2
人文科学研究所		2	1				3
再生医学研究所		1	1				2
エネルギー理工学研究所		1	1				2
生存圏研究所		2					2
防災研究所		2					2
基礎物理学研究所			1				1
ウイルス研究所		2					2
経済研究所					1		1
数理解析研究所		1	1				2
原子炉実験所		1			1		2
霊長類研究所			1				1
東南アジア研究所		1					1
学術情報メディアセンター		2			1		3
放射線生物研究センター		1					1
生態学研究センター			1				1
地域研究統合情報センター			1				1
放射性同位元素総合センター		1					1
環境保全センター			1				1
国際交流センター		2	3				5
高等教育研究開発推進センター		6	2				8
総合博物館		1					1
産官学連携センター		1					1
低温物質科学研究センター			1				1
フィールド科学教育研究センター			1				1
こころの未来研究センター		1					1
カウンセリングセンター			1				1
秘書・広報室						3	3
国際部						1	1
教育推進部						16	16
総務部						1	1
企画部						4	4
財務部						1	1
施設環境部						1	1
合計	9	103	69	9	10	33	233



第 11 回京都大学全学教育シンポジウム  
京都大学における教育の将来像を問う  
— 第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する —  
報告書

---

平成 20 年 2 月発行

編集・発行 京都大学教育推進部共通教育推進課

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6513

---